
Sinji/stay night

絶音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sinjī/stay night

【コード】

N1400N

【作者名】

絶音

【あらすじ】

主人公は平凡な一般人。趣味はゲームや漫画やインドア派の人物。

そんな彼がなぜかFate/stay night の嫌われ役で負け犬役の間桐慎二に憑依しちゃった。

なんで衛宮士郎じゃねえの？アーチャーじゃねえの？と悔やむが時すでに遅し。って言うか脈略なしだったしね。

がんばれ間桐慎二！原作の知識で生き残って見せる！ついでにライ
ダーに抱きついちゃえ！

注意、間桐慎二が嫌いな人は見ないでね

P o s s e s s i o n / s t a y n i g h t (前書き)

色々がんばる……つもり！

P o s s e s s i o n / s t a y n i g h t

カカカカ、カカカカ

「……………ん〜、……………るせえ。」

朝一番の目覚まし音で起床が俺の日課。昨日は1時に寝たから5時間ぐらいしか寝てなく非常に不機嫌だった。

「んあ〜、」

しかしずっと寝てるわけにもいかず、仕方なく起きる事にした。学生時代はもう少し寝れたのになと思いき社会人になった辛さを痛感した。

と、まあアホな事を考えつつ、ふと天井を見ると……………

「……………どこだここ？」

それは見た事のない悪趣味で豪華な天井だ。

「なんで、シャンデリアがあるんだ？」

俺の部屋にはシャンデリアなど無い筈だ。そんな風に思い次は周りを見てみると、これまた無駄に豪華なタンスに絶対使わないと分かる金の皿……………何のためにあるんだ？

さらに極めつけはベッドの広さが尋常じゃない。ダブルベッドなんてもんじゃないし何より俺の部屋はこんなベッドが入るほど大きくはない。

「……何で朝っぱらから、自分で自分の部屋の狭さに虚しくならんやいけななんだ。」

そんな虚しい思いを脱却するべく俺は無駄に広いベッドから降りて顔を洗うため洗面所に向かおうとする

コン、コン、

いきなりノック音が聞こえた。しかしおかしい、俺は一人暮らしなので同居者などいるはずもない。

「にいさん朝です。起きてください。」

そしてこれまた不思議だ。俺には妹はいない……と言うより兄弟自体いない一人っ子だ。

「……にいさん？開けますよ？」

そして俺の反応がない事を不審に思ったのか（まあ、まだ眠っていると思って起こそうとしただけなんだろうけど）ドアを開けた

「あ、お、起きてたんですか。ご、ごめんなさい。」

すると目の前には超絶美少女が表れいきなり謝られた。……なしで？

「いや……その、頭をあげてくれ。」

「……はい。」

そして俺の言葉通り顔をあげて　なんで目を瞑ってるんだ？し
かも少し震えてるし。

「……………あ、あの。」

「え？あ、なに？」

「殴らないん……………ですか？」

「はい？」

突然彼女の言葉にびっくりだ。何で俺が殴る事前提なんだ？

「いや、何で殴らなきゃいけないんだ？」

「っ！？……………えっと、毎朝してますし。」

毎朝！？俺は何時の間にそんな鬼畜野郎になったんだ！？記憶は
ないぞ！……………はっ！これが俗に聞く“どわすれ”か！？とくぼつが
ぐーんと上がるのか！？

「あ、あの……………にいさん？」

「お？……………わ、わり考え事してたわ。」

「そっなんですか？」

「ああ、だから気にしないでくれ……………な？」

と、俺が優しく微笑む（結構無理やり）と、少し驚いた顔をして

「あ、朝ご飯がさめるので顔を洗って速めに来てください。」と言
い残し、部屋を出て行った。

俺は彼女が部屋を出て行ったと同時に、少し息を吐き彼女の言う
通り顔を洗うべく洗面所に向かった。(洗面所の場所は何で知っ
ていたから不思議だ。)

「ふう。」

そして、顔を洗いタオルで拭いて目の前にある鏡を見ると

「……。」

信じられなかった。

「……な……んで。」

訳が分からない。

「こんな……。」

認めたくなかった。

「なんでワカメなんかになってんだ……。」 ORZ

見事、間桐慎二になっている俺が目の前に居た。………最悪だ。

P o s s e s s i o n / s t a y n i g h t (後書き)

感想待ってますね！

S e a r c h / s t a y n i g h t (前書き)

夏ですね……仕事場は常に40 越えてるので汗だくで死にそうです……まあ、おかげで痩せれましたが。

まあ、愚痴はこのくらいで……ではでは始まりますよ〜

Search / stay night

俺は自分が間桐慎二になったのが信じられなかった……別にギャグじゃねえよ？

……おほん、つまり俺はこれが夢だと思ったわけさ。こんなアホな事が現実にかかるわけがない。第一、誰が好き好んでFateの嫌われ役の間桐慎二に憑依しなくちゃいけないんだ？どうせなら衛宮士郎だろ？ハーレム目指せるしさ

まあ、俺の欲望話はここまでにしよう。問題はこれが現実かどうかなんだが……

「……後で考えよう」

素早く割り切って俺はさっきからいい匂いが漂ってくるリビングへと向かった。……腹減ってたしね

リビングへ向かうとそこには先程の美少女　おそらく間桐桜がご飯やおかずを手際よくテーブルの上に運んでいた。……なんて言うか一つ一つの行動に気品を感じたのは初めてだ

「あ、にいさん。もう少し待っていてください」

「おう、さんきゅうな」

「……あーは、はい。その……ありがとうございます」

うむ、他人に憑依したのも人生初体験だが、お礼を言った後にお礼を言われたのも初体験だ。

まあ、しかしあれだな。ただボーっと座ってるのも暇すぎだ、少し手伝うとするか

「なあ、桜。何か他に運ぶものはないか？」

「あ……そ、それじゃ、お味噌汁を注いでいるのでそのお椀を持ってきてくれますか？」

「ん、これか？」

「あ はい。ありがとうございます」

そんなこんなして、朝食の準備は完了した。白米に焼鮭、味噌汁と漬物と、とても豪華とはいえないかもしれないが毎朝カロリーメイトで済ませてきた俺には十分すぎる食事だ

「それじゃ、いただきます」

「あ……い、いただきます」

桜と一緒に合掌して目の前の食事を摘まんでみた　ま、あれだねゲーム中にしつこいぐらい美味しいと描写されてたからどれほどのもんかなと思ったけど、変な定食屋より全然美味しくいただけました。店だしても大丈夫じゃね？

.....

桜 side

今日私は本当に久しぶりなぐらい自分の家で朝食を取っています。普通のご家庭に言わせたら少し違和感を覚える物言いかもしれませんが私にとって自分の家と言うのはあまりゆっくりはできませんでした

ですから、普段は先輩の家で朝食をいただいているんです

「……ん、この味噌汁は上手いな」

「そ、そうですか?」

「ああ。」

「ありがとうございます」

ですが今日は、にいさんがとても優しくてそれが嬉しくて……だから今日は実家でご飯を食べています。あ、もちろん先輩には連絡をしておきました。その時の先輩の声はとても驚きつつも嬉しそうな声色でした

「あ、桜」

「なんですか？にいさん」

「今日、学校休むからな」

「え？どうしてですか？」

「風邪気味で死にそうなんだ　あ、ご飯おかわり」

「は、はい。」

明らかに仮病……ですよね？ご飯おかわりしてますし

「それよりも桜。今日、爺さんは？」

「あ、お爺様は早朝からお出かけです。確か一週間ぐらい留守にすると言っていました。老人会の温泉旅行でゆっくりされるそうですよ」

「そ、そうか……」

私の答えに何故か呆れながら頷くにいさん。……何かおかしなことを言ったのでしょうか？

「ま、そう言う事だから。今日は先生に言っといてくれ」

「はい。わかりました」

「桜？どうかしたのか？」

「あ、いえ。何でもないんですが……」

「ん？」

「……ただ」

今日のにいさんと一緒に学校へ行けないのが少し残念です……
…なんて言えません。だって、恥ずかしいじゃないですか

桜side・了

.....

桜が学校に行った後にすぐ俺は行動を起こした。ま、簡単に言えば観光さ。だっていつ夢から覚めるか分からないんだから、今のうちにとつぷり楽しまなきゃ損だろ？

そんな訳で俺はまず物語の主人公である衛宮士郎の家に向かった。どんな家に住んでるか興味あったし何より描写ではかなりでかいて言ってたからね

……生まれて初めて他人の家のでかさに嫉妬しましたよ。

「って言うかでか過ぎ。ほとんど旅館じゃねえかよ。」

そう、それは一人暮らしには必要なくらいの敷地面積だ。いくら家事好きとはいえ掃除とか大変じゃねえの？

「ま、いつか。衛宮だし」

いずれは、ハーレム空間をあの家に取り上げていくだろう主人公に嫉妬しながらそう思った

「……女体に溺れて溺死しろ」

そう、呪いの言葉を吐きその場を立ち去った。しかたがないだろう？羨ましかつたんだからさ

さて、お次にやってきたのは遠坂凜の家だ。なんだか見た目は完全にヨーロッパの家みたいだ。完全に周りから浮いているな。空気が読めない人はいるがまさか家も当てはまるとは思わなかったぜ

「にしても気味が悪い感じだな。」

確か魔術師の家は他人には知られてはいけないもしくは近づかせないため敢えて気味が悪くなる結界を張る事があると誰かが言っていたような気がするが……

「確かに、お化け屋敷みたいだ。」

なんか、周りの木々がざわめいてる感じがするし、カラスの鳴き声がさつきから五月蠅いし……

「移動しよう。」

ホントにお化けが出たら嫌だから別の場所に移動することにした。つて言うか年頃の女の子が住む家ではないな。いや、住んでるのは赤い悪魔だから妥当だな。

そんな風に思ってるといきなり寒気を感じた。まさかな……と思いつつタクシーを携帯で呼んで次の目的地へ移動した。

え？お金？何か知らないけど財布に福沢さんが、数十枚ほど束になつてたからそいつを使ったよ。

次に移動したのは柳洞寺だ。やっぱり物語の重要な場所だからどうしても来たかったしね。しかしまだキャスターは来てないのかな？カレンダーを見た限りだとまだ12月10日だったし

「しっかし、階段が無駄になげえなオイ」

そう言いながら俺は柳洞寺の階段を見上げた。最終決戦になった
らあれを登るのかよ。登るだけで疲れるし

そう思い俺はふと周りを見た

「……………」

そこにはお坊さんがいた。…………寺だしね

「…………おはようございます」

「…………つむ」

「…………良い天気ですね」

「…………つむ」

「…………ではでは」

「…………学校は？」

「…………サボりです」

俺のその発言にいきなり濁っ！と叫んで俺を寺にかつぎ込んでそ
のまま座禅を二時間させられた

「…………もう、サボらぬように。」

そう言い残し去っていくお坊さん。とっても辛い体験ありがとうございます

最後に変態神父の教会へと行った

「……………」

なんて言うか胡散臭さが満開だった。遠坂の家も気味が悪かったがこの協会はそんなもんじゃない。

言ってしまうえば遠坂の家は人工的に無理やり気味悪くしたんだろが、この教会は気味の悪さが自然と一体化してるって言うか不自然じゃないんだ

「 帰ろう」

もうここに長居する必要はないな。第一ここには変態神父以外にも金ピカが居るんだ。触らぬ神に祟りなしってね
そう思い俺は踵を返し自分の家へと戻った

……………

夕方になり桜が学校から帰ってきた。そして一緒に夕食を取って話もした。桜の顔は本当に楽しそうでごっちまで嬉しくなった。

「だがこれは夢……なんだよな。」

そう言いながら小さくため息を吐く。ま、色々町並みを回れて楽しかった、と思いつつ少し名残惜しいと感じながら目を閉じた

チュンチュン、

「ん……朝か。」

そして俺は次の日小鳥のさえずりと……

「マジですか。」

物凄く悪趣味で豪華な天井を見て目を覚ました。……って言うか

夢じゃなかったのね。

S e a r c h / s t a y n i g h t (後書き)

無理やりすぎたかな？

ま、こんな感じですので期待薄でお願いします〜

School/stay night (前書き)

・・・話が進まないけど許してくださいね。

School/stay night

街を探索した次の日俺は学校に行く事になった。・・・何で社会人になってまでいかにやいけんのだ。と、思ったが久しぶりに制服を着ると何だか新鮮な感じがした。

ま、あれだね。忘れかけていた青春を思い出したってところかね？

「ほら間桐！しっかり掃除しな！」

・・・弓道場の床掃除は青春のカテゴリに入るのかな？え？何で俺が床掃除なんかしてるのかって？

まあ、元を辿れば俺が悪いんだけどね。つまり、俺が昨日ズル休みしたってばれたんだ。その経緯は俺がこの学校に登校するところまで遡る。

.....

（穂群原学園・校門前）

「あ、間桐先輩おはようございます。」

「ん？ああ、おはよう。」

「せんぱい。おはようございます！」

「おお、はよう。」

朝から気持ちの良い挨拶が交わされた。しかも女子からの割合が多いのでとっても嬉しいですたい。間桐慎二に憑依して良かったと思う今日この頃です。

「よう、慎二。」

「おはようございます。にいさん。」

そんな風に思っていると、鈍感王こと衛宮士郎君と我が妹の桜と会った。ちなみに桜は衛宮のところで朝食を済ませた。

え？俺？今日は一人寂しく朝食を取りましたよ。

「ああ、おはよう。桜に衛宮。」

「・・・へえ。桜の言う通りだな。」

「ふふ、そうでしょう？」

と、俺が挨拶をすると衛宮が俺の顔を見て微笑みを作った。
なんだ？

「いや、お前の性格が丸くなったって桜が言ってたからさ。」

「・・・それで俺の顔を見てたって訳？」

「ああ、良い顔になったよな。」

え？なにこれ？恥ずかしいんですけど。

「ふふ、顔が赤いですよ？にいさん。」

「るせっ！」

「なんだ？照れてるのか？」

「黙れって言うてんだ！」

そのまま俺は衛宮にチョークスリーパをかけた。べ、別に照れてんじゃないんだからね！

「ちょ！慎二・・・っ！」

「に、にいさん！止めてください！」

「黙らないお前がすべて悪い！」

「横・・・暴っ！・・・っ！」

「せ、先輩！？にいさんストップです！先輩の顔が青ざめていますよ！」

「心配するな桜！こいつはもともと青い！」

「そんなわけないです！」

と、俺達がいちゃいちゃ(?)してると急に頭に衝撃が走った。

「……いつっ〜」

一体誰が叩いたんだと思い振り返ってみると、おそらく俺を叩いたであろう遠坂凜と苦笑している美綴綾子がそこに居た。

「お、おはようございます！遠坂先輩、美綴先輩。」

「おはよう、間桐さん。」

「おはよ。」

そんな俺を差し置いて礼儀正しく挨拶をする桜とその他二名。

「それに、衛宮君と……ついでに間桐君もおはようございます。」

「よお。遠坂。」

俺はついで扱いですか。別にかまいませんよ？

「……衛宮、騙されるなよ？アイツはああ見えて、性格はあく
「あら間桐君、虫が付いていますよ？」(ドコッ)グフッ!？」

「し、慎二どうした!？」

「にいさん!？」

・・・遠坂め。いきなりガンドを撃つてくんじゃねえ。しかも笑顔で殺気をぶちまけるな。無意味に器用だな・・・くそつ。

駆け寄ってくれた衛宮と桜の優しさが心に沁みます。

・・・

遠坂からガンドを喰らって五分・・・何とか復活をしたです。

「いつて。」

「大丈夫か慎二？いきなり倒れたから心配したぞ。」

「ん、ありがとな衛宮。」

「「「つ！？」」「」

お礼の言葉に衛宮、遠坂、美綴が驚愕の表情を見せた。・・・なんだ？

「・・・間桐の奴が『ありがとう』・・・だって？」

「・・・確かに、少し驚いたぞ。」

「・・・なんなの？天変地異の前触れかしら？」

「・・・お礼の言葉だけでこの驚き様って、
慎二の奴、
普段から横暴な生活を送ってたのね。」

「み、みなさん！そんな態度は失礼だと思います！」

そこで俺を気遣ってくれた桜が声を大にして反論した。

「確かに、にいさんは今までお礼の言葉なんてほとんどありませんでした！」

長年過ごした妹に言われたら世話ないよね。

「けど！それはにいさんが素直じゃなかったからなんです！」

「・・・桜。」

やべっ、少し感動してくる。妹にこんなに思われてる慎二って意外に幸せもんだね。

「でも昨日からいさんは変わっただんです！私に優しくしてくれましたし、昨日学校を休んだ理由だって何か意味があるからなんだと思います！」

ん？

「だから・・・っ！」　桜、チヨットストップ。「・・・え？」

「　昨日、間桐が学校を休んだ理由って風邪じゃなかったのかい？」

「・・・あ。」

桜の馬鹿！フォローのつもりが何でピンチの状況を産んでんだ！

「　つまりお前はズルしたという事か。」

「違う！仮病を使っただけだ！」

「同じ意味だ！」

「・・・慎二、性格が変わったのに対してバカになったのか？」

「・・・プラスマイナスゼロって事かしら。」

「・・・ごめんなさい、にいさん。否定できません。」

「酷いぞ！主に衛宮が酷い！」

「ええい！言い訳するな！罰として弓道場の床拭きをしてもらおう！拒否権はないと思え！部長命令だ！」

「横暴だぞ美綴！」

そんな俺の反論に耳をかさず「うるさい！」と叫び、襟元を持ちズリズリと弓道場まで引つ張られていった。

.....

と、そんな経緯があつた。ちなみにホームルームが後十分後に迫っていると言つのに教室に返してくれませんか。

「朝早く登校してきたのに遅刻したらどうすんだ。」

俺はそんな愚痴を叩きながらせつせと掃除に励んでいた。

ちなみに美綴の奴は先程どこかへ行った。なので今は一人だけらサボることもできるが・・・

「ばれたら何言われつか分からねえしな。」

これ以上仕事量が増えたら俺は今日、早退する覚悟だ。

「へえ、良く分かつてんじゃないか。」

「ん、美綴・・・」

「ほらよ。」

懐から缶コーヒーを出して投げ渡してきたのをキャッチした。

「しっかし、全然サボらなかつたみたいだな。」

「まあね。」

一口飲みながら答える。

「間桐。本当にどうしたんだ？」

「なにが……？」

「いや……何か素直って言うか聞きわけが良いって言うか……調子狂うからさ。今までだったら逃げだしてるだろ？」

どうやら、少し困惑しているみたいだ。

「……ふう、なんだ？お前は今の俺が気に入らないのか？」

「そうじゃない……むしろ好感が持てるぐらいなんだけど……」

「なら、良いじゃないか。」

一気に飲み干し空き缶をゴミ箱に投げ込んだ。

「ナイスコントロールだな。」

「どーも。」

そして、鞆を持ち教室へ移動しようとして美綴に告げると相槌を打ち隣へ並んだ。

少しだけ女の子の匂いがした事に照れてしまった。

「なあ、間桐。気を悪くしないで聞いてほしいんだ」

「ん？」

「お前の性格が変わったかどうかなんてハッキリ言えば分からないし、今までのお前を見てきたから何か裏があるんじゃないのかって思ってしまうんだ。」

「・・・そっか。」

「けどさ。もし何も裏がなく純粹に良い方に変わってくれらんなら嬉しいんだ。」

「ああ、」

「だからさ・・・その、上手く言えないが頑張れよ。」

おそらくは今まで間桐慎二が改心してくれたらと思っていたんだろう。それは一人の友人としてか、弓道部の部長としてか、可愛い後輩の兄だからかは分からない。それでも切実な願いなのだろう。

「ああ、分かったよ。」

けれど俺は間桐慎二じゃないから正確にはもう変わってる、だがわざわざ否定的な事を言わなくても良いだろう。

それにこんなにも嬉しそうなお顔が見ただけでも儲けもんだろ。

School/stay night (後書き)

次回は急展開の予定です。

あの人がまさか聖杯戦争の味方になるなんて・・・ヒントは女性ですよ。

Caster/stay night (前書き)

いつの間にかお気に入り件数100突破&評価点400超えたっす。
どうもありがとうございます！

更新が遅いのにありがとうございます。

後書きの方でお遊び半分にワカメの固有結界を書いてみました。
ではどうぞ〜

Caster / stay night

Fateの世界に来て十日ほど経つ。それまでにはいろいろな事があつた。

まず最初はクラスメートが驚いていた、まあ当然と言えば当然なのかもしれない。いきなり性格が変わってしまったってしたら不思議に思うのが普通だ。とりわけ柳洞一成には・・・

「ええい！間桐慎二！何を企んでいるんだ！」

とか・・・

「化け物の類にでも取りつかれたか！」

などなど言われたが、最後の最後で

「服を脱げ！今から徐霊をしてやる！」

と、公衆の面前で言われた時にはマジ驚いた。何故か女子期待の眼差しを向けてきたので言い訳として・・・

「衛宮は昨日遠坂と一緒にだったぞい。」

と、柳洞だけに聞こえるように言った瞬間に全速力で衛宮のもとに駆け寄り服をはぎ取るうとしていた。　　「ただ遠坂が嫌いなんだ？」

・・・何人かの女生徒が写メを撮ったり、「BLの材料・・・っ！」と興奮気味に言っていた事には甘んじて目を瞑ろう。

「ほら！逃げ衛宮！今から徐霊を・・・っ！女狐の悪霊を
っ
！」

「慎二！一体何を言ったんだ！？ちよ・・・っ！逃げるな！」

衛宮が何か言っていたが聞こえない振りをしよう。

続いて家に帰れば爺様が返っていた。老人会の温泉旅行が済んだようだ。

爺様の眼力は大変素晴らしく、殺気に満ち溢れていてちびりそうになったのはここだけの秘密だ。

お土産としてなぜか紅葉まんじゅうとシカ煎餅を買った・・・
どこへ行ったらこの二つが買えるのか凄く気になる。

そいでもって今日、放課後に呼び出され今は女の子と二人っきりで学校の屋上にいる。

・・・告白の雰囲気がブンブンする。

「さあて、何を考えてるのかしら？間桐君。」

目の前にいるのがアカイアクマでなければの話だが・・・

「ふん・・・っ！」

「ぐほお！？」

「余計な事を考えたら殴るわよ。」

やる前に言ってくれ。ついでに言つとお前はどこでリバーブローを覚えたんだ？

「おほん、じゃあ本題に戻るんだけどアンタ何を考えてるの？」

「うぐう・・・か、考えるも何も・・・。」

「惚けないでちょうだい。今この時期にいきなりあんたが改心するなんて不自然にもほどがあるわ。」

もうすぐ聖杯戦争が始まるからか気が立っているようだ。

「・・・むう。」

「ま、アンタが何を考えてようとかまわないけど」

そう言いつつ スッと目を細めた。

「桜に何かしたらタダじゃ済まさないわよ……」

確かな殺気を込めながらそう言ってその場から去って行った。

「……………あゝ恐かった。」

全くもって洒落にならん。あれが魔術師の殺気と言つ奴か……。

「汗びっしょりだ。」

手の平を見つつそう呟く。 否、実際は体中に大量の冷や汗をかいているのが分かる。

「……………ふう、今はそんな事より速く行かないと。」

正直に言つと遠坂に怪しまられた時は焦った。なぜならとある目的のためこの世界に来てから毎日欠かさず行っている場所があるから“ある意味”では的外れでないからだ。

「今日こそ出会えますように。」

雲行きの怪しい空を見上げながらそう祈りつつ鞆を持ち目的の場所まで走った。

.....

（柳洞寺・階段前）

雨が降っていた。けして強い雨ではないがしかし外出するには少し戸惑ってしまうような雨脚だ。

そしてここは柳洞寺前の道、タダでさえ人通りが少ないこの道は雨により全くと言っていいほど人影など無かった。唯一つの例外を除いて。

そう、そこには一人の女性いた。否、そこに居る女性は消えかかりそうなくらい生気が薄れてしまっていた。

その女性の服装は現代から見れば奇怪な服装。口元しか見えないほど深くフードを被っており全身を紫と黒のローブで包み込んでいた。

瞬間、強い風が吹き顔をすっぱり覆うフードが取れた。

見ればそこに居るのは百人いれば百人が、千人いれば千人の男が、万人いれば万人すべての男性が惚れこむほどの美しい女性だ。

だが、彼女は人ではないのだ。

そう、この冬木市で始まる聖杯戦争のために喚び出されたサーヴ

アント・・・キャスター。

そして今キャスターのロープには日常では、けしてお目にかかる事がないほどの血が付いている。それは彼女のものではなく“彼女が刺し殺した相手”の返り血なのだ。

その相手は自身のマスター。彼女はマスター殺しをし行く当てもなく彷徨っていた。

「あ、は・・・はははははははは。」

キャスターは笑う。自身が殺したマスターを思い浮かべながら。

彼女がマスタを殺した理由は単純明快。気に入らなかったからだ。度量は小さく魔術師としても才能があるわけでもないつまらないマスター。女性は抱く道具としか思わない非常に不愉快なマスターだった。

だから殺した。簡単な計略で令呪を全て使わせ抵抗できないようにして殺した。

「あはははははははははははははは・・・。」

笑いが止まらない。生前と合わせても初めてじゃないのだろうかと言っぐらい笑う。

「ははは・・・。」

笑い疲れたのか雨で地面が濡れているのはお構いなしと言っ感じにへたり込む。

もう、何も考えたくない・・・早く楽になりたい。

生气は完全に失われ元々単独行動が得意でないキャスターの魔力は底を尽きかけていた。

どうせ消えてしまうなら・・・早くして。

元々、無理矢理呼び出された存在なのだ。意志も目的もないのだから消えてもかまわない　そう思い静かに目を瞑り最期を迎えようとした。

「あゝやゝっと見つけた。」

しかし、それを遮るように男の声が聞こえた。

「・・・・・・・・？」

「笑い声が聞こえなかったら確実に見逃してたぞ。」

見上げるとそこに居たのは・・・

「・・・・・・・・ワカメ？」

「だあれがワカメじゃあ！」

いきなり怒鳴られ眉をしかめる。

「騒がないでちょうだい・・・・・・・・それで何？」

「おお、そうだった。サーヴァント……で良いんだよね？」

「……っ！あなた……魔術師、じゃないわね。まさか、マスターなの？」

魔力が全く感じられなかったので魔術師の可能性はゼロだがマスターになっている可能性はある。例えばはぐれサーヴァントを使役している可能性も否めない。

「予定ではあるわな。」

「……？どう言う事？」

「そのまんまの意味さ。マスターになる予定だった事。」

「それで？そのマスターになる予定の人はどうしたいの？」

順当に考えればこの場で殺すのが一番だ。摘める芽は早めに摘んでおいて損はない。

だが、彼が発する言葉はキャスターの予想より上だった。

「俺のサーヴァントになれ。」

「っ！」

……驚いた、それがキャスターの感じた事だ。クラスも何も分からないサーヴァントに対しての発言じゃない。

「俺はこの聖杯戦争で被害を最小限に食いとどめなきゃいけない

んだ。だからお前に死なれちゃ困る。」

「……………」

二度目の驚きだ。この男は私がすでに魔力を尽きかけていることを見抜いている。

「貴方は一体……？　っ！」

質問しようとしたが急に体へ力が入らなくなった。どうやら魔力の量がほとんどなくなっているようだ。

「…………ヤバいな。話は後だとりあえず一旦助ける。それで良いか？」

「勝手になさい。元より消える身なんだから。」

キャスターのどつちとも取れる発言を聞き急いで腕を捲り持っていたカッターで軽く切った。

「生き血を吸えばある程度魔力を補充できるんだろ？」

「…………要領は最悪に悪いけどね。」

男は無理やり傷口をキャスターの口元へ近づけた。

「うん……………」

キャスターは自身でも気付いていないのだろう。生きようとする本能に逆らえないまま傷口をなめ僅かながら魔力を補充する。

「・・・どうだ？」

「全然足りないわ。」

「仕方がないだろう？とりあえずこれで家まで持たせる。」

そう言いつつ男はキャスターをおぶった。

「ちょ・・・っ！」

「立っているのもつらい筈だ。素直におぶられてろ。」

有無を言わせない発言にカチンときたがそれを表すほどの元気のない状態だ。

「ねえ、貴方の名前は？」

いくら何でも自分を助けようとしてくれる（不本意ではあるが）相手の名前を聞かないのは失礼だろう。

「間桐慎二・・・だ。」

何故自分の名を言った後に落ち込んだのかキャスターは理解不能だった。

Caster / stay night (後書き)

I am the bone of my wakame

(体はワカメで出来ている)

water is my body and Salt content
is my blood

(血潮は塩分で心は水)

I have created over a thousand
a wholesale market (幾たびの卸し売り市場
を越えて不敗)

Unknown to Death

(ただの一度も敗走はなく)

Not known to Life

(ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create
many seaweed marine plants

(彼の者は常に独り海藻の丘で勝利に酔う)

Yet those hands will never hold
anything

(故に、生涯に意味はなく)

So as I pray unlimited wakame
works

(その体は、きつと無限のワカメで出来ていた)

A b s o r b / s t a y n i g h (前書き)

今回は僅かながら性的な表現をしてしまいます。

本当に僅かですよ。それでも良い方はどうぞぞぞ

Absorb / stay night

「ん・・・眩し。」

慎二がキャスターを助けた翌日、異様に重い体を起こし朝を迎えた。

今まで感じた事がない体の不調は朝起きたばかりと言う事と絶妙に融合しあって慎二の体と気持ちをさらなる下降線へと追いやる。

「・・・・・・・・。」

横を見てみるとそこには生まれたままの姿で気持ちよさそうに寝息を立てているキャスターがいる。朝の生理現象とのダブルパンチで愚息の状態だけが異常に元気になってしまった。

そんな素直すぎる体は自分のせいじゃなくこの体のせいなんだと訳の分からない言い訳を心の中でして無理矢理納得。学生服とキャスターへ着せるための大きめの上着を取りに行った。

何故、キャスターが裸で居るのかそれは昨夜、キャスターを助けるために魔力補給を施したからである。

・・・・・・・・

「……はっ……はっ……はっ。」

慎二はキャスターを助けるため急いで自分の家へと向かった。家までの距離は遠いのでタクシーを呼べばいいのだがこんな日に限り携帯電話を忘れてきてしまい自分のアホさ加減に悪態をつきたくないがそんな暇もない。

なぜならキャスターの呼吸が段々弱くなってきているのが背中越しに伝わってくるからである。

時折、休みながら血を吸わせているが幾分少量でさらに間桐慎二の体は魔術師ではない。その二つが相まってキャスターの魔力補充が十分ではないのだ。

さらに、慎二自身も時折とはいえ血を吸わせながらの移動のため少しずつ体に力が入らなくなってきている。

今のこの状況は明らかにギリギリだ。自分自身が少しでも失速してしまえばキャスターは消えてしまう。

慎二はそれだけは絶対に避けるために急いだ。キャスターが消えてしまうのは戦力的にもさらには目的のためにも絶対やってはいけない事だからだ。

「……くっ！」

だからこそ走る。こんなところで躓く訳にはいかないのだから。

（間桐邸）

「はあ・・・はあ・・・」

何とかキャスターを現界させたまま家に着く事が出来た慎二は、駆け足で自身の部屋まで走った。桜に今のキャスターを見させるわけにはいかないのだ。

なぜならキャスターのロープにはいまだ血がべつとりと付いているためである。

「キャスター、大丈夫か？」

「・・・はあ、はあ、これが・・・大丈夫の様に・・・見えるのかしら？」

息は絶え絶えだが悪態を尽く元気はあるようだ。　　が、やはり虫の息なのは変わらない。このまま何もしなければ跡形もなく消えてしまうのだろう。

何も打開策が思いつかないくせに妙に頭がクリアになるのが分かる。

「キャスター、君を助けるにはどうすればいい？」

「・・・簡単よ、私を・・・抱きなさい。」

慎二は一瞬キャストが何を言ったのか分からなかった。しかし頭が理解すると慎二の顔が赤らめ僅かながら距離を取る。

「ば、ば、ば、バカなことを言うなよ！そ、そ、そ、そんな事出来るわけないだろ！」

焦り過ぎて首と両手をブンブン振っている姿がおかしくキャストはクスリ、と笑う。

「ふふ、なら私は消えてしまっわよ？それでもいいのかしら？」

キャストは意地悪そうな顔をしながらそう言った。その時慎二はああ、この意地悪そうな顔が素なんだな、となぜか妙に理解し納得した。

「け、けど！血を吸えば魔力の補充が出来るんじゃないのか・・・っ!？」

「・・・はあ、それはね吸血鬼の類だけよ。確かに私自身も魔力に変換できるけど、それよりも精を魔力に変換したほうが効率も補充率も高いわ。」

なぜ虫の息なのにこんな悠長に喋れるのか疑問だが慎二はそこまですぐ気が回らないみたいだ。それはキャストの目を見た瞬間体が動かなくなっただからだ。

「キャ、キャス・・・タ？」

動かない慎二を余所にキャスターは自身の服をはだけさせながら馬乗りになる。

「貴方には聞きたい事がいくらでもあるけど今はとりあえず黙ってなさい。」

そう言うとキャスターは慎二へ軽く口づけを交わしさらに押し倒す。その時慎二は ああ、猛獣に食われる草食動物の気分ってこんな感じなんだなあ。と、何故か冷静になっていたのだ。

.....

と、昨日は行為に及びさらにキャスターの魔力がかなり枯渇していたのから回も搾り取られたので疲労困憊なのである。
しかし、時は待ってくれないので自らの頬を叩き無理矢理眠りにつきそうな脳と体を起して学生服を着た。

「.....ん。」

キャスターがベッドで寝返りをうち体を反転させると懸けていた

掛け布団が落下。露になる姿に若干顔を背けながら適当な上着を取りキャスターへとかけた。

よほど疲れていたのか起きる気配など無く心地良さそうな寝顔をしている。

「飯にしよう。」

今朝は桜が家に居る筈なので温かい食事でありつけるな。と、少しだけ嬉しそうな表情を浮かべる慎二。

朝の栄養補給はその日の活力の源になるので大切なのだ。

「あら？どこへ行くこうとしてるのかしら？」

しかし、なぜか今まで気持ちよさそうに寝ていたキャスターが自分の上着を羽織ったまま目の前に立っていた。

「あ・・・ああ、おはようキャスター。気分はどうだ？」

「まあまあ良い感じね。」

と、朝も挨拶を交わす二人。これだけを見ていると何ら不思議のない光景ではあるが、慎二は背中に冷や汗をかいているのだ。その理由はキャスターから不機嫌の感情を身に受けているからである。

何故キャスターが不機嫌なのかは分からないがそこには触れないで置こうと思った慎二。

「ああ、キャスターってさ朝ご飯いるかな？」

とにかくご機嫌取りのため食事に誘おうとするが却下されそんな事より聞きたい事がある。とキャスターに言われ昨日言ってい

た事かな？と思いだしベッドに腰をかけながらキャスターが何を聞きたいのか耳を傾けた。

「まあ、聞きたい事はいろいろあるわ。貴方は何故私があそこに居るのを知っていたのか。どうしてサーヴァントだと見抜いたのか。さらには私のクラス、キャスターであるかどうかやって見抜いたのか。などなど・・・ね。」

確かにキャスターからすれば不自然だ。そしてその不自然さを自分で解決できないので悔しい。

それが不機嫌になっている理由・・・完全なる八当たりである。

「まあ、確かに気にはなるわな。」

慎二自身も納得し、どう説明しようかと考える。下手な事は言えない状況なのは明白なのだから。

そして時を同じく、桜がちょうど慎二の部屋の前に立ちノックをした。昨夜、慎二の部屋でへんな物音が聞こえたのが少し心配になりチョットだけ早めに起こしに来たのだ。

しかし、中から返事はなく代わりに激しい物音が聞こえてきたので桜はその場に居た堪れなくなりすぐさまドアを開ける・・・と、そこに居たのは

「に・・・にい・・・さん？」

「ぐ、グッドモーニング・・・桜さん・・・。」

とてつもない美女を裸のまま抱き上げながら移動しようとしている自分の兄の姿だったのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

今日は学校を休むことにした間桐兄妹は家族会議を開いた。（慎二&桜、キャスターが加わって）

「・・・詰まる所、にいさんは・・・キャスターさんを助けたのですか？」

と、適当な事だけを言っただけで大事な事は省きながらの説明をし、桜が簡潔にまとめてくれた。

「まあ、そう言う事だ。」

そう言いながら慎二はチラリとキャスターを見る。今現在のキャスターの服は桜から借りてきたものだ。少しキャスターが胸のあたりが空いているような仕草をするが気にしないであろう。そこ

に触れれば慎二は灰と化してしまうのだから。

「しっかし桜。いくらなんでも休むことはなかったんじゃないのか？」

「な・・・っ！何を言ってるんですかにいさん！良く考えてみてください！朝起こしに来たら自分の兄が裸の女性を抱き上げてるってどう考えても非常事態でしょう！」

ああ、どう考えても非常事態だ。だから桜が取った行動は特別おかしくなど無いのだ。

ちなみのなぜ慎二がそのような行動を起こしたかと言つと

？、キャスタ に隠れるように指示

？、キャスターが面倒くさがりそれを拒否

？、その反応に慌てた慎二が押し入れに隠そうと無理矢理抱き上げる。

？、その瞬間、桜が扉を開け見つかってしまった。

と、一連の流れがあった。

「むう。」

「まあ、お譲ちゃんの言う通りね。昨日は色々やったから・・・
ねえ？」

誤解を招く・・・と言うより事実なのだが、いきなりの発言に桜は驚き慎二に詰め寄るが何も言い訳できない慎二は苦笑いを浮かべながら適当にかわしていくしかない。

「そんなやり取りを眺めながらキャスターはため息をつく。

「ねえ、そんな事より。」

「・・・あ、えつとなんですか？」

「いったん慎二を問い詰めるのを中止してキャスターの方へ向きなおす。」

「この服以外にないのかしら？サイズが合わないの。」

「そう言いながら再度胸もとをパタパタさせる。その行為は慎二にとって目の保養である。が目敏くそれを桜が見つけ注意しキャスターへそれ以外はないと発言した。」

「キャスターはその時 年頃の女の子がこんな地味な物で良いの？と深く思ったそうだ。」

「ならば、今から買いに行かねえ？」

「慎二の発言に溜息を吐く桜とキャスター。まだ聖杯戦争は始まってないとはいえ何を言ってるんだコイツ？みたいな顔をしている。」

「イヤ、だってさ聖杯戦争って大体1〜2週間ぐらいはかかるもんなんだろ？」

「・・・まあ、最低でも1週間は堅いわね。」

「しかもまだ始まってすらないだろ。だったら身の回りの物は必要じゃね？」

まさかとは思うが、お前ずっとあの陰湿なローブで居るつもりか？」

慎二の物言いに少しだけカチンときたキャスター。自分のものを悪く言われればだれだって気分は悪いもんだ。

たとえ黒と紫のくらくらい彩色しか施してないとしても、たとえ気に入らなかつた前マスターの血がべつとり付いているローブだったとしても、たとえ自分は可愛いものが好きで実を言つとフリフリ服が着てみたいとしても……

「ぜひ、買いに行きましょう。」

「キャスターさん!？」

「やはり必要な物はあると思うの。たとえそれが聖杯戦争に関係なくても必要な物はあると思うの。ええ、けして可愛らしい服を着てみたいとかじゃなくて必要な物はあると思うの。」

もう、最後の方は支離滅裂である……が、キャスターの堅い意志は曲げられないのだ。

いざ行かん、フリフリの服を求めて……

Absorb / stay night (後書き)

中途半端で終わってすんません。m() m

では今回は遠坂凜の固有結界ですよ

I am the bone of my treasure
(体はすっかりで出来ている)

jewel is my body and money is
my blood

(血潮は宝石で心はおカネ)

I have created over a thousand
a big senility
(幾たびの大ボケを越えて不敗)

Unknown to Firmly
(ただの一度もしつかりする事はなく)

Not known to Come out with
argument
(ただの一度も正論もない)

Have withstood pain to create
many treasure
(彼の者は常に独り財宝の丘で勝利に酔う)

Yet those hands will never hold
anything

(故に、生涯に意味はなく)

So as I pray unlimited treasures
are works

(その体は、きっと無限のうっかりで出来ていた)

これが発生した効果は皆がうっかりの状況になってしまふ。例えば“うっかり”攻撃を外したり、“うっかり”自分の弱点を言ったり、“うっかり”恥ずかしい事を言ったりしてしまふ・・・と、こんな事を延々と“うっかり”繰り返してしまふのだ。

ちなみに前回のワカメ編では、地面からワカメが無限に出てきて絡みつくが所詮はワカメなのですぐ取れる・・・そしてまた絡みつくといった悪循環の効果がある。

Candy / stay night (前書き)

なかなか本編が始まらない・・・(-_-)

そのくせ蟲爺様の倒し方の案がどんどんわいて出てきます。

Candy / stay night

（新都）

朝からのやりとりで新都に到着した慎二達はデパートへと足を進める。ただ歩いただけで視線を感じてしまつのはやはりキャスターと桜の美女ツートップが並んで歩いているからだろう。・・・なぜなら、殆どの男性が振り向いてきたりちらちら視線を寄こしたりしてきたからだ。

と、まあそんな視線を受けながら無事に目的のデパートに到着・・・
・で今は女性服専門店の『キャンディ』と言う店に来ている。周りを見れば女性しかいないため凄く居た堪れない。慎二としては外で待っていたかつたのだがキャスターが力づくで引きずり込んだ。

キャスターって最弱のサーヴァントだったんじゃないの？と疑問に思ってしまう慎二である。

「・・・キャスター、まだか？」

「ちよつと待ってて。いま試着してるんだから。」

と、試着室のカーテンから顔を出しながら言ってくるがここで勘違いしないでもらいたい。確かにキャスターは試着室に入っているのだがその中に桜もいる。

「キャ、キャスターさん。それはチョット・・・。」

「何を言ってるの。若いんだからこれぐらいしないと靡なびかないわよ？色々。」

・・・まあ、桜が着せ替え人形の状態になっているわけだ。しかし心なしかキャスターの声がウキウキハイテンションの様に聞こえてくるのは気のせいだろうか？

まあ、Fate本編でセイバーをさらった後に何故かドレスを着させて侮辱の限りをしてた様な・・・と、思い出せるだけの原作の知識を頭から掘り起こしている慎二。実際、キャスター自身も自分で着るより他人を着せかえたりする方が楽しくて仕方がない。(可愛らしい服が似合う人限定らしい。)

「ほらほら。ちゃんと慎二に見せなさいって。」

「あ・・・！キャスターさん。押さないで・・・っ!」

そして、キャスターの仕立てが終わったのか桜の背中を押しながら試着室から出てきた。

ちなみに、キャスターの仕立ては上はタートルネックノースリーブで色はピンクで決めていてすごく可愛いのが体のラインがしっかり強調・・・もといおーぱい強調。さらに、下はシフォンミニスカートでこれまた可愛い・・・と言うより少しエロい。

「・・・ど、どうですか？にいさん。」

極めつけに頬を赤らめながら上目使いで聞いてくるもんだから慎二としてはドギマギしてしまう。

「ブハア!」

・・・最終的に鼻から血を吹いてしまった。

「に、にいさん!？」

桜が心配して慎二のもとに駆け寄るがさらに吹いてしまう慎二。キヤスターはそんな慎二の反応が想像以上だったのか　クツクツ、と笑っている。もう爆笑したい気分の様だ。

「おや・・・？桜じゃないか。」

「・・・それに、慎二　アンタまで。」

と、此処へ買い物に来たのか遠坂凜と美綴綾子がやってくる。鼻血を出してる兄を抱しながら礼儀正しく挨拶する桜と、「・・・おう。」と、素っ気なく挨拶をする慎二。

「桜もここへ買い物に来たのかい？」

「“も”つて事は・・・美綴先輩達もですか？」

「ああ、まあね。」

と、笑顔で紙袋を掲げる美綴。どうやら会計の方は済んでいたみたいだ。

「にしても間桐さん、貴女がその服を選んだの？」

今度は遠坂が桜の試着している服を見て尋ねる。・・・確かに桜のイメージは清楚な服　と言うより行き過ぎて地味めな感じが多いのだ。

「あ……いえ、この服を選んだのは……」

「私よ。」

桜が若干恥ずかしそうにスカートの裾を押さえながら振り返り、キヤスターが名乗り出た。

「……なあ、間桐。そちらの物凄い美人さんは……？」

美綴が慎二へと質問をしてきた。慎二は別に誤魔化す必要はないかなあと、思いつつ紹介を始める。

「ああ、彼女は最近家に住み始めたキヤ……。」

と、そこでふと遠坂がいる事に気づく。……いや、元々気付いていたが“キヤスター”と紹介するのは色々ヤバいかもしれない。つゝか絶対ヤバい。

「キヤ……？」

いきなり言葉を詰まらせたのを不審そうに見てくる遠坂と美綴、これではマズイと思った慎二は咄嗟に思いついた名前を言った。

「キャサリンさんだ。」

瞬間、桜が物凄い勢いで吹きだした。ふとキャスターの方を向いてみるとこれまた凄くしかめっ面をしている。

「ああ、外国の方でしたか。通りで髪の色が少し変わっていると・
・。」

しかし、慎二の機転で美綴と遠坂が納得。

「え・・・ええ、そうなのよ。暫く間桐さんの家で御厄介になるの。」

しかし、そこはキャスター。しっかりと対応をしていく。

「ですけど、凄く日本語がお上手なんですな。」

「もともと父が日本好きでね、その影響かもしれないわ。昔っからよく日本語で会話をしていたのよ。」

遠坂が優等生モードに入って話す。そしてキャスターもどこから仕入れたネタか知らないがありがたきたりな奴で言い包める。

「・・・って言うかお前ら学校はどうした？」

そう、今まで普通に話してたから気付かなかったが今日は平日。学校は普通通りあるはず。

「ああ、アタシはこの間弓道部の部長として休日に他の学校の顧問とデイベートをしていたんだよ。だからその振替みたいなもん。」

「……それって、藤村先生の役じゃないですか……。」

桜は呆れたように呟く。おそらくこの振替も公式的ではなく藤村大河が無理やりやったのだろう。

「私は違うわ。私はちゃんと仮病を使って休んだんだから。」

遠坂の言い分に 仮病にちゃんともくそもないだと、言わずもがなだれしもが心の中でそう思ったのだった。

……ちなみに、慎二達にも同じような質問が飛んできたがそれはすべて桜に丸投げした。

「待ちな間桐！朝っぱらからなにハレンチな事をしてんだ！」

「桜に頼ったオイラが馬鹿でした！」

サーヴァントの事を除いて嘘偽りなく正直に話した桜なのであった。

.....

慎二達はその後すぐ遠坂達と別れた。・・・ちなみに何で遠坂にキャスターの事がばれなかったかと言うと、魔力遮断のアミュレットを身に着けていたからだ。

と、まあもうすぐお昼時なのでチョット本格的なイタリアンの店にでも行こうとデパートを出てしばらく歩くことにした。

「.....」

「.....」

「.....」

しかし、そんな思惑はもろくも崩れ去る。日常と言うのは儚いものだ。当たり前だったものなのにチョットした事で崩れ落ちるのだ。だがそれは悪い事ばかりではない。

例えば間桐慎二に憑依してしまった者も。

例えば兄が優しくなった桜も。

例えば行く当てもなかったキャスターも。

三人ともいきなり自分の日常が変わってしまったがそれはそれで良い方向に向かっている。・・・だが

「・・・・・・・・。」

「・・・・にいさん。」

「・・・・なんだ？」

「・・・・この人は誰？」

三人の目の前でぶつ倒れながら慎二の足首を砕くのかと言つぐらい思いつき握りしめている赤髪の人に出会ったとき　ああ、平和って短いんだなあ。と。シミジミ感じてしまった。

「・・・・俺が知るかよ。」

キャスターの問いかけも慎二自身全く知らないので答える事が出来ない。

「・・・・・・・・すみません。」

いきなり話をかけられてドキッとしてしまう慎二。

「な・・・・なんだ？」

「お願いが・・・・・・・・あるんです。」

出会ったばっかりだがこの尋常じゃ無い雰囲気を押された慎二は何かと聞いた。

「何か・・・食べ物を・・・。」

要は腹が減って倒れた・・・と言うわけか。

事情が馬鹿げているだけに呆れ返ってしまう。

「恵んでくれない暁には貴方の頭を砕くと約束しましょう。」

「ちよつと俺達も飯を食いに行こうとしてたんだ。一緒に来いよ。」

そんな約束は守らせるわけにはいかないんだ。と、言わんばかり慎二が即決して食事に誘った。

Candy/stay night (後書き)

次回も本編ではありません。

後、一話くらいかなあと思います。もう少し待っててください

D a m e t t / s t a y n i g h t (前書き)

本編はまだまだですたい

そして短いです。

「……………」

慎二、桜、キャスターの三人もその勢いに押されて箸が全く動いてない。

食べ放題の店にして良かった。

慎二がそう心に思ったのは無理もない。

「あと……………美味いか?。」

「……………そうですね。多少栄養が偏ってしまうのは難点ですが、エネルギーの補給には最適です。」

……………どうにも会話が成り立っていない。

「いや……………味の事を聞いているんだが。」

「……………?味なんて私には関係ないです。お腹にはいればみんな同じでしょう。」

ピシッと、何故か店内の空気が固まった。

「……………そんな事はないと思うが。」

「いえ、同じです。」

と、躊躇なく言い切った後に スッと箸を机の上に置く。

「ご馳走様でした。」

合掌し礼儀正しくお辞儀をした。

「ん？・・・なあバゼット、デザートは食べないのか？」

ここは焼き肉が主の食べ放題のお店だがそれ以外にも種類が豊富でデザートなども多数の種類がある。慎二達も今からデザートにありつこうとしていた。

「いえ、これ以上食べると栄養過多になってしまいます。」

「けどさ、甘いものは好きだろ？」

全国共通・・・とまで行かないかもしれないがほとんどの女性は甘いものに目がない。

「確かにそうです・・・が、これ以上食べると体に余分な栄養が行き渡り脂肪になってしまいます。」

何故かそう言った瞬間に桜だけではなくその店に居る女性陣の手が止まってしまった。

「脂肪になるとそれを落とすため多くの運動をしなければいけない。・・・例えばチョコレートケーキのカロリーが500、グラムでいいますと約36グラムも減らす運動をしなくてはなりません。これは意外に大変な事。」

しかも今回は焼き肉も食べているのです。我慢するのは当然です。

┌

何故か店の中の女性達がみんな一斉に棚へデザートへ戻していった。

「でもあなたの場合、偶には良いんじゃないかしら。」

今まで沈黙していたキャスターがそう言うが……

「……私の場合、何故かすべて胸に脂肪が行くので……私にとっては邪魔でしかないんですけどね。」

瞬間完全に場の空気は凍った。何故いきなり店内の窓ガラスにヒビが入ったのかはスル　しよう。

「大体こんな大きな胸など邪魔で仕方がないんです。動きにくいし肩こるし……。」

そう言いながら自らの胸を持ち上げ強調する。

「……。」

「ニイサン……？ナンデ、ジットミツメテイルンデスカ？」

「何でもないぞ。うん。」

片言でしゃべってくる桜に恐怖し後ずさりしていく慎二。

「大体、毎朝手間がかかり過ぎるんです。包帯ぐるぐる巻きにしなきゃいけないから……。」

「……？どう言う事？下着はつけてないの？」

謎な発言をするバゼットを不審に思ったキャスターが聞き返す。

「下着・・・？ ああ、Tシャツの事ですか。アレは寝るときだけです。日中はさらしで・・・って、貴女達も同じでは・・・？」

完全に会話がかみ合っていないかった事実がそこにはある。

「・・・・・・・・ブラジャーは？」

桜が小声でたずねる。

「ぶらじゃー・・・とは？何か新しいエンターテイメントですか？」

ブラジャーからエンターテイメントの発想が出来る頭が素晴らしい。・・・と言うより今現在ブラジャーをしてないあたりが女性としてダメな人、通称ダメツトさん。

「「「・・・・・・・・ブハア！！」「」」

・・・なぜか店内にいた男性陣の鼻から赤い花が咲き乱れた。

「・・・・・・・・フ、だらしない。」

「鼻を押さえながら言っても説得力はないわよ。」

キャスターの鋭い突っ込みが耳に痛い。とまあ、このままでは収拾がつかないのでブラジャーについての説明を（桜が）した。

「……うう、何で私がこんな場所で。」

羞恥心でいっぱいになる桜である。

「しかしそんな良いものがこの世にあるとは……完全なる誤算ですね。いえ、ある意味罨です。」

カテキンたっぷりのお茶を飲んだかのような面白い顔をしているバゼット。

「どこがだよ？……しゃあねえな。」

そう言いながら自らの財布を取り出しいくつかのお札を桜に手渡した。

「そいつと一緒に買いに行つてこい。」

「いいのですか？慎二君。」

「良いも何も……なきや不便だろ？」

心なしか目をキラキラ輝かしてるバゼットに対し溜息を吐きながら答える慎二。

「いろいろと教えてやれよ桜。」

「あ、はい。」

そう言いながらそっと桜に耳打ちをする。

「……それと、買い終わったらそこらのホテルに泊めて帰って
こい。」

「……連れて帰らなくて良いんですか？」

「……あのな桜、魔術師の家にホイホイ見知らねえ奴を連れて
くる奴があるか。」

第一爺さんに見つかったら面倒だろ？

と思いながら桜に説明し、桜も慎二の意図が分かったのか小さく
頷く。

「それでは行きましようか、バゼットさん。」

「そうですね。では行ってきます慎二君。」

その後、バゼットと桜はすぐに店を出てランジェリーショップへ
と向かった。

「……………ぶづ。」

疲れたのか軽く息を吐く。

「……………慎二。」

「ん？なんだキャスター。」

神妙な面持ちでキャスターは慎二の方へと向く。

「あの女性は」

「魔術師だつて言いたいんだろ？」

「……！ 分かっていたのね。」

「ああ、それに魔術教会の方から派遣された人物だつて事も……ランサーの元のマスターだつて事もな。」

そう言いながら持っていたフォークでデザートを一口サイズに切り口へと運ぶ。キヤスターはと言うと慎二の言葉に驚きを隠せなかった。

「……なんでそこまで分かっているのかはこの際置いとくわ。」

「どうも」

キヤスターは一息つきながら紅茶を飲む。

「それで？どうする気かしら？」

「なにが……？」

「“なにが？”じゃないでしょ。彼女への対応はどうするの？つて聞いているの。このまま放っておくか牙が向かないうちに殺しておくか」

「モチ、仲間に引き入れるさ。」

「……はあ、なんとなく予想はできてたけどね。その反応は。」

何故か溜息を吐きながら言うキャスター。

「それによ、アイツがもし仲間になつてくれたら嬉しい誤算だ。」

「……?どう言う事?」

「言葉通りの意味さ。」

意味深な事を口にする慎二に対しキャスターは首をかしげる。

マスターを仲間にしても効率は悪い筈なのに。

キャスターの思いは当然だがそれは“通常”のマスターであり、ある意味“異常”なマスターのバゼットには当てはまらない。無論そんな事キャスターが知るわけもないが。

「それに聞きたい事もある。」

「聞きたい事?」

「あいつさ、この戦争が始まる前に不意打ち喰らって腕を切断されて令呪を奪われたはずなんだ。だから表舞台に立つ事はないんだが」

「……そう簡単に奪われる物じゃないでしょ。それに彼女ちゃんと両腕があったわよ。」

「……ま、そこはあいつに直接聞きゃ分かるだろ。」

そう言つと慎二は店員を呼びつけ代金を支払い店を出る。

「まあ、俺がいる時点でこの聖杯戦争の歯車はトチ狂つてるぞ。」

「そう……。」

キャスターは思う、この青年はいったい何者なのか。なぜ知るはずもない事を知っているのか。だがしかしこの青年は聞いても答えはない、おそらく彼自身が話すまで決して知る事は出来ない。

私が軽く魔術をかければ自白するから、そっちの方法が簡単なんだろうけど。

と、思うだけで今のキャスターはそれをしようとはしない。

「キャスター。」

「なにかしら？」

「……色々とき、聞きたいだろうけどもう少し待っててくれな
いか？」

彼は読心術も使えるの？

そう思わずにはいられなかった。

「どれくらい待てばいいのかしら？」

「……桜がサーヴァントを喚ぶまで。そんな時に話す。」

キャスターは桜がサーヴァントを呼ぶなどとは到底思えなかった。今日一日・・・いや、半日ほど共にしたが彼女ほどこの戦いに相応しくない人物はいないと思えるほど心やさしい人物だと分かる。無論、魔術の素質は無視してだが。

しかし、慎二の言葉が嘘だとは思えない。なぜなら完全に言い切ったからだ。“桜がサーヴァントを喚ぶ”・・・と

「分かったわ。」

「ん・・・サンキュ、キャスタ。」

キャスターの了解を得て　ホツとしたのか慎二の顔に笑みが宿る。

「そんじゃ、帰るか。」

「ええ。」

そう言つと慎二達は踵を返し帰路へと発った。

Shrine / stay night (前書き)

遅れてしまい済みませんでした！

しかも短っ！

でもでも、次回はライ子ちゃんを出す予定です

Shrine / stay night

「初詣・・・だあ？」

「はい。」

冬休みに入り数日、桜が朝から俺の部屋に行き初詣に誘った。ちなみにキャスターの存在は爺様には包み隠さず話しておいた。

隠しておいてもいつかばれる事だし、それならばらしておいた方が爺様にとつても“出来の悪い孫が予想以上の働きをしてくれた”としか思わないしこれにより自分の野望が叶う可能性が高くなった事に気分も良くなる。

それに何より“自分を恐怖している孫が裏切る”なんて事も考えないだろうと言う俺の思惑は見事に命中。追及されずに済んだ。

「・・・まあ、いつか。」

「えつとじゃあ・・・。」

「ああ、行くから待ってな顔洗った後めし食っていこう。」

と、話は戻り桜の願いを難なく了解した。

「あ・・・はい！」

凄くうれしいのか満面の笑みで答える。

「ああ、それと桜。」

「なんですか？にいさん。」

部屋を出ようとする桜を呼び止めた慎二。

「明けましておめでとう。」

「はい、明けましておめでとうございます。にいさん。」

元旦恒例の挨拶を交わしたのだった。

.....

「.....歩みにくいわね。」

「そう言っなよ。せっかく桜が仕立ててくれたんだ。」

家を出てから俺、桜、キャスターの三人は柳洞寺へと向かっている。

「しかし・・・私に似合ってますか？」

バゼットも加えてだ。ちなみにキャスターとバゼットは着物を着ているのだが、どうにも慣れないらしく歩きにくそうだ。

「大体胸がきつくてきつくて。」

「あ、それは私も同じです。」

と、おっぱいボンコンビの会話に少し口元をヒクヒクさせながら聞いているキャスターの表情は少し恐い。

「まあ、大きければいいもんじゃないわ。要はバランスよ。バラ・ン・ス。」

何気に言いわけ臭いがこの際黙っておくのが得策だ。

と、そんなこんな話していると柳洞寺前に到着。

「ん？桜！慎二！」

「待ちくたびれたぞ。」

ついでに美綴と衛宮

「・・・明けましておめでとございます。」

なぜか一瞬だけ顔を顰めながら恒例の挨拶をする遠坂がいた。

「なんだ。みんなお前が呼んだのか？」

「はい、どうぞせなら皆さん一緒にと思って。」

どうやら衛宮たちをここに呼び出したのは桜の様だ。

「それじゃあさっそく」

と、衛宮が行こうと切り出そうとした時、遠坂が俺の裾を掴み

「その前にちょっと間桐君と話したい事があるので皆さん先に行
っててください。」

俺自身なんでだ？とは思いつつ了承。他の奴らも頷いてあの長い階段を上りだした。

「・・・ふう」

一呼吸置いて

「慎二・・・アンタどう言いつつもり？」

魔術師の顔になった遠坂が尋ねる。

「・・・？なんのことだ？」

「こちらも怯まず聞き返す。」

「惚けないで。貴方達が連れてきたあの赤髪の人・・・魔術師じゃない。」

これは驚きだ。俺自身ばれたらまずいと思っていたのでバゼットには魔力を勘づかれないようにしてくれと頼んでおいたんだが

「どうして・・・？」

俺の問いに「ふん。」と言いながら自慢げに答える。

「忘れたの？代々遠坂の家の党首は冬木の管理者・・・この街に魔術師が入ってたことぐらい勘づいてたわよ。あとは、それが誰なのか油断せず探れば済む話。」

ま、最もこんな身近にいたなんて思いもしなかったけど。」

最後の方は何だか悔しそうな表情

「さすが、うっかりの伝道師。」

「ふん！」

・・・新年早々、呼吸困難に陥ったのは生れて始めてです。

「・・・そんな事より、どうしてあんたの所に居るの？」

「ああ、大丈夫。別に家には止めてないさ。ホテルに宿泊してもらってる。」

「・・・それなら・・・いいけど。」

少し釈然としない面持ちで頷く。まあ、こいつの場合桜の事が気になって桜が何かさされてるんじゃないかって思いこんでるみたいだけど杞憂だし。

「・・・って、そうじゃなくて、どうやってあの人と知り合ったのかが聞きたいのよ。」

人差し指を立てながら聞いてくる遠坂。

「えっ・・・と、話せば長くなりそうな気がしなくてもないが・・・」

「どっちよ。」

少し呆れられた。

「簡単に言えば・・・“拾った”」

俺の答えにさらにあきれた表情をしてきた。

「“拾った”って・・・アンタねえ、犬や猫じゃないのよ？」

「犬や猫の方がどんだけましか・・・」

俺の悲壮感を読み取ったのか　ポンッと肩に手を置かれた。・・・
今はそのぬくもりが悲しいけど嬉しい複雑な心境を作り出す。

「まあ、良いわ。今日くらいは楽しみましょ？」

「ああ、そうだな。」

とりあえず遠坂から激励の言葉(?)を貰った俺は一緒にあの長い階段を

「上りたくねエ・・・」

と、愚痴をこぼし遠坂に小突かれながら上って行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

階段を登りきったところで皆と合流した俺達は人の多さに少し驚愕しつつも奥の方へと歩き出す。すると先の方に出店らしきものがあつたので興味本位に近づいてみた

「・・・・・・・・。」

なぜか藤村大河が物凄いお祈りをしている。

「慎二君、あれは？」

バゼットは初めて見る光景のようなので聞いてきた。

「ん？ああ、アレはおみくじって言ってな御神籤箱っていう箱を振って中に細い棒が入ってるからそれを一本だけ取り出すんだ。」

俺の説明にさらに付け加える様に桜が続く。

「そしてその棒には番号が書いてあってその番号の紙を渡すんです。その中には恋愛、金銭、仕事、健康などその人の一年を占うんです。」

「で、結果が良かった人は普段自分がやっている結び型で結ぶ・いわゆる“縁結び”ってやつ、んでもって結果が悪い奴も木に結ぶんだがこの時は普段とは逆方向に結んでおくんだ。」

まあ、なんでかって言うと“凶のおみくじを利き腕と反対の手で結べば、困難な行いを達成つまり修行をしたことになり、凶が吉に転じる”という説から来てるんだ。」

「・・・？」

あれ・・・？分かりにくかったか？

「有体に言えば占いつて事よ。」

「ああ、なるほど。」

キャスターの簡潔な答えに　ポンスと手を叩いて納得。

「ま、間桐兄妹のおみくじ説明は終了ってことで、お祈りしに行こうぜ。」

美綴の提案に賛成。

「じゃ、行きましょ？」

遠坂が先陣を切って歩きだし。

カラン、カラン。

「慎二君、これは？」

「ああ、こいつはな鐘を鳴らして目の前の木の箱があるだろ？そいつにお金……つってもそんな大金じゃなくて少いで良いから入れて、今年一年元気でいられますようにってお祈りするんだ。まあ、他には夢を叶えられますようにとかな。」

「効果はあるのですか？」

「……いや、効果ってのはないかもしれないが要は気持ちの問題だよ。」

俺の説明になんとか納得しお金を入れお祈り。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

それぞれお祈りが済んだのかほとんど同時に目を開ける。

「んで？みんなは何を祈ったんだ？」

聞いたらいけない事だろうがまあ、お約束ってやつだ。

「家内安全だけど。」

衛宮、お前一人暮らしたろ？

「無病息災だよ。」

美綴……なら大丈夫か。

「安寧長寿です。」

桜は優しいなあ。

「子孫繁栄……かしら。」

キャスター、顔を赤らめながら言わないでほしい。……って、何でこっち見てんだ。

「私は祖先崇拜……ですね。」

「よく知ってたなその言葉。」

「あ、いえ、その看板に書いてますし。」

最近看板まで出してんのか。見る、日本語の下にローマ字で書いてるし……外国人用だろうが読みにくいな。

「私は。」

「商売繁盛だろ？」

俺の答えが正解で少し恥ずかしいのかソツポを向きながら頷いた。つーか遠坂がそれ以外願う事が想像できないな。

「慎二は？何を願ったんだ。」

「んあ？俺は天下泰平の招福祈願だぞ。」

「へえ、ずいぶんでかい願い事じゃないか。」

「いいだろ別に。お祈りぐらいでっかくやらなきゃ。」

まあ、みんなでお祈りをして絵馬や破魔矢などを購入し無料で配られている甘酒を飲む。キャスターやバゼットに好評だったのは驚きだ。

「それじゃ、最後におみくじ引いて帰ろうぜ。」

俺の提案にみんなが頷いたのを確認し一番最初に見つけた出店の場所まで戻った。

「あああああ、また大凶うううう。」

「あの・・・もう大凶が無くなってしまったのでこの辺で・・・。」

「いや！大吉が出るまで帰らない！最悪ローラー作戦でもやってやるわ！」

「「「やめい！」「」「」

俺、衛宮、遠坂の突っ込みが藤村大河に突き刺さる。

・・・つうか、自分の担任の情けない姿を新年早々見る事が出来たのもこれが初めてだ。

Rider / stay night (前書き)

累計アクセス数二十万突破！きゃっほー！

お気に入り件数六百突破！ひよっほい！

総合評価が1500突破！ヒーーーーハーーーー！

・・・おほん、取り乱し過ぎてすみません。今回はチヨイ心が沈む表現があるんでご注意を・・・ではでは

Rider / stay night

「カカカ　。」

間桐家の地下・・・蟲蔵で人であった老人

間桐臓硯と

「・・・くう、　ハア・・・っ！」

その臓硯の蟲達により体を造りかえられ拷問を受けている間桐桜がいる。

「のう、桜。いい加減儂の言うことを聞いてはくれんかの？」

口調は優しいがやっている事は外道の臓硯が問う。

「可愛い孫はできれば苦しめたくはないんじゃないよ。じゃから桜よ・・・いい加減サーヴァントを召喚してはくれんかの？」

最後の方は語気を少し強めながら言う。その言葉に桜は長年に渡り刻まれてきた本能で臓硯の言いなりになろうとするが

「　っ、い、嫌です・・・！」

あるだけの精神力で自分を奮い立たせ反論した。

「・・・ふむ、痛みを与え過ぎて耐性が出来てしまったか。」

そんな桜の言動に対し冷静に分析をする　何か弱みは・・・と

「そんなに戦いたくはないかの？」

「くう……は、はい……」

苦痛に耐えながら返事を返す桜。その返事に　ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「ならば、可哀そうなことに慎二は死んでしまつかも知れんおう。」

「……っ!?!?」

意外な言葉に驚愕の顔を臆視へと向ける。

「慎二はキャスターのサーヴァントを連れてきた。と、言う事は奴は参加する意思があると言う事じゃ。」

「……」

黙ってその言葉に耳を傾ける。

「しかしのう、キャスターのサーヴァントは陣地を形成し罫や計略を駆使して戦うのが主じゃが……如何せん魔力が十分でないからそれも上手くいくかどうか分からん。慎二自身も魔術師でないから正式な契約も出来ん。」

「それは……」

「故に今一番狙われやすいのは明白じゃ。無論、友人である衛宮士郎は大丈夫じゃろうが魔術師である遠坂凜は果たして手加減など

するかのう?」

「……っ!」

臓硯の言ってる事は的を得ている。遠坂凜はそういう人間だ。人として優しく温かい心を持ち魔術師として冷酷で非情な決断が出来る。

「なにも桜よ、主が心を痛める必要はないがの。」

確かにそうだ。普通の人であれば自らに対し虐待を行ってきた者が死んでも悲しまないむしろ喜ぶだろう。

しかし桜は普通ではない。体ではなく精神の方が異常なほど自己嫌悪に陥りやすい。その理由は桜の優しくおとなしい性格に間桐の今までしてきた行為が桜の性格を歪んだ物に変えてしまっている。

故に、桜は冷静な判断が出来ない。

「……分かりました。言う通りに……します。」

桜の返事に臓硯の顔がこれ以上ないほどの歪んだ笑みを造る。

「カカカ、そう言ってくれと助かる。」

そう言いながら桜に背を向け蟲蔵から出ようと一歩踏み出し

「ああ、忘れる所じゃった。」

キキキ

臙硯の周りに蟲が蔓延っていく。

「……………っ！」

桜の顔が恐怖に染め上がる

「儂を手間取らせた罰を与えねばのう。 悪い子にはお仕置き
じゃよ。」

臙硯が杖を カンツと、鳴らした瞬間

「あ……………あ、あああ、あああああああ……………っ！」

蟲達が一斉に桜へと襲い掛かる。

「い……………やアアアアアアアアア ！…！」

臙蔵に桜の悲痛な悲鳴が響き渡った

……………

ところ代わり慎二とキャスターはバゼットが宿泊しているホテルに居る。そろそろ聖杯戦争がはじまりそうな時期に入ったのでキャスターの事を話そうと思っけてきていた。

「……驚きました。慎二君の家系が魔術師の家系と言うのは聞いていましたが、まさかあなたがサーヴァント“キャスター”だったとは。」

「黙ってて悪かったな。」

慎二の謝罪に頭をフルフル振りながら笑顔を向ける。

「別にかまいません。黙っているのは当然の事ですし、なにより命の恩人に対して感謝こそすれ怒ったりすることなど筋違いです。」

バゼットの言葉に少なからず安堵の表情を零す。

「それで？本題はそこではないのでしょうか？わざわざ私にサーヴァントの存在を知らせに来たのですから」

「頭の回転が速くて助かる。」

慎二はバゼットの言葉に頷きさらに続ける。

「……おほん、単刀直入に言うぞ。俺と手を組んでくれないか？」

「良いですよ。」

「返事はやつ！」

思わず突っ込んでしまう慎二。

「いや、あのさ、俺が聞くのもなんだがそんな率直に決めていいのか？」

実際、命のやりとりをするわけだからもっと悩むかと思っていた慎二は問いただす。

「命の恩人の頼みですし何より私自身、もともと聖杯戦争に参加する身でしたから。」

「……………」

そう言われては黙りこむしかない。

「それに何より。」

「……………」

スクツと立ち上がり握り拳を造り

「私自身、恨みを晴らしたい人物もいますし。」

シャドーボクシングを始める。その先に見据えているのは変態神父の言峰綺礼を見据えているのだろう。

「……………はは、そっか。」

「ええ、ですから。」

お互い掌を取り

「よろしく・・・な。」

「よろしくお願いします。」

握手を交わした。

「・・・っ、 慎二。」

和やかなムードで話しているとキャスターが神妙な面持ちで慎二を呼ぶ。

「・・・？どうしたキャスター？」

「サーヴァントの召喚を確認したわ。場所は・・・貴方の家よ。」

「・・・っ！」

キャスターの発言に驚愕の表情を浮かべる慎二とバゼット。

「とうとう、来たか。」

「慎二君、どう言う事です？何故貴方の家でサーヴァントが・・・？」

バゼットの疑問は尤もだ。

「説明は後だ。一旦家に戻るぞキャスター。」

「分かったわ。」

慎二とキャスターは立ち上がり駆け足で部屋から出て行った。

「……一体、どうしたと言っんですか。」

訳が分からない、と頭に疑問符を浮かべているバゼットを残して。

.....

俺とキャスターはできるだけ早く帰宅し家のドアを開ける。

「おお、帰ってきおったか慎二とキャスター。」

「最悪な人物のお出迎えだ。」

「お爺様、先程キャスターが」

「サーヴァントの召喚を感知したかの。」

笑い声をあげながら愉快にしゃべる。

「……桜が？」

「そうじゃよ。お主を助けたい一心で召喚したんじゃよ。」

よくそんな嘘が言えたもんだ。

そんなこと思っていると「付いてこい。」と、促してきた。

「しかしのう、召喚したは良いが桜は闘いたくないと言っんじゃ。」

「それは……」

「じゃからの、桜の代わりにお主が使役してみんか。なあに、キヤスターを手懐けたお主なら出来ん事無いじゃろう。」

上手いなその褒め方……俺じゃなく普段の慎二なら手放しで喜んでたろうな。そいでもって聖杯を手に入れられれば普段から見下している臍硯や優等生の遠坂を見返せるってな感じに思っちまうんだろう。

「ありがとうございます。お爺様。」

ま、礼だけは言うておくか。貰えるもんは貰って置こっつてな感じじで。

そして、一番下まで降りた俺達は蟲蔵の扉を開け

「……っ！」

「これは……。」

桜が倒れている姿に驚愕した。

「く……桜！」

駆け寄ろうとすると鉄の鎖が体に巻き付く。

「慎……！」

キャスターがすぐに戦闘態勢に入る。

「これこれ、止めんかライダーよ。そ奴が先程話したお前の新しいマスターじゃ。」

「この子が……。」

臓硯の言葉に頷きすぐさま鎖を解いてくれる。

「……桜。」

解かれた後、桜を抱き上げる。表立った外傷はないので息を吐く。

「心配するな。召喚の時魔力を根こそぎ奪われ気絶しただけじゃよ。」

そうは言っが俺は信じない。何故なら桜の魔力量……そう、量

だけ言えば遠坂以上のモンを持っているはず。ふらつく事はあれど、ここまで衰弱状態にはならない筈だ。

「まあ、召喚前に駄々を兼ねたからの、少々お仕置きしたただけじやがの。」

笑いながら答える臓硯に殺意が湧く。

「……ふむ、今日はもう動けんか。少々やり過ぎたかの。」

そう呟くと踵を返し出口へと向かう。

「それじゃ、あとは頼むの慎二よ。」

そう言い残し蟲蔵から出て行った臓硯を睨めつけながら桜の肩を思いつきり抱きしめた。

R i d e r / s t a y n i g h t (後書き)

ライ子がチョットだけだし。

好きなものになぁライダー。エロいのに自覚なしで天然って萌え要素
ハンパねえ

いつか書きたいと思います。エロライダー！

T r u e / s t a y n i g h t (前書き)

T r u eとは真実と言つ意味です。

今回は我がワカメが二人のサーヴァントにある程度の真実を話します。

True / stay night

桜を介抱しその日は寝ずに看病した。もちろん次の日の学校も休ませることにした・・・まあ、よほど疲れていたのだろう。起き上がろうとするとふらついて足元が定まっていなかった。

それよりも心苦しかった事は、桜が起きたと分かった轟爺がさっそく令呪の引き渡しの作業をやれと言ってきたのだ。俺としてはもう少し桜を休ませてやりたかったのだが監視をされていては仕方がない。

速やかに事を進めた。

「はあ・・・はあ・・・」

よほど疲れていたのか肩で息をする桜。

「ふむ、これで終了じゃな。 慎二よ」

「はい。」

「この本がライダーの令呪になるからの。」

そう言われ素直に受け取る。意外に見た目に反して軽かった。

「ありがとうございます。」

感謝なんてしてないのに“ありがとうございます”なんて使ったのは初めてだ。

「うむ、それでは“ソレ”について詳しく説明するかの。」

と、蟲爺がこの本についての詳細を説明してきた。

曰く、これは言わば劣化した令呪みたいなもので効果は本物に比べると若干見劣りするらしいが大差はないさらに言えば使える回数は一回までとの事だ。

まあ、実質的に令呪が移り変わったと同等なので桜からの魔力供給などは減るらしく通常戦闘では問題ないが宝具の使用は一日2回が限度らしい。

「理解できたかの？」

「あ、はい。」

まあ、令呪の使う回数が減ったのは少し痛いがほかは別にいいだろ……と思う。

「そうかの、では僕も聖杯戦争に向けて準備でもしておこう。暫くの間は蟲蔵におるからのう。」

そう言っつて桜の部屋から出て行った。

「くう……はあ……」

桜は緊張の糸が切れたのか床に手を着き息を整える。

「……桜。」

「大丈夫　ですよ。にいさん。」

額に汗を浮かべながらにっこりと笑う桜は無理をしている様に見えない。

「すまない。」

謝ってもどうしようもないがそれでも今の俺に出来るのはそれぐらいだ。

「桜……」

「……？」

「絶対 助けるからな。」

そう言い残し俺は桜の部屋を出て自室に戻って行った。

……

「ふう。」

部屋に戻った慎二をキャスターとライダーが出迎えてくれた。

「終わりましたか？」

「ああ、この通り成功だ。」

そう言っつて偽臣の書を見せる。

「さてと、それじゃそろそろ始めますか。何で俺が色々知ってるのかを・・・ね。」

そう言いつつ慎二はキャスターとライダーを自分の部屋のソファに座らせる。

「そうね。私も色々聞きたいわね。初めて会ったときから不思議だったもの。説明もしてないのになんで私のクラスを言い当てる事が出来たのか。」

「そうですね。昨晚、キャスターからいくつか説明していただいたのですが貴方の行動は不自然な点が多いです。」

「ずい、と身を乗り出してくる美女二人。」

「知ってるよ、色々。例えばお前らの真名とか。」

「・・・なあメディアにメドゥーサ。」

「「・・・!?!?」「」

思った通り驚愕の表情を浮かべた二人にクスクスと笑ってしまう。

「私、貴女に真名を言った覚えなんてないんだけど。」

「言われた覚えなんてないよ。」

ピクリとキャスターのこめかみが動く。

「じゃあなんで・・・」

「ついでに言つとお前らだけじゃなくて他の奴らも知ってるからな。」

「・・・んな!?!?」

「嘘でしょ・・・。」

以外にも感情の表現が激しいライダーが微笑ましい。

「まあ、何でかって聞かれると色々説明が長くなりそうだから端折らせてもらつぜ?」

コクリ、と二人が頷く。

「まず第一に俺は間桐慎二であつて間桐慎二じゃねえんだ。」

「・・・は?」

そのバカにした目で観るのはヤメレ。傷つくぞ俺の慎^{「カメラワーク」}二魂がよ。

「いいから聞け。俺自身だつてはじめはビックリしたんだ。目が覚めて鏡を見たら別人になつてたんだからさ。」

「・・・その説明からすると貴方は中身・・・心が間桐慎二の体に移ってしまったと言っわけ？」

「察しが良くて助かるよ。」

一呼吸置いて部屋にある冷蔵庫から飲み物を取り出す。

「キャスタ、そう言う魔術はあるのですか？私は貴女ほど詳しくないので分かりませんが。」

ライダーがキャスターに問うが首を横に振り否定する。

「それはもう魔術の域を出てるわ。ハッキリ言って魔法よ。」

キャスター、なんで俺を睨みつけながら言ってくるんだ。

「・・・ふんっ。」

しかもソツポ向くし・・・

「シンジ、キャスターはおそらく嫉妬しているのです。」

「・・・？」

「キャスターと言うクラスは魔術に特化している者に与えられるクラスです。そしてキャスターの真名はメディア。だとするならばあらゆる魔術、大魔術を会得しているはずですよ。」

「・・・で？」

「そのメディアですらたどり着けなかった場所が魔法と言う域です。おそらくは生前、何度もそこにたどり着こうとしたんでしょうが叶わなかった。」

「なのに貴方は自分の意思など無しに魔法そに近い……むしろ魔法そを発動させたんですから。なんとなく気持ちは分かります。」

「……つまり、小さい頃からスポーツやって鍛えてたのになにもやった事がない奴より肉体美で負けたから悔しくて嫉妬したって事？」

「色々と言いたいですがまあ、合ってます。」

「成程な、そりゃ確かに落ち込むわな。……ん？なんでライダーとキヤスターはそんな呆れた目で俺を見てんだ？」

「はあ、もういいわ。貴方が間桐慎二と言う体に心が移ったとしたとして、だからと言って貴方の知っている知識は説明できてないでしょ。」

「ま、そらそうだな。」

「んまあ簡単に言うとな、俺がいた世界で聖杯戦争やらサーヴァントの事は一つの空想上の物語だったんだ。」

「……物語 ですか。」

「ウソは……吐いてないよな？」

「お前等も似たようなもんだろ？メディアにメドゥーサって俺ら

からしたら空想上の人物でしかねえんだからよ。」

「……つまり要約すると、貴方のいた世界ではこの戦い……つまり聖杯戦争の事は一種の童話として語られていたから私達の事も知っていたと言っ事？」

「うん？ああ、そうかな。」

と、俺が頷くとキャスターとライダーが困惑した表情を浮かべる。

「ありえない……です。」

「そうね、まさか私達の事が唯の夢物語なんて信じられないわ。」

当然の反応だ。俺だって自分がいた世界が実は作られたお話の世界でしたくなんて言われても信じられない。

「けどこれは夢じゃないんだ。……俺も初めは信じられなかったけど。」

「……まあ、そう言っ事にしておきましょうか。それで？」

「ん？」

「シンジはどうしてこの聖杯戦争に参加されたんです？知識を持っているのなら危険度も分かるはずですよ。回避する事も出来たのでは？」

ああ、そう言っ事。

「簡単に言えば俺が乗り移った間桐慎二……つまり間桐家は魔術の家系だから俺か桜が戦いに行くのは必須。」

「んでもって桜は絶対嫌がるだろ？そこで俺に「闘って見ないか？」って爺さんが聞いてきて拒否してみる。俺か桜……もしくは両方が「やります」って言うまであの爺は虐待してくるぞ。」

それなら俺が二つ返事で「はいっ」と答えれば済む話だ。

「安請け合いしすぎでしょ……。」

「効率的って言うてくれ。メンドーなのは嫌なんだ。」

ほら、溜息つくな。

「まあ、いいわ。もう参加するって言うっちゃってるしその意見が変わる事もないんでしょ？」

「ああ、もちろんだ。」

そう言つと真剣な顔つきになるお二人さん。

「ならやらないといけない事があるわね。」

「そうですね。シンジは魔術の要素がないですからしっかりと方針を練らないと逝っちゃいます。まだ朝ですが徹夜までみっちりやりませよ。」

ライダーの発言に少しエロさを感じたのは俺だけじゃない筈。

「今日は眠れない夜になりそうだ。」

「そうね。今日は寝かさないわ。」

「はい。寝かせません。」

二人の目がきらりと光ったのは気のせいだ・・・たぶん。

.....

Starting/staying night

衛宮side

「はっ、はっ、はっ」

訳が分からない。なんでこんな事に

俺は必死で校舎中を駆け巡っていた。ただ分かるのは速く逃げなければ俺が死んでしまふと言う事だ。

「何を　馬鹿な。」

ハア、ハアと喘ぎながら自らの行動に舌打ちする。

逃げるなら町中が得策だ。なのにこんな人気の無い場所に逃げ込むなんて　くそつ。

「ハア　ハア、ハア」

そもそも何で俺はこんな走らなければ殺されるなんて、物騒な事を思っているんだ。

「くう　ハッ、ハア。」

限界以上に走り続けて心臓の音が妙に脳へ響き、口の中が血の味でいっぱいだ。

ふと振り向いてみる。

「逃げ切れた　のか？」

そこには俺を追ってくる奴の姿はない。足音も聞こえてこなかった。

そこで俺は酷使した足を止め五月蠅い心臓を沈ませようと息を整える。

「・・・ハア、・・・何だったんだ、今の・・・」

乱れた呼吸を整えながら先程の光景を思い出す。　とにかくあれは異常だ。見てはいけないものだ。

「けど、これでもかく　」

「追いかけてここは終わり、だろ？」

その声は、目の前からした

「よう、わりと遠くまで走ったな。オマエ」

「　」

息が出来ない。思考が止まり頭が回らない。

にもかかわらず、ここで死ぬんだ、と簡単に分かってしまった。

「逃げられないってのは、オマエ自身が誰よりも理解していたは

ずだろ？

「ああ、イヤ別にそれは恥じる事じゃない。得てしてそういつもんだからな。」

フツと無造作に槍が持ち上げられた。

「恨むんならてめエの運の無さを恨みな。」

容赦も情けもないその言葉と槍は俺の“衛宮士郎”の心臓を貫いた。

「ガ　ハッ　」

避ける暇もなかった。動く事も出来なかった。ただ無情になにも抵抗できなかった。

「はあ、死人に口なし　弱い奴がくたばるのは当然と言えば当然だ　が」

俺を刺した男の声がわずかに聞こえる。

「　このざままで英雄とは笑いぐさだ。」

その言葉を聞いたあと俺はゆっくりと意識を手放した。

衛宮side了

.....

遠坂 side

「ふう……」

学校が終わり放課後、この街の作りを理解してもらったために屋上にアーチャーを連れてきた。

本当は新都の廃墟されたビルにでも行けばいいんだろうけどアーチャーに聞くと「別にどちらでも構わない」と言われたので手間暇考え学校終わりの屋上を選んだ。

「どう？この街の作りとか分かる？」

「ああ、良い場所だ。一番最初にこの場所へ案内してくれたのは助かる。よく見えるしな」

「助かる？」

少し不思議に思ってしまった。アーチャーと言うクラスだから目が良いとは思うがそれでもこの街並みが詳しく分かるわけでもない。だが細かな詳細まで見えるものなのだろうか。

「なら新都まで見える？」

「いや、さすがに隣町までは見えないがあそこにかかっている赤い橋……そのタイトルの数までなら数えられる。」

もつとも、隣町の方もなんとなくが見えてはいる。」

それって目が良いとかのレベルじゃない。よく展望台とかに望遠鏡があるけどそれと同等かそれ以上のものよ。

「びつくり。」

「驚いてもらい光栄だ。」

アーチャーはそう言つとジツと街の方を見ている。おそらく作りを把握しているのだろう。

戦場の下調べは大切だから邪魔をしないようにしないと……ね。

そう思いアーチャーからわずかに距離を取り少しアクビ。

「随分と寝むそうだな嬢ちゃん。」

聞きなれない第三者の声にハツとする。

振り返ると給水塔の上でしゃがみ込んでいる男が私を見降ろしていた。

「つ、凜！」

アーチャーが私の目の前に立つ。

「あいつは」

「ああ、サーヴァントだ。」

アーチャーの声に獣の様な口元を緩ませながら

「それで、それが分かるお二人さんはオレの敵って事で良いのかな？」

背筋が凍る。この男は間違いなく私を殺そうとしている。

だがどう動いたらいいのか分からないどの策が最善なのは分からない
だけどっ！

「はッ
！！！」

後ろに跳びフェンスへ駆ける。

「へえ、いい脚してんな嬢ちゃん。」

退路なんて無かったのであれば無理矢理でも作るまでだ。

「E s i s u t g r o s , E s i s t k l e i n . . .
. . . ! ! ! ! !」

屋上から飛び降りるため私はこの呪文を唱える。

これにより一時的に体が羽と化しフェンスを越える。

「V o x G o t t E s A t l a s アーチャー . . . !
お願いっ」

「ああ、」

呪文を使い引力の利用で地面まで高速で降り着地をアーチャーに任せる。

「はっ ！」

着地したと同時にグラウンドへ走る。闘うにしても狭い場所での戦闘は私達にとって不利だ。

「アーチャー！」

なので割かし広い場所に来てアーチャーを構えさせる。

「へえ……」

男は持っている槍を振りぬきながら口元をゆがめる。

「いいねえ、そうこなくちゃ。話が早い奴は嫌いじゃない。」

アレはヤバい、アレは……

「ランサーのサーヴァント。」

「そう言うこった。で、嬢ちゃんのさっきの声からアンタはアーチャーか。」

「……」

無言のアーチャー。対峙する青赤はすでに互いの必殺を計っている。

それとは別にランサーがアーチャーへと語りかける。「自らの弓^{エモ}を出せ」と、

そう、アーチャーの手には弓ではなく双剣が握られている。

「アーチャー……」

そこで私は悟った。イヤ、理解していなかった。アーチャーはすでに戦う準備が出来ていてあとは私の言葉を待っているだけだ。

「手助けはしないわ。貴方の力、ここで見せて頂戴。」

「了解した。マスター」

顔は見えない。背中しか見えないが何故だろう。今のアーチャーは笑っているように感じた。

そして、双剣を手にアーチャーがランサーへと疾走する。

「バカが！弓兵風情が接近戦を挑んだな！」

ランサーが一括しアーチャーの剣を来る前に流し逆に突き出す。

「っ」

寸での所でアーチャーが受け流す。

だがランサーは追撃を緩めず突く。

「くう！」

それを防ぐ。

「そら、そら、そら、そら、そら、そら！」

突く、突く、突く、突く、突く

「　　っ！」

防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ

「そあ　　らあ！」

ついにランサーがアーチャーの双剣を弾き飛ばしその槍はアーチャーの首元へと襲い掛かる。
が

「ぬう　　！？」

再びアーチャーの手元には全く同じ双剣が握られていた。

「て　　めえ！」

理解できなかったのだろつランサーがいら立ちを交えながらさらに速度を上げアーチャーに襲い掛かる。

突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く、
突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く、突く、

しかしアーチャーも負けじとその襲来を防ぐ。

防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、
防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、

常軌を逸したその殺し合いはもはや芸術と言っても過言ではない。
見惚れてしまったのだ。

「おら、おら、おらあ！」

懐に入れまいとするランサーと

「……………」

静かに相手の隙をうかがいながら間合いを詰めようとするアーチ
ヤー。

両者の打ち合いは数え切れないほどだろう三桁は下らない。なの
に時間にしてはほんの数秒だ。

「ちっ」

舌打ちをしランサーは間合いを離れる。

仕切りなおすためなのかはどうか分からないが間合いを取る速さ
も尋常じゃない。

まるで豹だ。

「…………てめえ、どこの英雄だ。二刀使いの弓兵、しかもその剣
はいくら弾いても出てきやがる。

そんな奴聞いたことがねえ。」

いらだちを隠さないままランサーが問う。

「真名の事か？私は記憶喪失でな。分からないのだよ。

ああ、だがしかし、君は実に分かりやすいな。ランサーは最速の英雄が選ばれるが君はその中で選りすぐりだ。

加えて獣のごとき俊敏さと言えば歴史上に置いてただ一人。」

「ほう、よく言った。アーチャー」

途端、あまりの殺気に呼吸すら忘れた。

ランサーが動く、今までとは違い侮りも油断も無い構え。

槍の矛先は地面をに対し垂直になるのでは、と言っぐらい下がりランサーの目だけがアーチャーを写す。

「ならば食らうか、我が必殺の一撃を」

「ああ、止めはしないさ。いずれは越えねばならない壁だ。」

ランサーの体が沈むと同時に茨の様な悪寒が校庭を蹂躪した。

ま
ま
ず
い
。

アレがどんな宝具かは分からない。けれどもアーチャーがやられる

「あ、」

ソレが理解しているのに動けない。ランサーの槍は間違いなくアーチャーを貫く。

だけど動けない。動いてしまえばソレが開始の合図となってアーチャーが死ぬからだ。

だから、この戦いを、アーチャーを助ける方法があるとするなら

パキ。

「っ！だれだ……！」

私達が見逃していた偶然と言う第三者の出現に他ならないのだ。

遠坂 side 了

.....

（間桐邸）

「慎二、貴方の言っていた通り学園で戦闘が起ったわ。ついでにあの坊やも一緒よ。」

「そつか、あ、ライダーそれポンド。」

「ぐう、卑怯ですシンジ。ポンしすぎです。」

俺は現在キャスターに頼み学園で起きている出来事を教えてもらいながら麻雀中。

ちなみにキャスターは強すぎるので抜けてもらった。まあ、勝てるわけないよね、

「行かなくても良いの？あのままだとあの坊や死んじゃうわよ。」

「ん？ああ、別にいいんだそこはシナリオ通りだし。」

「残酷ですね。くう、良い牌がきません。」

衛宮には悪いけど今回は別に助ける気はないんだ。

「今回は・・・な、うしつ、きた！」

「何故ですか・・・？」

「むっふっふっそれは後でのお楽しみだ。」

「顔が変態よ、慎二。」

「はい変態です。シンジ。」

酷っ！？

「ああ、それとキャスター“アレ”買ってきてくれたか？」

「ええ、だけどあんなに大量に買ってどうするの?」

そう頷きキャスターはトランク二つを目の前に出し中身を開ける。

「それは、交渉の時の道具だよ。 リーチ」

「んな!?」

「負けたらライダー酒抜きな。」

「んな!? 一番の楽しみを取るなんて鬼です! 悪魔です!」

「なら勝てばいいってことだろ?」

実際、桜がうるせえんだ。ライダーを甘やかさせ過ぎって怒られるんだ。

「それと、バゼットには」

「連絡はとってあるわ。呼んだらくるって言ってたわ。」

「そっか あ、それロンな。」

「ああ !?」

勝負が終わり席を立ち上着を取る。

「しゃっ、そろそろ行くぞ。用意しろ。」

「了解よ、慎二。いつでもOKよ。」

キャスターの返事を合図に大きめのトランク二つとバゼットとの待ち合わせ場所を確認し戦場へと向かった。

「シンジなんてワカメに溺れて溺死すればいいんです!」

ライダーの負け犬の遠吠えを聞きながら。

Promise/stay night (前書き)

遅くなって。°。(・q)) 【・・じゅんなち・・】 ((p)) °。

・・おほん、ま、そんなわけで始まります。

P r o m i s e / s t a y n i g h t

「ゴホッ、ゴホッ、　くっ、なんてヤワなんだ。間桐慎二め。」

衛宮士郎がランサーに襲われる数日前、間桐慎二は学校の屋上に来ていた。季節は冬まっ盛りなのに、なぜ屋上に来ているのか・・・それは

「・・・マイルドセブン如きでむせるとは　体が若いから受けつけねえのか？」

タバコを吸うためである。　ちなみに、時刻は12時を少し過ぎたところ・・・ちょうどお昼休みだ。

「誰もいない所を狙って屋上を選んだんだが・・・こいつは馴れるまで時間かかりそうだな。」

そう言いつつ名残惜しそうに火のついたタバコを眺めていると

ガチャリ

「ゴバツ、ゴホッ、ゴホッ！」

不意に扉が開いたので慌てて火を消す。誰かに見つかったのは面倒なことは間違いない。

「にいさん……？」

「ん……？おお、桜か。」

と、そこにやって来たのは間桐桜。

「……？こんな所で何してるんです？」

桜の疑問は当然だ。真冬なのに屋上へいるのはおかしい。しかし慎二も「タバコを吸ってた」なんて言えるはずもないので瞬時に回答^{いいわけ}をする。

「いや、ちょっとひ弱な肺を鍛えようとしてたんだ。」

「……？」

……最大限に苦しい言い訳だ。

「そ、それより、どうしたんだ？」

「あ、そうでした。にいさん、お弁当持っていくの忘れてたですよ？ですから……はいっ」

そう言いつつ慎二に弁当を渡し、さらには桜も慎二の横へちよこんと座り自分の弁当を開ける。

「ん、さんきゅうな。」

桜に礼を言いつつおかずを一口へと放り込む。

「うめえ。」

「お口に合ってなによりです。」

慎二の感想に嬉しそうにほほ笑む桜。 だが、少しだけ俯いてしまう。

そんな桜を見てどうしたのかと気になって問いただしてみる。

「にいさん……あの……」

「ん？」

「聖杯戦争、の事で……」

「どうした……？」

「にいさんは、先輩や……遠坂先輩とも闘う気なんですか？」

そんな事を言う桜の顔をのぞいてみると少しだけ瞳に涙を潤ませている。今にも泣きそうな感じだ。

その涙の意味は愛する衛宮士郎が危険な目にあうかもしれない悲しみか、遠坂凜への家族愛によるものか、はたまた間桐慎二をただ憐れんでいるのかは定かではないが

「大丈夫だよ、桜。」

「……え？」

それでも間桐慎二は他意のない・・・出来うる限りの優しい笑みを浮かべながら桜に言う。

「衛宮とも遠坂とも闘わないようにするぞ。」

「本当・・・ですか？」

「ああ、ま、もちろん向こうからやってきたら抵抗はさせてもらうが間違っても殺したりなんかしないさ。」

そんな慎二の言い分に少しだけ安心したのかホッとする桜。

「ま、それになにより」

「・・・？」

「こんな・・・バカげた聖杯戦争なんて枠組みは俺がぶっ壊してやる。」

.....

「シンジ? どうされたのですか? ポーっとして」

「んあ? いや、少し前の事と、チョットした約束事を思い出していただけだよライダー。」

そう言いつつ俺はタバコに火をつける。

「ふうーっ、んな事よりキャスター、遠坂たちの動きはどうなってるんだ?」

「今大急ぎであのボウヤの家に向かっている最中よ。・・・ま、そのボウヤは今ランサーに襲われている最中だけどね。」

キャスターの報告に俺は軽く頷く。と、振り返ってみると呼んできたバゼットが少し俯き加減だ。

「・・・? どうした、バゼット。」

「あ・・・と、その・・・」

「・・・はあ、ランサーに顔を合わせづれえってのか?」

「う・・・それは、そうですねよ。だって私の不甲斐なさで令呪とランサーを奪われてしまったんです。」

そんな辛気臭い顔で根暗ネガティブな発言をするバゼットに対し溜息を吐く。

「そんな汚名を挽回するためにアイツの所へ向かってんだろ?」

「そ、それはそうですが・・・シンジ君の言った作戦、上手く成

功するんでしょうか？」

「させるんだよ。無理やりにも・・・な。」

そう、絶対成功させなきゃなんねえんだ。じゃないとやべえ方向に行っちゃうし何よりまだ俺も死にたくねえ。

「慎二、動きがあったわ。・・・新たなサーヴァントの召喚よ。」

「そっか、なら本腰入れて行くとするか！」

自分自身に渴を入れるかのように両頬を叩き衛宮の家へと向かった。

「時にバゼット、汚名は挽回するもじゃなく返上するものよ。」

「そうですね、そんなもの挽回してもどうしようもありませんし・・・ね？シンジ。」

「・・・小さい事は気にしない主義なんです。」

「・・・右に同じくだ。」

「・・・バカ？」

「「ひびっ!?!」」

.....

遠坂 side

・・・なによ、あれ

「・・・アーチャー質問してもいいかしら？」

「む、なにかね？」

「聖杯戦争つてのは仲良しごっこをするための物なの？」

「いや、そんなことは」

「じゃあ、アレは何だったのよ！」

わたしはつい頭に血が上ってしまいアーチャーの胸倉を搦んでしまつ。・・・ええ、優雅よ、優雅に胸倉を搦んでるから遠坂の家訓

には反してないわ。

「ぐう、な、ならば余裕も持たなくていけないのではないのか？」

「なに言ってるの？余裕でアンタをシメてるじゃない。」

「余裕の意味が違うだろ！？そう言うのは屁理屈と言っただバア
!？」

「うっさい・・・！」

あまりにもうっさいのでガンドをぶち込んでやった。

・・・以外に効いてるみたいだけど大丈夫・・・よね、わたしが
召喚したサーヴァントだし

と、そんな事より今はアレよ、アレ

「うたく、なにがどうなっているんだか・・・」

わたしがなんでこんな悪態をついているか、それは少し前まで遡
ることになる。

夜を走る、幸いかどうかアイツの家は知っていた。

いや、べつにわたしが調べたわけじゃなくて、たまたま知り合いがよく遊びに行く家だったから知っていただけ。

「・・・凜、言っても無駄だと思いが君は今、非常に無駄な労力を使っているんだぞ。」

「無駄だって分かってんならしゃべらず足を動かさない！」

「はあ・・・（チラっ）、はあ~~~~~」

「なんで二回も溜息ついてんのよー！」

「・・・さあ？なんでだろうな。」

アーチャーのあまりにも白々しい惚けた返事にいら立つもここはぐっと我慢する。と言うのも今わたし達はそんな事を言い争っている場合じゃないからだ。

「大体、ランサーがあの小僧を殺そうとしているのはなにも間違っではないだろ？むしろ的確な判断だ。

“目撃者がいたら殺す” これは魔術師の基本ではないのかね？」

「そんなこと・・・分かってるわよ。」

アーチャーの言っている事もランサーのしようとしている事もなに一つ間違っていないのは分かってる。むしろ間違っているのは私のほうだって事も理解している。

でも、

「あれだけの事して・・・」

「ん・・・？」

「あれだけの事して最後の最後で死んでましたじゃ目覚めが悪すぎるでしょ！」

そ・れ・に！あの宝石は切り札で使おうと思ってた物なのよ！それなのに骨折れ損じゃ意味無いでしょ！」

「ふう・・・わかった。」

わたしの言い分にそれとなく納得したのか頷くアーチャー、と、ようやくアイツの家に到着し周囲を窺う。

「・・・いるな、ランサーが、」

「ええ、わたしにも分かるわ、気配がこっちまで感じる。」

と、なると悠長な事は言ってもらえない、一刻も早く駆けてアイツを助けないと。

そんなわたしの意図を読み取ったのかアーチャーは私を抱き上げ堀を乗り越えようとした・・・その時

カアツと、太陽が満ちた様な光が屋敷の中から出てきた。

「う・・・そ・・・」

その時、わたしの体はあらゆる情報をキャッチした
“新たなサーヴァントの召喚”と言う情報を
そう、

無論アーチャーも分かっている。……が、驚きはそれだけではない

「 つ!?!? 」

「 凜、気付いたか? 」

「 ええ、今、別のサーヴァントの気配がしたわ。 」

「 数は二人……と、もう一人　　マスターか 」

マスター一人に対しサーヴァントが2人……って

「 そんな、あり得ないでしょ!?!? 普通、マスター一人に対してサーヴァントも一人でしょ! 」

「 それは分らん。が、現に気配はそれだけしか感じられん。

無論、二人のマスターとサーヴァントが手をつないでいて、片方のマスターが姿を隠していれば別だが 」

まあ、その方が辻褄は合うけど

「 ……行くわよ、アーチャー。どうなっているのかこの目で確かめるまではわたし、眠れそうにないの 」

「 凜、それはあまり得策では…… はあ、わかった。指示に従おう、マスター 」

わたしの絶対行くんだと言う空気を読み取ったのか仕方なしに頷きアイツの家へ静かな足取りで入って行った。

P r o m i s e / s t a y n i g h t (後書き)

アーチャーの対魔力って凄く弱いんですね。資料によれば魔力よ
けのアミュレット程度らしいです

二節以上の魔術でも直撃したら致命傷って・・・マジツすか

Contract / stay night (前書き)

やべっ、話が全然すすまねえ・・・(ー；；)

Contract / stay night

(ちい・・・くそつたれが、どうなつてやがるんだ！)

ランサーは困惑している、それはつい先ほどまで自分の優位であった闘いが突然の介入者^{サウザント}によって逆転したからだ。

だが困惑の理由はそれだけではない、それは自分と闘っている少女が異常に強いので使用している武器^{エモ}が視認できないからだ。

(くそつ、不可視の武器か・・・！)

相手の武器が見えないのはそれだけで脅威だ。持っている武器の形状、その武器の牙が届く範囲、それらが分からない故に迂闊に近づくことなど許されない。

「卑怯者め、自らの武器を隠すとは何事か・・・！」

「 「

少女の猛攻を捌きながらランサーは悪態を吐くが少女は答えず攻撃の手を緩めようとはしない。

(チイ、無視かよ)

ランサーは苛立ちを隠そうとせず処女の猛追を捌く・・・否、捌く事しか出来ない。

しかしランサーとて最速のサーヴァント捌きながらも少女の攻撃の隙を窺う　　そう、決めにかかる一撃を

（　　っ、来た！）

少女の攻撃が若干、大振りになったのを見逃さずに軋んだ足へ全力を注ぎ飛び退く

「　　くそっ、」

ランサーは悪態を吐く、それはいきなり出てきた介入者サーヴァントに対してか攻撃を捌く事しか出来なかった自分に対してかは分からないが

「ふ　　どうしたランサー？最速のサーヴァントが止まっていたは狙い撃たれるだけだぞ。」

「・・・は、出来るもんならやってみな・・・と言いたいところだが一つ聞かせな

てめエの持っている武器、そいつは剣か？」

ランサーの目が少女を射抜く、獣のようなその目は窮地に立たされているのに実に楽しそうだ。

「さあ？どうだろうな。戦斧かもしれんし槍剣かもしれん・・・はたまた弓か暗器か・・・どうだろうなランサー」

「ぬかせ、セイバー」

そんな少女の答えに苦笑しながら槍を地面につける。それは明らかなる戦闘を止める意思表示だ。

「……？どうしたのです、ランサー」

「いや、なに、ここいらで痛み分けて事にしねえか？」

「逃げる　　と言う事ですか」

「まあな、オレがここに来た理由はお前と闘うためじゃなかったしよ、そこで不抜けているお前のマスターも使いもんになってねえだろ？」

それにまだ開戦の合図も上がってねえんだし、ここはお互い次の勝負まで持ち越すってのはどうだろう」

「　　断る」

「そうかよ、こっちはもともと様子見だったんだ。それにサーヴアントが出たんなら長居する気は無かった　　」

「そういっなよ、もう少し長居しようぜ。」

「……っ！だれだっ！」

ランサーの言葉を遮るように第三者の声が庭に響いた、セイバ―も衛宮士郎もその声に驚きを隠せないまま身構える

「どうでもいいがセイバ―、お前、衛宮から離れすぎだ」

第三者の声と共にセイバ―は　ハツとなり衛宮へと駆けだすがそれよりも速く鎖が士郎を縛り付ける。

「　　っ！くそっ！」

「マスター！」

衛宮は必死に鎖を解こうとするが微動だにしない、セイバーはそんなマスターを助けるべく鎖を断ち切ろうとするが

「動かないでください、死にますよ。」

「くう」

見惚れるくらい綺麗な髪と黒の眼帯を付けた女性・・・ライダーに阻まれる

「ちい、なにがどうなって　　っ!？」

「　　」

続いてランサーに炎の玉が降り注ぐがそこはランサー、軽い身のこなしで避けて行く。

「　　ちい、この魔術は」

「考えてる暇なんて無くてよ？」

「ガッ　　くっ　　」

アーチャーとの戦闘、続いてセイバーとの戦闘と令呪による縛りのせいで本来のスピードが出せないランサーに不意打ちの束縛する魔術が掛かる

「ん、上手くいったな」

「そうですね、まさかシンジ君の作戦がこんなにいくとは思いませんでした」

「まったくね。」

そんな会話をしながら夜の暗闇から現れたのは

「え．．．しん．．．じ?」

「おま．．．バゼットか．．．?」

衛宮の親友、間桐慎二とランサーの元マスター、バゼットだった

．．．．．

ふう　　捕獲は成功つと．．．あとは、

「慎二っ、なんなんだこれは!」

「衛宮、少し静かにしてな」

「くっ」

オレがそう言つとライダーが持っていた短剣の刃を衛宮の首へと当てる、

「くっ、マスターを離さない！この卑怯者め！」

「卑怯？なにを言っているのですセイバー、戦場において油断していたこの子が悪く守りきれない貴女に落ち度があるのです。」

「何を　っ！」

ライダーの言葉に腹が立ったのか殺気がより増している

「止めるってライダー、オレ達は闘いに来たんじゃないんだ。」

「・・・すみませんでした、シンジ」

「いいよ、衛宮も少しだけ待っててくれ、
それじゃ、ランサーお前に頼みがあるんだが」

「ちっ、なんだ」

キャスターに縛られて動けずいるのがよほど腹ただしいのか不機嫌な感じを隠そうとしない

「元のマスター・・・バゼットをマスターにしてオレと手を組め」

「な　に？どう言うつもりだ」

「難しい事じゃないだろ？元々、お前のマスターはバゼットだった、それが不意打ちと裏切りによって別の奴をマスターにせざる得なくなってしまうた」

「なら今度は逆にオレ達がそれをすればいい、なあに、お前が協力してくればどうにでもなるさ、そうすれば元の鞘に戻るしな、簡単だろ？」

オレがそう言うとバゼットは俯きながらランサーに近づく

「ランサー、もう一度・・・私と・・・」

「ハッ 断る」

「っ！」

ランサーの答えにバゼットは固唾をのむ

「確かにな、お前の言う通り元々バゼットはオレのマスターで、いけ好かねえアイツがオレのマスターになっちまった。」

「けどな、そんな奴でも今はオレのマスターだ、だからよ、てめえから裏切ってそっちにつくんなら死んだ方がまだましだ。」

「ラン・・・サー・・・」

そんなランサーにバゼットはショックを受けてるみたいだがオレは思わず笑ってしまった。

「たとえどんな奴が主でも自分から裏切る事はしない」そんな忠誠心の強い奴だからこそオレはこいつが好きだ。

「わーっ たよ、お前の言う通りにしてやる、キャスター頼むわ」

「まかせなさい。」

そう言うとキャスターは懐から短剣を取り出す

「ま、待ってください、キャス」

静止しようとしたバゼットの声より一瞬早く、キャスターの短剣はランサーの胸に突き刺さっていた

「破壊すべき全ての符 ルール フレイカー」

キャスターが宝具の真名を言った瞬間、庭に光が煌めく。

その光が収まった時、ランサーは自分の体を見る・・・その表情は怒りではなくただ納得がいかない、そんな感じの表情だ

「おい、何しやがったキャスター」

「ありとあらゆる魔術を破戒できる・・・これが私の宝具。例えば　　サーヴァントとマスターの契約を断ち切り、マスターのいないサーヴァントを作ることとも可能となるわ」

キャスターがそう言うとランサーは納得した表情になる。

そう、この宝具はサーヴァントシステムを有する聖杯戦争で絶大な効果が発揮できる。

そしてそれを喰らったランサーは今、誰とも契約していないはぐれサーヴァントと言う状態になっている

「・・・成程な、すべての魔術の破戒と裏切りを可能にする事が出来る宝具を持つ英雄サーヴァント」

しかもクラスがキャスターと来れば・・・てめえの真名も大体察しがつくつてもんだ。」

縛られなお且つ魔力の供給も断たれたと言うのに不敵に笑う事が出来るのはさすがは英雄と言ったところなのか、

「でもなランサー、これはお前のためでもあるんだぜ？お前が契約を裏切る行為なんかが嫌いな性格つてのは知ってるからな

だからこの後、お前がバゼットと契約しても“自ら裏切った行為”には当てはまらないだろ？」

「ハツ　これで生き残るにはバゼットと契約するしかない・・・か？」

「ちよっ　シンジ君、こんな方法とってもランサーは私と契約するわけが」

「いいぜ、契約してやるよ。」

その瞬間、何故かバゼットが地に手と膝をつける　どうしんだ？

「なんだ？納得いかないか？元マスター」

「う・・・と、当然です！もちろん契約してくれることは嬉しいですが、先程“自分から裏切るくらいなら死んだ方がましだ”と言ったばかりじゃありませんか。」

「ああ言ったな、けどよ今回はオレ自身から裏切ったわけじゃな

くキャスターに無理やりそうさせられた訳だ

んでもって救われる方法はお前と契約する、その見返りとしてその坊主達に協力するって事だ、なら変な意地なんて張らず素直にその救いの手をつかむ方が普通だろ？」

「言ってる事は分かりますが」

「んなら早くしよっぜ、ほらキャスターも魔法陣を解いてくれ」

「わかったわ。」

するとキャスターは魔術の行使を止め、ランサーの縛りを解く
ランサーは自分が自由になったのを確認し右腕をバゼットへ伸ばす、バゼットもそれに応じて右手を出す

「告げる、汝の身は我の下に、我が命運は汝の槍に、聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら 我に従え、ならばこの命運、汝が槍に預けよう・・・！」

「ランサーの名に懸け誓いを受ける・・・そして我が主として認めよう、バゼット」

契約した瞬間、バゼットの右手の甲に痣の様なものが出来る
令呪だ

「ふう、これでひと段落っ」と

軽く息を吐きポケットからタバコを取り出し啜えて火をつける、
ようやく家に帰れると思って振り返ると縛られたままの衛宮と

「ま、貴女のような貧相な胸では男性は靡なびきませんよね、だから貴女自身が男装して生きてたわけですか」

「言つてなさいライダー、わたしは自分の事を女だと思つてませんし必要ありません、大体そのような脂肪の塊などあつても鬨あはいに支障が出るだけでしょう。」

「ふ　成長速度が著しく悪い女の癖みですか」

「・・・む、だからさつきから言つてるでしょう、私は王として生きなければいけなかつたのですから」

「話を逸らさないでください、この話の問答はどちらが魅力的か？と言つ事です。ハッキリ言いますが貴女に魅力的な所など皆無です」

「んな！？か、皆無とはなんですか！た、確かに女性的な魅力では貴女に勝てませんがこれでも一國を背負つた事のある王です！魅力的な場所はたくさんあるはずですよ！」

「そうですね、ある“はず”・・・なんですよね？」

「なんですかその言い方は！大体、貴方だつてそんな露出の高いピッチピチの服なんて着て男どもを翻弄してきた尻が軽いだけの女性じゃないですか！」

「む　失礼なつ、この服は姉のお下がりですよっ！」

なんだ、この会話の内容は

そう思いふと衛宮を見ると目と目があつた・・・見ただけで分か

るアイツは今、この状況の説明と收拾をオレに願っている

「……また後日説明するわ、衛宮」

「イヤちょっと待ってくれよ！コレ、どうすんだよ！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「がんばれ〜」() ()

「じゃねえだろ!?!」

Contract / stay night (後書き)

どもです、前回の話の続きと言つかまあ、分かりにくいかもしれ
ませんが前回、凜が見た場面ですね

おかげで全然話がすすまねえっす、ま、私のせいなんですけどね
(オイ)

「慎二、これはどう言う事なんだ？」

衛宮君がライダーから解放され慎二に問う。ちなみにセイバーは
と言うといまだに警戒を解いておらず戦闘態勢を崩していない。

「しかも、キャサリンさんまで」

「おい坊主、キャサリンって誰だ？」

「キャスターの偽名だ」

「ククツ・・・そうか、キャスタの偽名か」

「何がおかしいのかしら？ランサー」

慎二からキャスターと呼ばれている女性がランサーを睨みつける。
おそらく“キャサリン”と言う偽名は慎二が考えて言ったものなん
でしょうけどセンスが無さすぎない？

「マスター下がっててください」

「え、あ、おいつ」

衛宮君を守るかのように立ち先程までランサーと鏖迫り合いを行

つていたであろう不可視の武器を構える。

よほど警戒しているのか隙を全く見せないが当然と言えば当然。目の前にはサーヴァントが三人もいて警戒するなと言うのが無理な物だ。

「おいおいセイバー。お前さんのマスターは混乱しているぜ。今ここは闘う事より自分のマスターに状況説明する事じゃねえのか？」

「黙れランサー。まずは貴方たち全員を排除した後に説明すればいい」

「ちょっ、ま、待てよっ！」

ここで衛宮君がセイバーに対して物凄い形相で詰め寄る。　　つて言うか何で衛宮君のサーヴァントがセイバーなわけ？

「排除って何なんだよ！まさか・・・殺す気なのか！？」

「そのつもりですけど？まさかマスター本当に何も知らないんですか？」

「理由なんて知らない・・・けど、どんな理由であれ殺しなんてしちやダメだっ！」

会話の内容からすると衛宮君は何も知らないようだけど、よくまああんな戦いを繰り広げた相手にあんな啖呵を切れるわね。大物なのかそれとも単なる馬鹿なのか・・・

そんな事を思つてふとアーチャーの方を見てみると。

「・・・・・・・・っ」

「アーチャー？」

何に対してなのかわからないがとても怒っている。いや、アレは怒っているなんてもんじゃなくて

「おいっ遠坂！」

「っ!？」

ヤバッ気付かれてたの!？

「そんな所に隠れて出てこいよ！今から衛宮に聖杯戦争の事を説明するからさ」

「・・・どうする？アーチャー」

「ふむ、あの小僧の言う事を聞くのが先決だな。このまま拒否をし戦闘にまで連れ込むのは好ましくない

むしろ向こうから話し合いに持ち込んでくれるなら願ったり叶ったりだ」

アーチャーの言う事は尤もだ。もし拒否して戦闘になればランサーとキャスターとライダーの三人を同時に相手にしなくちゃならないから・・・

「仕方がない。行くわよアーチャー」

「了解した。凜」

「つてなわけだ」

慎二が先程の出来事について色々と説明をしてくれた。その前に遠坂がいた事も驚きだったし遠坂と慎二も魔術師もしくは魔術の事に対して理解がある事も驚いた。

だがそれよりも驚いたのは

「・・・本当なのか？その、魔術師同士の殺し合いが始まるって
いうのは」

「正確にはもう貴方は巻き込まれてるんだけどね。」

遠坂はそう言って出しておいたお茶を飲んでのどを潤し説明するのが少し疲れたのが軽く一息入れる。

「まあ、あれだ。一種のスポーツの大会の様なもんだと考えれば
軽く思えないか？」

「思えるわけないだろうっ！」

慎二のあまりな言い方に腹を立て大きな声を出してしまう。

「でも衛宮君。間桐君の言ってる事はあながち間違いないわ
よ。」

「なッ　　!？」

「ある一定のルールが存在し、参加人数も決められて唯一生き残った者だけが聖杯と言う名のトロフィーを獲得できる。」

「どう？スポーツの競技に似てないとは言いきれないでしょ？ま、確実に死人が出る」という点を除いたらただけど・・・ね」

遠坂の言葉、言葉の上でなら理解はできた。けど到底納得できるようなもんじゃない。いや、そもそも

「そんな悪趣味な事を誰が、何のために始めたんだ？」

「さあ？そのあたりは聖杯戦争を監督している人から聞いてちょうだい。」

「うわ、いきなり投げやりになったぞ。」

「それよりも間桐君、わたしは貴方に聞きたい事があるんだけど？」

「んあ？なんだ？」

「ここで遠坂が慎二に質問を投げかける。慎二はと言うと先程から吸いだしたタバコを吹かして・・・って！」

「慎二っ！おまつ未成年なんだからタバコなんか吸っちゃダメだろ！」

「いいじゃねえかよ別に、減るもんじゃあるまいし」

「駄目ったら駄目だ！」

そう言っただけ俺は慎二の手からタバコを奪い取り流しの方で火を消しゴミ箱に捨てた。後ろの方で何か声がしているが無視だ無視。

「ちつ、・・・まあいいや。んで？遠坂、聞きたい事ってのはなんだ？」

「貴方はマスターなの？」

「ああ、まあな。」

「そう。それじゃどうしてキャスターとライダーの二人を使役することが出来ているのかしら？」

貴方の家系、間桐は魔術回路も無くなってすでに枯れてしまったと思っただけどわたしの思い違いかしら？」

遠坂の質問に慎二が考え込む。しかし今日は驚いてばかりだ。まさか慎二の家と遠坂の家が魔術師の家系だったなん・・・ん？

「ちよ、ちよと待った。慎二が魔術師の家の出っけ事はまさか桜も　この戦いに？」

「ああ、心配すんなよ衛宮。普通、魔術師の家系は一子相伝だから兄弟がいる家では一番上のやつだけ魔術に関する事を教えてもらってそれ以外は普通の生活を送っていくのが一般的だ。」

「そうか。　よかった」

慎二の答えにホッと胸をなでおろす。桜がもしこの戦いに参加し

ていたらと思うと・・・

「んじゃ、遠坂の問いに答えるとだなキャスターはまあ色々あつてな、はぐれサーヴァントになった所をたまたま見つけて助けたんだ。

まあ、ライダーの方はうちの家の事だから端折るけどチヨイツとした裏技を使って呼び出したんだ。」

「ふうん、たまたま・・・ね。ま、いいわ。ライダーの事はそつちの家の事情だし。これ以上聞いても詳しく教えてくれなさそうだし」

「いいのか？」

「じゃあ聞きましようか？それも暴力的な聞き方で」

「ははっ、勘弁してくれ。」

冷や汗を掻きながら丁重に断る慎二。って言うか暴力的な聞き方ってどんな聞き方なんだ？

そんな事を思っていると慎二のやつも話があると云ってきた。どんな内容なのか聞いてみると「手を組まないか？」と言う事だった。

「ちょ、待ってくれ。俺はまだこの戦いに参加するかどうか決めてないんだぞ。」

「でもまだ不参加と決めた訳じゃ無いんだろ？そこはまあ聖杯戦争をよく知っている奴から話を聞いて決めればいいさ。問題は遠坂お前なんだが」

「お断りよ」

うわ、バツサリ慎二の協力を切り捨てやがった

「マジか？」

「大マジよ。確かに貴方と手を組めば勝利へ近づけるとは思うわ。けどね、それだと聖杯が手に入らないじゃない。

そんな“どっちも勝利です。バンザイー”なんて小学校の運動会じゃあるまいし。なにより白黒ハッキリつかないと気持ち悪いでしょ。」

「そうか。残念だな。協力してくれたら見返りにこれを渡そうかと思っただのに」

そう言うその後ろからトランクを一つ取り出し鍵を開け中身を遠坂に見せると

「これは」

驚いたことにトランクいっぱい詰まった宝石だ。種類は様々で少し見ただけなんだけどあれはスングエ上玉と分かる・・・けど遠坂がそんなエビでタイを釣る作戦に引っ掛かるとでも

「じっくり検討させてもらうわ。」

案外早く餌に食いついたなあオイ。しかも目がかなりキラキラしていて・・・あれ？俺が憧れている学園のアイドル“遠坂凜”はどこに行ったんだ？

「あ、それと衛宮とそのサーヴァントには」

「ん……？」

「む、物で釣ろうと考えているのですか。だとするならば非常に浅はか」

「とってもおいしい江戸前屋のタイヤキ2ダース（キャスターの魔術による保温効果のおかげで今でもホックホクの出来たて感覚で味わえるよ）」

「……ふむ、検討してみましよう」

あれ？セイバーもあっさり食いついちゃったし……って言うかセイバーって英雄なんだよね。

うん、それは遠坂の説明で聞いたんだけどなんでタイヤキを目の前にただけであんなに真剣な眼差しで見つめてんのさ。

「ま、じっくりしつかり悩んで検討してみてくれ。」

そう言う慎二は立ち上がり帰ろうとする。

「そいじゃ遠坂、衛宮のお世話しつかり頼むぞ」

「え、ちょっ、待ちなさいよつ。間桐君が連れて行けばいいでしょ」

「んな事言っても、もう帰らないと桜が心配すんだろつが。」

ちらりと時計を見てみるとそれはもう結構な時間だ。慎二の言う

通り桜のやつは心配しているからもう帰した方がよさそうだな。

「ああ、それとランサーにバゼット、お前らもホテルの方に帰るとけよ」

「え？で、ですが」

バゼットさんが反論しようとするがランサーが代わりに頷き小さい声で説得する。

「……今お前が言ったらアイツを殺すだろうがこのミス短気め」

「……そ、そんな事は、出来るだけ我慢して見せますよ」

「……どの口が言ってたんだ。いいからここはあの坊主の言う通りにしとけ。じゃねえとぜってえメンドーな事になるに決まってるんだ。お前は自覚がないだろうから言っておくが動くトラブルメーカーなんだぞ。わかってんのか？」

分かってんなら言う通りにしろ……返事は？」

「……はい。」

何を話してたかは分からないがバゼットさんの顔がカテキントっぷりのお茶を飲んだような渋顔になっているのを見て納得行っていないんだなあと分かる。

「んじゃ、オレはここちら辺で帰らせてもらっわ。じゃあな衛宮」

そう言うと慎二はトランクのカギを締めライダーに持たせて足早に帰って行った。

.....

間桐慎二が自宅へ帰っている道中、ライダーが思っていた事を慎二に言う

「シンジ、なぜあのような嘘を？」

「ん？なんか言ったっけ？」

「・・・サクラの事ですよ」

そう言うのと納得がいったように頷く。

「あの場は別に桜が魔術師かどうかなんて言う議論をする場じゃないだろ。」

「それはそうですが、いつかはバレる嘘ですよ」

「んならバレた時に言えばいいさ。実際アイツが魔術師だって知らないのは衛宮だけだったし、それに馬鹿正直に答えても衛宮は食いついてきてしつこく問いただしてくるに決まっているぞ。」

それにな、オレはあの場で言い争いをしたかった訳じゃねえんだ。オレがしたかったのは衛宮や遠坂に“お前らとは戦いたくないから手を取り合わないか？”と言う意思表示がしたかっただけなんだ。」

「あら？それだと今回の交渉は別に失敗してもかまわなかったというの？」

キャスターの質問に首を横に振り否定する。

「もちろん交渉が上手くいけばそれはそれで御の字だけだな。初めからうまくいくななんて思っちゃいけないさ。だから最初は“協力しよう”という匂いを嗅がせて“協力してくれたらこんな特典があるよ”と言っておいたんだ」

「だからあの大量の宝石なんかを用意していたのね」

納得がいったキャスターとライダーは頷く。

「……ですが、何故もう一つの方には大量のタイヤキを？」

「ああ、それはセイバーが食べ物に関して目が無いからさ」

「へえ、以外ね」

「だろ？」

実際、初めてセイバーを目の当たりにしたものはその凜々しい姿からまさか食べ物に弱いなんて想像はできないだろう

「ま、これでひと段落終了って訳だ。じゃあ次は」

「間桐臓硯……ね」

「ああ、いつまでもあんな爺さんと顔を合わせてちゃ身が持たねえしなによりアイツは完全な悪だ」

「決行は……明日？」

「ああ、明日……明日の内に」

「爺さんを殺す」

決意を固めた慎二の眼はどこかキラついていた。

Negotiation / stay night (後書き)

爺さんをやっっちゃうんだぞー！と、言っているワカメですが次回
は衛宮&遠坂サイドでやっていきますんで

せっかくいきがっているワカメ・・・ごめん(笑)

ではでは

Church / stay night (前書き)

「どうした？言峰」

冬木市ただ一つの教会内での出来事。それはどうでもいいことで、大変珍しい事である。

それはここの教会の主である言峰綺礼が表情を変えるほど驚いているからだ。

そしてそれを問うのは第四次聖杯戦争の時に受肉した言峰のサーヴァント、ギルガメッシュ。左手には高級なワインが注がれているワイングラスを、右手には強固な鎖が握られておりその先には死んだように頂垂れている人物がいる。

「ふむ 何らかの理由でランサーがやられたようだ」

その言葉に「ふんっ」と一喝し髪を掻き上げる。

「雑種といえども英雄と謳われたのだから何かの役には立つかと少しばかり期待していたが

所詮、雑種は雑種か・・・くだらん」

その表情は明らかに失望している。溜息を吐き視線を言峰へと向ける

「第一、なぜ我がジツとしていなければならない？あのような雑種を使わずとも片っぱしから我が片付けていけば済む話だろう？」

「チカラ 我の能力を理解している貴様ならその程度理解できるだろう。」

ギルガメツシュの言葉に少しだけ笑みを浮かべ答える

「確かにそうだが・・・それでは面白くはあるまい？それに下手に動けば魔術教会に知られ、聖杯戦争そのものを中止に追い込まれる危険性もある。」

それはお前にとっても望まない事態だろう？なににより
イバーの事はどうするつもりだ？」

「なにを今さら・・・アレは我の物だ。どうするも何も必ず手に入れてみせる。」

当然だろ？この世の全ては我の物なのだから」

「ふむ・・・だとするならば迂闊に動かない事だ。なに、あと少しの辛抱で全てが貴様の手に渡るのだ。」

言峰の言葉に高らかに笑い声を上げる

「ククク それもそうだな。考えようでは此度の戦いは我の為の儀式と言う事が。」

うむ、許そう言峰。今しばらくの間、我は待つとしようではないか。」

ギルガメツシュの言葉に笑みを浮かべながら言峰は私室の出口へと向かう。それには興味が無いのかギルガメツシュは上機嫌のままワインを口へと流し込んでいた。

Church/stay night

夜の街を歩く。時計の針は1時を過ぎ灯っている光は街灯と月の光だけだ。

こんな時間帯に出歩けば多少なりとも恐怖を感じてしまうのは仕方がない事だろう。ただ

「それにしてもセイバー。アナタそんな恰好で恥ずかしくないの？」

「そんなもの シロウを護るためならば羞恥心など幾らでも取り払えます」

「あ、やっぱり恥ずかしいんだ」

「.....」

セイバーと遠坂、二人の美少女と一緒にいるだけで何故かそんな恐怖心よりも違うドキドキ感が湧きあがってくるのには、まいる。

ちなみにだが先程の遠坂とセイバーの会話はセイバーの恰好についての会話だ。

家を出る際、鎧のままじゃ目立つからと俺の服をセイバーに貸そうとしたのだが断固拒否された。

確かに女性が男物の服を着るのに抵抗が生まれるのは分かるが鎧姿じゃ目立つだろ？と説得してみたところ

「恰好などはたいして気にしませんが私とシロウでは丈が合わなさすぎる。それではいざという時に素早く動けない。」

と、一喝され却下された。

それでは、とせめて隠そうと雨合羽を着せたら遠坂に笑われ機嫌を悪くしてしまったのか　むすつとした表情を崩さないまま一緒に出かけた。

気にしてんじゃない。と思ったのは俺の心の内に留めておこう

「あれ？こつちじゃないの？衛宮君」

「橋に出ればいいんだろ？ならこつちが近道だ」

何はともあれ速く行って速く帰ろう。もう一人・・・遠坂のサーヴァントがいるのは知っているが目に見えないのでいないと同じだ。そんな状況下でこの美少女二人と肩を並べて歩くのは非常に抵抗がある

ああ、でもこんな事を思えるなんて俺も正常な男子高校生だったんだな。学校の女子数名からは一成と出来てるの？なんて聞かれる事だってマチマチあったし。

イヤ、ホント。あれには参った。数日後には聞き覚えのない噂を聞かされたし漫研の所からは俺と一成のソツチ系の漫画まで製造
.....販売の一步手前で見つけられて良かった。本当に良かった。

「.....凜。シロウは何故あんなに哀愁を漂わせているのですか？やはり聖杯戦争の事で」

「それにしても異様じゃない？少しただ事じゃあ、そう言えばただ事じゃないと言えば」

「凜.....？」

「衛宮君もただ事じゃない噂を立てられてたわね。確か　そう！柳洞君とイクとこまでイッタって言われてたような」

「行つてないぞ!？」

ンなでたらめ情報どこで仕入れたんだ!？」

「シロウ.....」

セイバーは何故かとてつもない優しい目つきで俺を見てくる。まるで聖母みたいな

「恋愛感情は人それぞれです。事実、私が生きていた時代ではそう言う事もよくあった出来事ですし自由ですよ。

例えシロウが男好きでも私は決して軽蔑しません。」

俺の勘違いだったよ!くそっ!

「いいから行くぞ！俺達は遊びに来たわけでも夜の道で楽しくおしゃべりをしに来たわけでもないんだ！」

涙が出そうになりつつも必死に耐えながらセイバーと遠坂を促して教会へと足を向けた。

.....

「再三の呼び出しにも応じぬと思えば変わった客を連れてくる。・
・いつも君の行動には驚かされるぞ、凜。」

「うっさいわね。いいじゃないこうして来てやったんだし、それに彼は」

「ああ分かっている。彼が七人目のマスターか」

「そう、一応魔術師だけど中身はてんで素人みただから見てられなくて・・・」

教会についた衛宮、遠坂、セイバーの三人。セイバーは教会に入らず衛宮士郎と遠坂凜が教会に入った

その教会内で出会ったのはその神父。言峰綺礼その人だ。

そして出会うなり悪態をつき合う遠坂と言峰。そのやり取りからは二人の付き合いの長さを感じ取れる

「なるほど、それでここに来たわけか。では、その少年に感謝しなくてはな」

会話の中でもともと教会に来る気の無かった遠坂が何故来たのか。それを理解した言峰はその要因となった衛宮へと視線を向ける

「」

その視線に衛宮は思わず足を退く。なんて事は無いただ視線を向けられたそれだけ たったそれだけの事なのに衛宮は妙な威圧感を放つ言峰に警戒心を抱いた

「私はこの協会を任されている言峰綺礼という者だ。君の名はなんと云うのだ？七人目のマスターよ」

「衛宮士郎。けど、俺はまだマスターなんてものになった覚えは」

ないからな。そう言おうとした衛宮だったがそれを遮るかのよつに

「衛宮 土郎」

「え」

言峰からの重圧が悪寒に変わる。言峰の口元が舌舐めずりをするかのような動きを見せる。それは腹を空かせた肉食獣が獲物を見つけた。そのような感じだ

「礼を言う。衛宮土郎。よく凜をここに連れて来てくれた。君がいなければアレは最後までここには来なかつただろう」

だがその雰囲気は一変する。それは錯覚だったかのように周りの空気も元に戻る

「では始めるとしよう。衛宮土郎、まずは君に質問だが・・・君はどこまで理解できている？」

「どこまでって・・・分かるわけ無いだろ。第一、マスターとか聖杯戦争とか検討なんて全くつかないんだ

それに、マスターってのがちゃんとした魔術師になるモノだとするなら、他にマスターを選びなおした方がいい」

「・・・なるほど、これは重症だ。彼は本当に何も知らないようだな」

「だからそう言ってるじゃない。そのあたりからしつけてあげて・・・そう言う追い込み得意でしょ」

そう言う遠坂を余所に言峰はククク、と笑う。その会話の内容はハッキリ言えば不安要素がてんこ盛りだ

「よかるう。では君が巻き込まれた“聖杯戦争”この事について詳しく説明するとしよう」

.....

吐き気がする。

視界がぼやけ

焦点を失い、ぐらりと体が崩れ落ちそうになる

だが、その前に何とか踏みとどまる。歯を噛みしめ両方の手にこれでもかと爪を食いこませるぐらいの力で握り拳を作る
それで何とか意識を保つ事が出来た。

「あんな・・・あんな事が起こっているのにお前たちはま

だ繰り返すのか！」

だが溢れんばかりの怒りを抑えられなかった俺はソレを目の前の神父へぶつける。

「ふう　先程も言っただろう。私利私欲で動かぬ魔術師などいない・・・と、例えどのような願いだろうと勝てば願いの叶う聖杯を手に入れる事が出来る。

ならば、自然とこの戦いが続いているのも納得できるはずだ。」

ふざけるな。そう言おうとしたが目の前の神父を再度見て留まった。何かは分からないがアイツにそれ以上言っても無意味だつて事が理解できてしまったからだ

「なに、そう悲観する事でも無い。十年前の事を繰り返したくないのであればお前が勝ち残ればすむ。

そちらの方が他人を当てにするより遥かに確実であろう？」

目の前の神父の言葉通りだ。戦う理由も参戦する理由も無かった
だがそれはさつきまで、ほんの数時間前までの話だ。

だが今はハッキリとその動機もそして意志までもが自分の中で芽生えているのが分かる。

「さあ、尋ねよう衛宮士郎。この戦い　聖杯戦争に参加する意思があるのかどうか、ここで決めよ。」

だから、答えも決まっている。腹も括った。あんな事を二度と起こさせない。その為には

「マスターとして戦い最後まで生き残って見せる」

まずは明確に戦う意思を自分の中に刻み込む事だ。

「それでは君をセイバーのマスターとして認めよう。この瞬間、聖杯戦争は受理された。

各々が自身の誇りに従い、存分に競い合え」

神父は俺の答えが気に入ったのか笑みを浮かべながらそう宣言した。

「さあ、終わったわね。それじゃこれで」

そう言つと遠坂はズカズカと入ってきた扉に歩を進めて出て行くとする

「あ、ま、待てよ。遠坂」

遠坂において行かれまいと駆け足で行こうとした時

「喜べ少年。君の願いはようやく叶う」

「っ」

その言葉に思わず振り向くがそこに神父の姿は無く、ただその言葉だけが俺の心の中に深く響いた。

.....

「ふん、アレが此のたびのセイバーのマスターか」

「ああ、素人だそうだ」

「ふん」

言峰の私室でその部屋の主、言峰綺礼とそのサーヴァント、ギルガメッシュが会話している

「しかし驚いた。お前の話だと此度の聖杯戦争のセイバーも前回と同一人物とはな。」

「間違いはないのか？」

「我を誰だと思っているのだ言峰。我が間違うはず無いだろう。あの気配は間違いなく我が愛してやまないセイバーだ」

上機嫌に笑いながら足を組みかえる

「しかし恐ろしいまでの確立だな」

「くくく、なに、考えてみれば当然の事。我とセイバーは互いに惹かれあっている。だからこそこの結果だ」

よほど嬉しいのか笑みが絶えない。まるでその顔は子供のように無邪気だ

「しかしだ、我も驚いたぞ。今回、セイバーのマスターがまさかあの」

「ああ、衛宮切嗣の息子とはな。私も驚いているよ」

そう言いながら言峰が見ているのは冬木市の住民票。そこにはしっかりと父の欄に衛宮切嗣、息子の欄に衛宮士郎と書かれている

「くくく、実に楽しみだ。此度の戦いは前回より一層楽しめそうだ」

「ああ、同感・・・？ ふつ、ようやく気付いたか」

言峰がそう言って視線を少しずらした。その先には強固な鎖により縛られ体は傷だらけのまま膝をついている者だ

「き・・・さま」

「ほう、令呪を使われ我に躡けられてなお、そのような目をしているとはな」

「だが、それも限界だろう。最後の抵抗と言ったところか」

言峰とギルガメッシュの言葉を聞き取れているのかどうかは分か

らないが目だけはしっかりとこの一人を見据えている

「それで？どうしたと言うのだ。最後の言葉だ。聞き届けよう」

「こ のっ」

その者は自我を失いそうになりつつもしっかりと踏みとどまる

「だ れが、き、さま なんかに」

そうは言うが明らかに限界だ。目は虚ろで焦点などまるで合っていない

だがそんな様子を言峰は笑みを絶やさず見つめ続け目の前の者にこう言った

「そうではなくてはつまらん。せいぜい抵抗しろ。銃^{ガンナー}使い」

Church/stay night (後書き)

新キャラ〜ガンナ。折角の二次だし？新キャラ出てこいやあ！
ってな感じでガンナ 登場。

しかしそれだと8人のサーヴァントを出すことになるし色々面倒
なので小次郎には出番なしにさせてもらいました。

小次郎ファンの方々面目ないっす。

まあ、そんなわけで(どんなわけ?)ガンナのデータを公開し
ます

クラス、ガンナ

真名、???

マスター、言峰綺礼

属性、中立・中庸

性別、男性

身長、175

体重、60

筋力D 耐久D 俊敏C 魔力B 幸運C 宝具???

ってな感じです。

宝具の方はいまだに考え中なんでハテナにしてみました。保有ス
キルの方も徐々に明らかになっていけたらしいです。

Return/stay night (前書き)

「しっかしお前、よくあの状況から生きてこられたな」

新都の某ホテルでの声。それを発した主はソファーに座り胡座を掻いている。

「そうですね。私も最初は驚きました。目が覚めてみれば普通の家でしたから」

それに答えるのはランサーと再契約したバゼット・フラガ・マクレミッツ。

自分の体・・・主に治療した左腕を確かめるように1回、2回と曲げたり延ばしたりしている。

「普通の家　だあ？そりやおかしくねえか？あん時切羽詰まっていたからよく見てなかったがそんな軽い怪我じゃなかったはずだろ？」

「それはそうですね。なんせ腕をスッパリ切り落とされたんですし」

だったらなおさら納得いくはずもない。一肢と意識を失ってしまったほどの大怪我を負ってしまったのだ。

バゼットの言う“普通の家”にそれを治す治療器具などは無いはずだ

「まあ、貴方が聞きたいことは分かります。ですが仕方がないんです」

バゼットの言葉にますますランサーは首を傾ける

「起きたときには、もうこの左腕に義肢を装着され治っていたんです。」

おそらく治療した場所は別だったのでしょうか」

なるほど、とランサーは納得し頷く。だがここでもう一つランサーの中で疑問が生じる。

「しかし誰がお前をその医師の所まで運んだんだ？」

ランサーの問いにフルフル首を横に振り分らないと言った表情だ

「私が目を覚ました時に居たのはその医師と一枚の手紙でした」

「手紙……？」

バゼットは頷くと懐からその手紙を取りだしランサーへと手渡す

「なにになに？　“どうも。俺の名はリッド・アンカース。まあアンタは俺のことは知らねえだろうし？俺もアンタの事は知らなかつただけどさ、とある情報提供者にアンタのことを知らされてな。普段なら助けなかつただけど、そいつには昔ウチの者がお世話になつたみたいでな。その借りを返すために働いただけだからさ気

にしなくてもいいよ。ああ、でもアンタは良い人そうだから気になるか。気になるよな？だからアンタの貯金、8割貰ってくな。これで貸し借り無しだ。心配すんなよじゃくな”・・・ってなんだこれ？」

「さあ？ただ通帳からは本当にキツカリと財産の8割ほど引かれていました」

普通なら戸惑ったりあるいは怒りの表情だったりと浮かべるはずだがバゼットはそんなの気にしないと云った表情だ。

「まあ、命あつてのもの種ですしね。それだけで私を救ってくれたというなら安いと言うものです」

「・・・お前がそれで良いんなら別に構わねえけどさ。そう言やお前を助けた医者ってのはどんな奴なんだ？」

「ビレッツ・フォン・ベルリヒンゲン殿です」

バゼットが言ったベルリヒンゲン家の祖はその昔、義手を付け戦場を駆け回っていた事で“鉄腕”の異名を誇っていた。

その子孫であるビレッツは先祖の誇りを胸に刻み込み、今ではその義肢を使った治療を主に医師として暮らしている。

「あ、ちなみにビレッツ殿は腕はいいのですがかなりの変わり者で、数年前に両腕を切断された患者の態度が横暴だったから左右逆に義手を着けたらしいですよ。もちろん、ちゃんと動くようにはしたそうですけどね」

「おいおい・・・そりゃ、いくらなんでも」

「ええ、この事が知られて医師免許は剥奪。今は無免許でバリバリ活躍中です。」

「いや、ダメだろ。それ」

ランサーの溜息がホテルの一室に響いた

Return / stay night

午前7時、日は昇り冬木の街を照らす。この日はとても清々しいほどの天気だ

「シュツ、シュツ、シュツ」

そんな中で旋棍トルンフマーを使いながら素振りをしているのは間桐慎二。額には僅かながら汗を掻いている

「精がでますねシンジ。」

「ん・・・？」

そう言っつてタオルを渡すのはライダー。受け取った慎二は汗を拭き首にかける

「ふう どうしたんだ？ライダー」

「サクラが呼んでますよ。朝食の用意が出来たので」

「そっか。さんきゅライダー」

慎二はそう言っつとベンチに置いてある飲料水を飲み喉を潤す

「そいやあキャスターはどうした？」

「キャスターは仕込みをしています。大丈夫です気付かれてはいませんよ」

「そつか んじゃ行きますか」

「はい」

慎二の声にライダーは返事をし後ろから付いていく。すべてが上手く行っている事で慎二は上機嫌だがライダーは思う

(上手く行きすぎている。いくら何でもあの爺がここまで放っておくでしょうか？)

ライダーはそう思い慎二に伝えようとするが止まる

(いえ、ここで不安を与えるのは得策ではないですね。作戦実行はすぐですし伝えて消極的な行動に移してしまうかもしれません。その方がより危険に晒してしまう。なら)

ライダーは誓う。自分の胸に強く刻み込むように小さな声で思いを言葉にする

「……………私がシンジもサクラも守りましょう」

言葉は口にする事で魂が宿り自らに暗示をかける。意味がないそう言われればそれまでだが要は気持ちの持ちようだ。

言葉にすることで自分に自信を持たせる様に暗示をかけ行動に移

す それは英霊もヒトも変わらないのかもしれない

.....

「む……出来損ないか」

朝一番の挨拶それかよ。

オレはそう悪態を吐こうとしたが思いとどまる。どうせ後少しの辛抱なんだしな

「……おはようございます。お爺さま」

だから丁寧に挨拶をする。……心の中で思ってる事と違う事を口にするのってとっても辛いなとシミジミ思った瞬間だった

「あ、おはようございます。にいさん。少し待っててくださいね」

そう言うと桜は最後に温めておいた味噌汁を注いで持ってきてくれた。

席にはオレ、桜、爺の三人だけでキャスターは別の場所、ライダーは霊体になっている

「いただきます」と合唱しようとするが爺は味噌汁が来ると早々に食いだした。

「たく生い先短いからって場の空気乱して良いもんじゃねえんだぞ？」

「して慎二よ」

爺が味噌汁を口に注ぎながらオレに話しかけてくる。 なんだってんだ？

「昨晚はどこに行っておった？遅くまで帰ってこんかったが」

なるほど昨日の事か。そっちからその話題を振ってくれたのはありがたい。

「はい。昨日は少し衛宮の家へ・・・偵察へ行ってきました」

オレの言葉に桜はビクツと振るわせ爺は「ほう」と興味深そうに唸った

「どうじゃった？」

「はい。衛宮はセイバーを召喚しランサーと戦闘を行った後、遠坂に偶然出くわしてしまったようです」

「ほう！そうかそうか」

爺は驚きつつも嬉しそうに笑みを浮かべる。だが桜の方とは言えば俯いてしまって箸も動いていない

「カッカッカッいやいやどうして。良い働きをするではないか慎
二」

「いえ」

“出来損ない”の働きが異常に良かったのが嬉しいのか爺の機嫌は右肩上がりだ

「フム、ならばこうしてはおねんな。慎二よ、もっと話を詳しく聞かせろ」

爺はそう言つとオレにもっと話をさせるように促してくる

「ならば・・・蟲蔵へ移動しましょう。あそこならゆっくりお話が出来ます」

「ふむ　それもそうか」

オレの提案に爺は頷き席を立ちリビングを出て蟲蔵へ向かう。オレも食事を中断し置いて行かれまいと付いて行こうとし席を立つ。

「あ　にいさん」

「ん？どした？」

だが桜の声によって少し止まる

「え　　つと、あの」

なにを言っているのか分からないのだろう。桜は目を泳がせ頻り

に言葉を探すが見つからない

「桜」

「え……？」

そんな桜にオレは優しく頭を撫でる

「心配すんな。全部上手く行く」

「で、でも」

桜は優しい。だからなにを心配してるのかも分かる。

「じゃ約束しよう」

「やく……そく……？」

「ああ、この聖杯戦争が終わったらオレと衛宮と遠坂と、キャスターもライダーもみんな花見に行こう」

「花見？」

「そうだ。満開の桜の木の下でな。絶対楽しいからさ。だから約束な？」

オレはそう言うと桜の髪がクシャクシャになるぐらい強く撫でる

「に、にいさん…！」

桜はオレに怒っているが決して手を払おうとしない。

「
ですよ？」

「ん・・・？」

ただ何かを呟く。だがオレはそれが何か分からずに聞き返すと桜はハッキリとした口調で

「約束ですよ？守ってくださいね？にいさん」

「ん わかった。約束だ」

オレと約束を交わした

.....

蟲蔵へと降りる階段に三つの影が存在する。その主は慎二、ライダー、臓硯の三人だ。

長い長い階段　それを下つてくと広い空間に出る。臓硯が普段過ごしている場所でジメジメして薄気味悪いところだ

「さて　それでどうなった？遠坂の娘と衛宮は戦闘を行ったかの？」

臓硯の問いに慎二は笑みを浮かべながら答える

「さあ？それをアンタが知る必要性はないんじゃないかねえの？　ライダー！」

「　　っ!？」

慎二の言葉と同時にライダーが臓硯へ刃を向ける

「ギイアアアアアア!？」

その刃が臓硯の体を切り刻む。血しぶきが舞い、体の部位が慎二の足下まで飛んでくる。

「　　ぶんっ」

それを蔑むような目で見つつ蹴り飛ばす

「ギ・・・ギギ・・・オ・・・ノレエエエエ！」

怒りを露わにする臓硯。それと同じく周りの蟲達が慎二を襲うがライダーが素早く戻り慎二を守る

「・・・無様だなあ？臓硯？」

「ゴ　　ノオオオ！出来損ない・・・ガアアアア！　　ウラ

ギル　　カアア！」

「裏切る？何のことだ？オレは初めっからお前の手下になった覚えはねえよ。」

臓硯は何か体を創り直そうとするがライダーがそれを許さない。再生したところからズタズタに斬り裂いていく

「カ　　コレデ　　ワシ　　ガ　　！」

生への執着だろうか。一向に臓硯は諦めようとしな

「ああ、知ってるさ。お前の核は桜の心臓に寄生させてんだろ？この程度でお前は死なねえだろうよ」

「　　っ！ドコ　　デ　　」

「知ったかって？それを言ってどうなるよ。もうすぐ死ぬアンタが情報を得たところで無意味だぜ。あともう少しすればキャスターが盛った毒、そいつがアンタの核へ流れ込んで死滅させるだろうよ。」

ついでに桜の体内にある蟲共もな。」

「ギイ !?!」

「そうさ。今日の朝食にはキャスター特性の毒が入れ込んでんだぜ。ま、アイツもずいぶん苦労したらしい。なんてつたつて桜の心臓と体内に寄生しているお前の核と蟲共を全部死滅させなきゃいけないかったんだしな。」

しかも桜には出来るだけ負担をかけないような そんな都合のいいモンとなると如何にキャスターと言えど簡単じゃないさ」

そう、簡単ではないが不可能でもない。キャスターの能力“道具作成”のスキルランクはA・・・これはその気になれば疑似的とはいえ不死の薬を作り出すことも可能なのだ

「だから誇ったまま死んでもいいんだぜ？サーヴァントの手を煩わせる魔術師なんてそうそういいねえんだからな」

慎二は懐から液体の入ったペットボトルの蓋を緩め臓硯に投げつける。その後ライターを取り出し火を点けたまま臓硯へと投げつける

「ま、簡易の火葬だ。後始末はキャスターに任せてあるから心配すんな。年寄りの火の不始末による事故死で処理されるだろうよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

臓硯の声が聞こえない。死んだかあるいは声帯が潰れたか

「でもアンタ、蟲の固まりだしな。死骸なんか発見されなないかもだけど別に良いだろ？自分で望んでその体になっただんだしな」

「カ」

「ん・・・？なんだ、まだ生きてんのか。渋てえな」

慎二は頭をボリボリ掻きながらため息を吐く。それと同じくして蟲蔵に扉の開く音が聞こえる。どうやらキャスターやって来たようだ。

「お、キャスターか後少しだけど待って」

「いいから早く逃げて！」

「っ！？」

キャスターの声と同時に慎二の体が宙に舞う。

「ぐっ・・・ライダー？どうした　え？」

否、ライダーによって抱えられただけのようだ。だが慎二はそれどころではない。

「カッカッカッ」

「っ」

そう、なぜなら慎二の目の前には先ほどまでバラバラになっていた臓硯が笑みを浮かべながら元通りに再生していたからだ

「……な……んで……」

「慎二、よく聞きなさい。桜の心臓にアイツの核は無かった。あ
るのは体に寄生していた只の蟲達だけよ」

「はあ!?!」

慎二は驚愕する。明らかに自分の記憶とは違うからだ

「カツカツカツ驚いとるようじゃの。慎二よ」

「……くっ」

慎二は焦る。自分の思いとは全く別方向へと進んでいるのが見て
取れるからだ

「いやいや、僕も驚いておるんじゃよ。前回とは全く違う行動に
打って出てくるもんじゃからの」

「っ、おいちょっと待て……前回って……」

「ふむ あの時貴様は確か……そう、桜に殺されてたの」

「っ!」

「サクラに……!?!」

「　　いつたいどう言うこと!?!」

慎二だけではないこの言葉にキャスターとライダーも驚愕する。
が慎二はすぐに頭を切り替える

(前回・・・しかも爺は間桐慎二が桜に殺されたって・・・)

冷静に分析する。状況は明らかに不利だ。核となる部分が桜にいないとなれば臓硯を完全に倒す事は難しい。

と、なると今はこの場から逃げることに専念するしかないが状況が整理できてないと人の体は万全な状態では動けない。必ずどこかで思考が動きを制御してしまう

(考える・・・あり得ることを全部だ・・・!)

だから考える。とりあえずの守りはライダーとキャスターに任せ
て、考える事だけに集中する

(臓硯はなんで桜に自分の核を寄生させなかった・・・)

思考を止めるな

(“ 前回 ”) これは第三次聖杯戦争のことじゃない・・・)

立ち止まるな

(じゃあなんだ？なんでこんなイレギュラーが起きる・・・？)

あらゆる事を模索し

(イレギュラーはオレだけで・・・オ・・・レ・・・？)

可能性を引き出し

(もし・・・アイツがオレと同じで・・・)

答えを

(だとしたら・・・っ！)

導き出せ

「
そうか」

「む……?」

「慎二?」

「なにか分かったのですか?」

ライダーの問いに慎二は頷く

「ああ、分かったぜ。臓硯お前

未来から来やがったな」

慎二の答えに臓硯は ニヤリと笑い

「カツカツカツ、正解じゃよ。慎二」

余裕を含んだ笑みで慎二に自らのことを告げた

Return/stay night (後書き)

はい。まさかの爺様逆行済み。

いや、爺様をこんな風にさせる気なんて最初は無かったですけど
ね、この段階で隠居してもらうつもりでしたが・・・それじゃあ・・・
・ねえ？(なにが？)

ああ、爺様が私の中でどんどんチートになって行く。

Field / stay night (前書き)

(あーくそつ、メンドクセ ことになってやがる)

慎二はギリツと歯を噛みしめながら心の中で悪態を吐く。頭の中が混乱しているのだがさらに臓硯の笑い声が慎二の感情を逆撫でする

「ちつ、その耳障りな笑い声を止めろってんだ」

「カツ、カツ、カツ、焦つとる様じゃの？慎二」

臓硯の言葉に慎二は答ええないが沈黙は肯定の意味でもある。

実際、慎二は自分が非力だと言うのは理解しているのだ。ほぼ毎日鍛えてはいるがそれは“鍛えないよりマシ”な意味合いであって鍛えた所で自分がサーヴァントに勝てるとは露ほども思っていない。

だからこそ慎二は自分の武器は何たるかを認識してこの聖杯戦争に臨んだ。でないと思ってしまうからだ。これは夢や小説、ましてやテレビゲームでもなく今起きている現実なのだから・・・

「大体何が目的だ？永遠の命でも欲しいってか？がめつい爺さんだ」

「ふんっ、そんなものに興味無いわい。僕の目的は別じゃよ」

・・・だが臓硯が今後起こりうる先の事を知っているのなら慎二の武器は完全になくなる。慎二の武器は唯一つ 　そう、“情報”なのだ。

情報とは戦闘時では武器にはならないが、戦争と言う事に関しては非常に強力な武器になる。

相手のマスターとサーヴァント、その戦闘方法や性格、さらには必殺の武器や技・・・ありとあらゆる情報は前もって知っておくことで真価を発揮するのだが、臓硯も自分と同じとするならば唯一のアドバンテージを失う事になる

「いやいや、僕もこうして此処に居る事は不思議でならんが・・・まあ、可能性としては幾つか推測できるが」

「へえ、そうか。ならその推測をオレにも聞かせてくれないか？」

「カツ、カツ、カツ・・・これから死に逝く人間に言っようなるんじゃ」

臓硯の言葉と共に周りの空気が一変し気温は確実に下がり殺気と蟲達が周囲を埋める　来る、そう思い慎二は足を一歩ずらし直ぐにでも動けるような体制をとり、ライダーとマスターは慎二を護るように構える

ライダーもマスターも今ここで臓硯と闘っても勝てると思っではない　無論負けると思っではないが“勝てない”のだ。

もちろん状況や闘う場所が変われば変わってくるかもしれないが兎も角いまは闘っても勝てない事は明白、ならば逃げればいいのかここから出口までは思っより遠く一瞬で脱出することなどは不可能

「・・・キャスター、ライダー」

「シンジ？」

「どうしたの？」

不意の呼びかけに二人は慎二の顔を見るが慎二は軽く目配せをしただけで他には何も言わなかったが、ライダーとキヤスターはその意図に気付き一瞬驚くが特に否定は無い・・・むしろそれが最善の策だ

「ん・・・？どうした？もうお終いかの？ じゃあ」

「ああ、そうだな。ここは一つ逃げさせてもらうか キヤスター！」

「・・・！」

キヤスターの短い詠唱と同時に自身の右手から魔力を貯め込みそれを天井に向けると同時にレーザーを発射それがポツカリ天井に穴を開け脱出口を造る

それと同時にライダーが慎二とキヤスターの体を抱えながら一気に壁を蹴り上がり落ちてくる瓦礫を避けながら脱出する

「・・・ふむ やっと行きおったか」

カツン、と杖を地面に突くと同時に蟲達はその姿を徐々に消しそこには瓦礫が落ちてくる中、悠然と立っている間桐臓硯だけしかない

「少々、手違いはあったが・・・まあ、よい」

ふう　と、一息つき慎二達が脱出した天井を見上げる

「精々生き延びよ。貴様には働いて貰わなければ成らないのじや
からの」

Field / stay night

「桜！」

「ゴホッ、ゴホッ、・・・に、にいさん？どうしたんですか？」

「副作用か」

「え・・・？」

なんでもない。そう告げるとともにオレは桜の体を抱きかかえる

桜が咳をしていたがそれは恐らくキャスターが食事の際に盛った毒が原因だろう。出来るだけ桜の体に負担はかけないようにと言っていたがかかってしまったモノはしょうがない。

それよりも今は一刻も早くこの家からだ出さなくてはならないから

「ライダー頼むわ」

「はい」

最低限の返事をしオレ達は一気に間桐邸から飛び出る。周囲の人から見れば行き成り何が起こったんだと言わんばかりの一瞬の出来事で扉は粉々に砕けているが振り返る事なんてしない

今は少しでも早く遠くに逃げなければならぬのだから

「っ、にいさん！？血が！」

桜の声にふと肩を見てみると服が避けそこから血が出ている。多分あの地下から脱出する際に落ちてきた瓦礫に当たってしまったのだろう。

が急いでいたため気付かなかったのか。言われるまでは痛みすらなかったのに視認した瞬間僅かながら痛みが出てくる

ああ オレ相当焦ってたんだなあ湧き出てくる痛みを感じながらそう思う

「・・・ライダー先ず衛宮の家に行こう。行けば衛宮や遠坂、セイバーにアーチャーもいる。あの爺さんもそう簡単に手出しはできない筈だ」

「え・・・ど、どう言う事ですか！？遠坂先輩が先輩の家に居るって むぎゅー!？」

「ちよつと静かにしてような？桜」

有無を言わず桜の口を紡ぐ今は説明しているより衛宮の家に逃げ込む事が先決だ。まずは安全面を確保しなくては・・・

「大体あの爺さんも爺さんだ。元々バケモノの癖にさらにバケモノ化しやがって」

「え？お爺様が・・・？どうかしたんですか？」

「殺そうとしたよ。 結局失敗に終わったけどな・・・くそっ」

悪態を突くオレに桜が驚きの声を上げる。

と、そんなやり取りをしているともう衛宮の家の前に到着つと

「ああ、そう言や昨日の夜は教会に行つたんだっけ・・・つ
ー事は」

バーサーカーと殺り合つたのか？本編通りなら生き残つてる可能性が高いが・・・こればかりはなあ

一応、余計な介入は無いようにバゼットとランサーはホテルに返しといたんだけど

「まあいつか。入ろつと」

まあ、そんなこと考えてても仕方ないよな。過ぎちまったもんを後悔してもどうにもならねえ　ここは一つ

「どーにか衛宮士郎が生きてますように・・・ついでに遠坂も」

「ついでって何ですか！？って言うか生きてますようにって先輩の身に何かあつたんで　んぎゅ！？」

「はい静かにな。近所迷惑考えろ」

.....

「
ずず」

「
ほう、これは」

「ええ、なかなか良いじゃない。紅茶とは違っ感じだけど嫌いじゃないわよ」

「えつと どうもです。遠坂先輩」

「ええ、どーも」

まったく、朝っぱらから誰が来たのかと思えば・・・大体何で目の前にセイバーとアーチャーがいるのに寛いでお茶なんて飲んでるのよ？

こっちは夜にバーサーカーと闘って衛宮君は無茶してどうにか帰って看病してちよっと仮眠して目を覚ましてみれば呼び鈴が鳴って

てそれに答えたら慎二達がいて・・・

まあ、お茶を出したわたしもわたしだけど

「んで？家主の衛宮はどした？傷は塞がってるはずだよな？」

「　　っ、ホント・・・何でも知ってるんだ。アンタは」

わたしの言葉にわざとらしく首をかしげるがこっちは確信めいている。

「だっておかしいじゃない。昨夜、間桐君はこれでもかって位あり得ないタイミングでランサーを捕縛、しかも元のマスターを連れて来ていた。

それだけじゃないわ　まるでセイバーの好きな物が何であるか知っていたかのようにピンポイントで持ってきてのよ。これで不思議に思わない方がおかしいわ」

「　　うん（バリバリ）そうだよなオレも（バリバリ）“たまたま”って理由で（バリバリ）誤魔化そうと　ズズ　思ったけど無理があるよな〜確かに」

「　　・・・食べるかお茶飲むか喋るかどれか一つに絞りなさいよ」

　　って言うかアンタの隠し事を暴いたのよ？こっ・・・なんて言うか・・・焦ってくれないと張り合いが無いじゃない

「　　しかし、あのボウヤも無茶するわね。セイバーを庇って自分が犠牲になろうとするなんて・・・ホント、サーヴァントと言う存在

を理解していないのね」

キャスターの発言にわたしただけで無くセイバーでさえも頷いている
余程あの行動が気に食わなかったのだろうか・・・それとも衛宮^{マス}
君^{タケ}にあの行動をさせてしまった自分の非力さを憂いているのか、怒
りと悲しみが混じったそんな瞳をしている

「んまあ、アイツの行動理由も分からん訳ではないけどね」

「どう言う意味ですか？シンジ」

ライダーの問いに慎二は湯呑を机の上において真剣な眼差しで話
し始めた

「セイバー、お前 女の子だろ？」

「はい、確かに性別は女性の部類に入ります。 ですが私自身、
自らを女性とも思っていないません」

「確かにお前はそうだろうけど・・・さ」

何を言いたいのか分からない そんな表情を浮かべたままセイ
バーは慎二の話に耳を傾ける

「それはお前の思いだ。問題は衛宮がお前を女として見てるかど
うかってのが問題だ」

「それは」

「それに・・・だ。衛宮がお前を危険な目に会わせたくないって

言うのは男の性分だ」

「性分　ですか？」

ああ、と慎二は頷くけどハッキリ言っただけでわたしだって慎二が何を言いたいのかわからない。

衛宮君がただ単に騎士^{ナイト}気取りをしているだけならまだしも・・・性分って

「ああ、そもそも男ってのは強くてバカな生き物だ。んで女はやさしく賢い生き物だ

そこでもし女が強さを手にしたら男にはバカしか残らないだろ？」

「つまり、バカしか残らないのが悔しいから出しゃばるって訳？バカバカしい」

そんなくだらないプライドの為に命かけるなんてほんとうにバカね

「凜の言う通りです。今はそんなプライドなんて　」

「そんなバカな事をしなくちゃ生きていけないのが男って生き物さ。アンタも昔はそうだったんだろ？アーチャー」

「……………」

あ、否定しないんだ

「まあ、だがセイバーの言う通り今回ばかりは些^ちか分が悪い

ってな訳でセイバー衛宮に闘い方を教えてやってくれないか？」

「え・・・？私がですか？」

慎二の話によるとこうだ。別にサーヴァントと闘える力を身につけるって訳じゃなく闘うとは何たるかを衛宮君の体に叩き込んでくれと言う事らしい。それを知っているのと知っていないのでは大違いだ、との事

ああ、後はキャスターが魔術を教えるって事だけだ

「で？間桐君はそこまでして衛宮君に尽くして何を求めているのかしら？」

等価交換・・・これだけ衛宮君に尽くし解いて何も望まないなんてあり得ない。もしそんな奴がいたら偽善か・・・反吐が出るほどのお人よしぐらいね

「別に？オレと手を組んでくれればそれでいいさ。もちろん遠坂、お前もな？」

「アンタ、頭おかしいの？」

聖杯戦争は単なる殺し合いだとコイツも認識してるはず・・・一時だけ手を組むことがあってもそれがズット続くなんてあり得ないし、ましてやこれにランサーやバゼットまで手を組むことになる

こんな大所帯でどうやって聖杯戦争を終わらせる気かしら？まさか“誰も死ななくてすむ方法を見つけよう”なんて甘っちょろいコト言わないわよね？

「ひつでえな遠坂オレは真剣だぜ」

「そう　じゃあわたしは帰るわ。次に会った時は敵だから・・・
覚悟しなさい」

「と、遠坂先輩！」

わたしの言葉に桜が呼び止めようとするがそれは無視する。ハッキリ言つて此処にこれ以上いて情でも湧いて闘う時に支障をきたして敗北・・・それで最悪死ぬなんてアホらしい

だからわたしは少しの情が湧く前に帰ろうと立ち上がり部屋を出ようとしたら慎二は

「オレは真剣に　みんなが助かる方法を考えてるんだぜ？遠坂」

とんでもなく甘っちょろい事を言ってきたのでとりあえず振り向きざまに思いつきり拳を慎二の顔面に叩き込んでやった

Field / stay night (後書き)

短っ！すっげえ短っ！

どうもお久しぶりです。一か月ぐらいですかね？

今回はスングク短かったですね。まあ、リハビリみたいな感じで
ご了承ください

次はもう少し長く書けたらいいなあと思います

Fool / stay night (前書き)

五年前のある日

それはとても月の綺麗な夜だった
俺は何もすることも無く縁側でブラブラ足をなげ出していて父親代
わりの衛宮切嗣と月見をしていた

この頃の切嗣は外出も少なくなっていた。昔はよく外へ行つて、
海外に行くこともザラだったのだが・・・
だが俺はその当時がとても嬉しかった。切嗣オヤジと一緒に入れる時間が
増えてて凄く嬉しかった

だがそれは、いま思えば凄く後悔する・・・何で気付かなかつ
たんだ、と　それが死期を悟った行為だと何で気付かなかつたんだ

「子供の頃にね、僕は正義の味方にあこがれていたんだ」

「憧れていた？」

昔そんな事を言った切嗣に俺は少しだけムツとしながら聞き返した。
過去形で言った事に過敏に反応した俺の顔はよほど不貞腐れている
のだろう

親父が俺の顔を見てクスクス笑いソレにますます不貞腐れる　今
思い返しても俺はまだまだ子供だったんだな

「うん、残念ながらヒーローは期間限定なんだ。大人になるとそ

う名乗るのが難しくってね」

俺の頭を撫でながらそんな事を言う切嗣の顔を見て妙に納得してしまった。理由は分からないけど

「じゃあ、しょうがないかな」

「ああ、本当にしょうがない」

お互い相槌を撃って笑いあう

「うん、爺さんはもう大人だしな。無理なんだろうけど俺なら大丈夫だ。まかせろって、爺さんの夢は」

“ 俺が、ちゃんと形にしてやるから ”

そう言い切る前に切嗣は頬笑みを浮かべる。ただ、その顔が凄

く穏やかだったから

だからすぐには気付かないけど、だけどちゃんと後で気付いた。

切嗣が死んでいる事に

ただ、悲しいかな？見慣れていたのかどうかは分からないけど騒ぎ立てる事無く俺は静かに親父の顔を見ていた事は凄く覚えている

その頬に伝わる一筋の雫を感じながら

だけど親父が死んでからずっと分からない事がある

“ 正義の味方 ” ってどんなものなのかとか、どうやったらなれるのかとか、切嗣の口癖だったみんなが幸せだったらいいとか、まあその実現方法とか

イヤイヤそれよりも今大切な事はもっと別にある様な気がしてしょ

うがないと言うか

ズドンッ

そんな大きな音と共に俺は起き上がる

「な、なにが　っ！」

すぐに様子を見に行こうとして体を走らせようとしたが急に腹部へ痛みが走った

何故なのかは分からないし理解できない

ただ、痛めてる腹部を見てみるとこれまた頑丈そうに何重にも巻かれている包帯を見つける

「・・・？なんだ？これ」

訳が分からない・・・と言うよりは昨日の事をまるつきり覚えていない　否、思い出せない
その不条理な事に首を傾げながらもさっき聞こえた音が気になるので体に気合を入れて歩きだす

「しかし、何だったんだホント・・・あの音は」

そう、アレはまるで何かを殴ったとか壊したとかの音じゃなくて

「完全な爆発音だったよな・・・」

そんなことに不安を覚えつつ俺はとりあえず今の方へ行きそ〜つと襖を開けてみた・・・すると

「・・・なにやってんだ？」

そこにはいろんな人がいて桜も居て・・・親友の慎二や何故か学園のアイドルの遠坂凜まで居て
ホントならそこだけで結構驚くべきところなんだけどそれよりも驚く事があつて・・・

「ぱ？おばよ。えびみゃ」

「あら？おはよ衛宮君」

慎二の顔に遠坂の拳が奥深くまで減り込んでいるのだった

「ふう……それじゃいいかしら？」

遠坂が怒っている……。のは仕方ないだろう。何だかんだ言っているのは優しい

んまあ、色々厳しく発言をして来る所もあるが根は良い奴

「頭を地面に擦りつけながら一生わたしの奴隷として生きてますって言いながら謝りなさい」

良い奴なんだが照れ隠しがホント酷い。アレじゃまるで脅しだ。遠坂の目を見るとそれが本気の発言ツぽいからとてもコワイ

「あ、いやちょっと待ってくれ。何だお前そんなに怒ってんだ？　って言うかどうして桜だけじゃなくて慎二まで？」

それにそこに居る人たちも一体……」

「なんだ？　昨夜の事忘れたのか？」

「……昨夜の事って　　うっ」

急に気分が悪くなり吐きそうになる衛宮。　　ショックで思いだせなかったようだがようやく思い出したようだ

「そう　　昨夜はオレと一緒に熱い夜を過ごした。あ、ちなみにさっきの吐き気はつわりだね」

「ちげえよ!?!」

「あら? 違うのかしら?」

「　　少し残念です」

「　　どこがだよ!?! なにが残念なのさ! って言うか桜! お前本当に残念そうな顔をするなよ! 遠坂もそのニヤニヤ顔はやめる!」

ライダー、キャスター　グツジョブだ。桜もナイスなりアクションをありがとう

止めるって遠坂。そんなしてやったりみたいな顔すんなよ。顔がにやけちゃうじゃねえかよ

って言うか衛宮ってホント思った通りのリアクションするよな。弄りがいがあるし・・・ってアレ? セイバーはどうした

「シロウ　　例え貴方がそのような事をしたとしても私は決して軽蔑などしません

なぜなら私は生前、そのような愛憎劇など見た事があるからです

ああ、アレは雨が燦々と降っていた午後の一と時でした。幼かった私は下町へ探索に行っていました

当時の私は色々な物が見れること自体がとても楽しかったからなのですがそこで何やら怒声が聞こえてきたのでソレを頼りに見に行くところには居たのは　　」

「もういいからセイバー！朝っぱらからそんな話を真面目にしないでくれ！」

「む……？そうですか？シロウがそう言うのであれば従いますが」

ナイスセイバー。お前のその天然さ加減は良いぞ。いずれはトックラスへの仲間入りが出来る筈だ……何かはオレもしんねえけど

「さあ、与太話はここまでにしまししょうか衛宮君？　率直に聞くけど、貴方昨日の事覚えてる？」

遠坂の問いに一応頷く衛宮だがその顔色が優れない。　んまあ、内臓ぶちまけたら気持ち悪いよな普通は

「じゃあまずは状況確認ね。昨日あれからどうなったか貴方に教えてあげるわ」

んでもって遠坂は昨夜の一件の事を手短かに話した

まずは衛宮が腹をぶった切られて気を失った後、何でか知らないけどバーサーカーとそのマスター、イリヤは立ち去ったとの事

その後、すぐに遠坂が衛宮の治療に手をつけようとしたがその前に衛宮自身が勝手に元に戻り始め気付いた時にはきれいさっぱりだったらしい

まあ、でも傷が治ったからと言って意識が完全に戻るはずもないしセイバーも怪我しているので衛宮を家まで運んでやったとの事

「ここで重要なのが貴方は貴方一人で勝手に元に戻ったって事。確かにわたしは手助けをしたけど完治させたのは貴方自身の力だっ

た・・・」

「そうだったのか」

「衛宮コワイなお前。アメ バか？単細胞か？勝手に増殖？」

「できねえよ！？」

「 単細胞・・・ね。上手い表現じゃない単細胞バカってことでしょ？ピツタリじゃない

特に、バーサーカーに突っ込んでいくとこなんかバカとしか言いようがないわ」

容赦ねえなあ遠坂。あーほらほら、落ち込むなよ衛宮。別にお前が馬鹿で困る人間なんてお前ぐらいしかいねえんだから気にスンナ

「まあ、彼が馬鹿かどうかはこの際置いて 彼自身に治癒能力が無く、その上アーチャーのマスターである貴女も手を加えていない これらの話を纏めてみると彼の体が元に戻ったのはサーヴァントが原因ってところかしらね」

「私・・・ですか？」

「そうね、キャスターの言う通り貴女を召喚セイバした際に何か手違いが起こった。それによって貴女と衛宮君との間に何らかのラインが生じてしまった って考えるのがベストなんでしょうけどね

まあ、いいわ。とにかくあんまり無茶しないことね。今回は助かったから良い様な物だけど次にあんな怪我して助かる保証なんてゼロに近いんだから

だから多少の傷なんて治る　なんて甘い考えは捨てたほうがいいわよ。じゃないといろんなものを捨てることになるわよ

例えば寿命とか勝負運とか預金残高とか色んな細胞とか預金残高とか　とにかくいろんなものが減ってるに違いないんだから」

「遠坂　預金残高は関係ないと思うけど・・・しかも何で二回言う？」

「アンタバカ！？魔術つてのは金食い虫よ！使っていればドンドンお金も減っていくんだしだから間桐君と手を組まないかって言われて宝石を見せられた時すっごく迷ったんだから！」

んまあ、確かにそうだよな。間桐の家と違って遠坂の家は宝石をバンバンに使うし、オレもそこを突いて手を組まないかって言った・・・あ

「わりい遠坂」

「む、なによ」

すっごく心苦しいし、言い難いし出来れば言いたくないし・・・でもいずれは言わなきゃいけない事何で言っておく

「アレ　持ってくるの忘れてしまいました」

「な・・・なんですってえ！？アンタあれ忘れたって言うの！？バカなの！？アレ目的でアンタと手を組もうと打算したわたしが馬鹿みたいじゃない！」

うん、オレが悪かった。それは認めるけどさ汚い本音をこ

こで漏らすなよ

「凜、浅ましすぎるぞ。周りを見る。殆ど君に引いている　い
わゆるドン引きと言う奴だ」

「~~~~~っ」

自らのマスターが余りに変な発言をしたため窘めるアーチャー。
遠坂はアーチャーのその言葉に少しだけ周りを冷静に見渡すと引く
わ引くわのドン引き状態

さすがに気まずくなつたのか急に大人しくなる遠坂

俯き加減で顔を赤くしている様は可愛らしい女の子なのに・・・
俯いた理由がお金への執着心から来た羞恥心だからその可愛い仕草
も一気に冷めてしまうのだった

.....

「さあてと、一通りお話も終わった事だし　衛宮もこの戦いに
参加するってな感じで良いか？」

「

ああ

昨日の教会での話を聞いて俺の意志はすでに固まっている。それを曲げる気なんて毛頭ない

だから慎二の問いには力強く頷いて返す

だけどそれよりも一つ聞きたい事がある

「慎二、何で桜がこの場に居るんだ？」

俺がいま一番聞きたかった事がコレだ。 前回、慎二に桜が関

係あるのかと問い詰めたらあいつは二つ返事で無いと返してきた

だが、今この場には桜がいる。こう言っちゃアレだが不釣り合いだ

「桜は魔術の世界と一切関係が無かったんじゃないのか？」

「ああ、アレは嘘だ。桜じゃ魔術の世界に それこそ足の先か

ら頭のとっぺんまでドップリ嵌っている」

慎二の言葉に桜は体をビクつかせ悲しそうな顔をしてきた

「おまえ！そんな言い方ないだろ！」

「事実だから仕方ねえだろ？それとも何か？この期に及んでまだ嘘を言えつての？」

「そうは言っていない！桜に気を使えつて言ってるんだ！」

慎二の言葉には棘はないがそれと同時に配慮もない。 あんな

言い方されたら悲しむだろ

魔術の世界なんて物騒な場所に立っているだけでも不安なのに・・・
・もう少し言葉を選べってんだ

「言つとくがな衛宮、お前の言っている事は不必要な事だ。今現在必要なのは情報交換と現状確認だろ？」

大体、なにも知らないお前が人の事を心配してる場合か？いま、一番殺すのに手間取らない相手はお前なんだぜ？」

「それはこの場で戦うと言う事か。間桐慎二」

セイバーがスクツと立ち上がり慎二に鋭い視線と敵意を向ける。それと同じくしてライダーとキャスターが慎二を護ろうと囲い込む

「手間取らない相手が衛宮ってただけで殺すつもりはねえよ。第一手を組もうって言ったのは俺だぜ？」

慎二の言葉にますます視線を鋭くさせるセイバー。　　っと、このままじゃ本当に戦いになっちまう

「セイバー座れって。慎二は俺に忠告しただけなんだから・・・な？」

「　　はい」

たっぷり間をおいてセイバーは渋々腰を下ろすがその目は常に慎二へと向けられている

「それじゃ土産を忘れてしまった遠坂とセイバーへのお詫びとしてオレの知っている事を一つ話そっか」

その瞬間ピクリとセイバーの体が震えてしまいさらには何故か悲しそうな表情を浮かべる

楽しみにしてたのか？

「ウチの爺さん 間桐臓硯ってのがいるんだがな。そいつが何かよくない事を考えてんだ」

いたのか？何回か慎二の家に入った事はあるけど全然気付かなかった

「よくない事って？」

「それがわかりや苦労しないよ。あの爺さんのことだから聖杯手にして永遠の命を求めるって思ってたんだがな」

慎二の爺さんの事はよく分かんないからアレだけど慎二の表情から察するに何か嫌な感じがする

「んまあ、メンドーだから殺そうとしたんだがな・・・失敗しちまったし」

「ちよっ！こ、殺そうとしたってお前！」

慎二の物騒な発言に俺は声を荒げる。いくらなんでも殺すなんてそんな物騒な事しなくても

「仕方ねえだろ。後にも先にもあの爺さんは障害にしかなんねえよ
だったら早めに摘んでおくのが普通だろ？」

「いや、だからってなあ！」

「たつだいまー！しろー！お客さんだよー！」

「藤ねえ！？」

な、なんで藤ねえがいるんだ！？曜日確か・・・日曜日じゃん！

「ちよ、ちよっ待つてく」

れ。その一文字を言いきる前に襖が開き藤ねえとランサー、バゼットさんが後ろの方ですまなさそうな顔でいらっしやった

「いやー朝の散歩してたらさう太郎の家の前をこの二人が尋ねてさ」

折角だから一緒に朝ご飯でも一緒にしないって

あれ？

こんなにお客さん？」

「すまねえ坊主」

「断る前に押し切られてしまいました 不覚でした」

うん、俺も完全に頭から飛んでいたよ。と言うよりは不意打ちだったよ・・・ゴメン

Fool / stay night (後書き)

一か月の放置プレイ・・・どっすか？

あ、ごめんなさい別にサボってたわけじゃなかったんです
ただ単にネタが生まれなかっただけなんです(えー

ではでは

母の日（前書き）

「ふあゝあああ・・・ふう」

朝、六時半 間桐慎二はいつも通りの心地よい目覚めを迎える
聖杯戦争が終わって数か月、聖杯戦争中に神経をとがらしながら眠っていた癖が取れずここ数カ月間もなかなか寝付けず疲れなど取れるはずもない

そこで慎二は軽い睡眠薬をキャスターに要求。 実際、薬で解決するのはあまり良くないのだが慎二自身も解決策が見つからなかったため仕方がない

キャスターも慎二の眠りが浅い事は少々危惧していた事なので出し惜しみをせず睡眠薬を慎二に渡す

しかしその時の顔が少し歪んでいる事に慎二は気付く事が出来なかった

「おはようござ・・・」

そしていつも通りライダーが起こしに来てくれる。ただほんの少しだけ歯切れが悪い事以外は本当にいつも通りだ

「ああ、おはようらいだあ。どうしたあ？そんなにぼくとしちやって」

ライダーがとても驚いた様子で慎二を見つめているので慎二自身も気になってライダーに問う

だがライダーは答えようとせず 否、驚き過ぎて答える事が

出来ないと言った方が正しいのだが

「らいだぁ？」

そんなライダーを見かねて慎二は歩いてライダーの方に近寄る

その時慎二が抱いた感想は（ライダーでっけえ・・・）だそうだ。

まあ、だがそれは仕方がないだろう何せ慎二の身長は今現在、
ライダーの膝より少し高い位しかないのだ

「・・・・・・・・あれ？」

そこで慎二はハツとなる。確かに自分の身長はライダーより小さいのは確かだった・・・だがそれでもこんなに見上げないと顔を見る事が出来ないなんて程の身長差がある訳もない

だが自分の起きている状況をすぐに処理できるほどまだ頭は回っていない訳で

「おおきくなつたの？らいだぁ？」

ピシリ とライダーのこめかみに青筋が立ったのを知ってか知らずか慎二はライダーのスカートの裾をクイックイと引っ張る

だがライダーも今はそこに怒るべきではないと1、2回深呼吸をして心を落ち着かせ膝を着きまるで子供に話しかける様な姿勢で

「いいですかシンジ？私は大きくなってはいませんいつも通りです」

「ふえ？」

「ですので結論から言いますと、シンジ貴方が小さく」

ライダーがそれを言いきる前に部屋の襖が開く。その前に立っていたのは若奥様バージヨンのキャスターで慎二を見つけるやいきなり慎二に駆け寄って抱き上げる

「きゃー！。かわういいいい！」

「きゃ、きゃす」

いきなり抱きあげられた慎二は恥ずかしいやら驚くやらで顔を赤く染めながら手足をジタバタしている

だが今の慎二ではそれを振りほどくほどの力はなく余計に強く抱きしめられてしまう

「キャスター、これは」

そこで見かねたライダーがキャスターの行動をひとまず落ち着かせるように慎二を取り上げる

「今日の日付は何月何日でしょう？」

「今日？」

今日は五月八日・・・しかしそれが？との感じでライダーは

首をかしげるがキャスターはむっふっふっとの感じだ

「今日は、母の日　　マザーデイズよ！久しぶりにお母さん気分を味わってみたくて　　」

「見たくて？」

「薬を盛って慎二を子供化させました」

母の日

ライダーがオレを連れて今へと向かいそこに居る桜、遠坂、衛宮、セイバーへ事の事情を説明した

最初はポカーンとしていた四人だったがセイバーが最初に正気へと戻るとともに他の三人も徐々に正気に戻って行ったのだが

「んふん？にいさん、かわいいです」

「ああっ！ずるいわよ桜、わたしにも抱かせてちょうだい」

順応能力が高いのか我が妹はオレを離そうとしない　ああ、いやオレも最初は抵抗したよ。

・・・したんだけどさ

「は～な～せ～よ～さくらあ。くるしいってばあ　」ごもあつ

かいしゅん・・・すんなよお」

「きゃああああ　噛んだ噛みましたよねにいさん！もう一回お願いします！」

と、なんと言うか体が小さくなったせいかどうかは分からないのだが呂律が回らないと言うか上手くしゃべれないと言うか・・・要するに余計に苦しくなった

「　桜、ちょっと落ち着きなさいって」

ここで遠坂が桜にチョップを喰らわして桜の凶行を止め、オレを抱き上げ比較的冷静なライダーへと渡す

なんつーか、思考がはつきりしているだけに女の子にこう軽々持ち上げられるって変な気分だな

「たちまちキャスター、間桐君を元に戻す方法はないの？」

「え・・・？まあありきたりだけど時間がたてば勝手に治るから

明日になれば確実に治ってるわ

大丈夫よくなんたって私が作った薬なんだもん」

だもん、じゃねよ。ってか今日一日ずっとこの姿かよ・・・
外に出れネエジャン。

「ねえ、それよりも・・・慎二。お願いがあるんだけど」

「・・・なあに？」

「（間延び返事　萌えっ！）・・・ハア、ハア、こ、これから私と一緒に買い物に行かない？」

何で興奮してんのキャスター。こええよ・・・いや、マジで
ってかこれから買い物行ってどうすんだよ。昼飯の準備か？そ
うなのか？朝9時に昼飯の食材買いに行くのか？家事って忙しいな

「それよりもまずは朝ご飯でしょう。彼はまだ起きてすぐなので
すから何をするにも食事は摂取しなければ活力も生まれませんよ」

ここで、まさかセイバーがもつともらしい事を言ってくる。
いやさ、オレセイバー苦手だからさこんな風に普通に接してくれる
なんてオレ感激

「そうだな、ちょっと待っててくれ。今持ってくるから」

そこで今まで黙っていた衛宮が立ちあがり早くに作っておいたであろうオレの朝飯を温めに台所に向かう

今日は日本人らしく白米にお味噌汁、そこに漬け物と鮭の塩焼きだそうだ。

「ほら、どうぞ」

衛宮の料理は相変わらずおいしい。実際食べてみればその美味さが実感できるオレは幸せモンなのだろう

鮭の焼き具合は絶妙だし味噌汁は1から出しを取っているとの事。

いや 本当につまい・・・美味いんだが・・・

「はい、慎二 あゝん」

「にいさん、にいさん。今度はこっちを向いて・・・あゝん」

酷く落ち着かない。つーか体は小さくても箸は使えるから一人で食うって言うてんのに譲ろうとしないんだよ。

しかも何か遠坂とか衛宮とかセイバーとかに見られてるからスゲエ恥ずかしい

ライダーは陰から見守るだけみたいな感じでジッと見てくるから恥ずかしい異常になんかこわあい

「あ、あのふたりとも！おれだいたいしょうぶだから、ひとりだとべられるからっ！」

「なに言ってるんですかにいさん！もしも熱々のご飯を落としてしまったら火傷をしてしまうじゃないですか！」

「そうよ！とっても危険なのよ！ママと呼びなさい！良いわね！」
「？」

チヨイ待て！今途中に変なこと言わなかったか！？

「……………シンジ、キャスターが母ならわたしはぜひ姉と呼んでくれると嬉しいです」

「らいだあ！？」

……………

「きゅん、きゅん…おかあさん。」

「ん？どつしたの？慎二」

あれからキャスターはいかにしてオレに自分自身の事を母と呼ばせるかを模索しつつには「お母さんと呼ぶまで離さないわよ」とすつごい勢いで迫って来てその恐怖心に負けてしまった

ばかっ！オレのバカっ！負けんなよオレ！

そんな風に心で叱咤したがもう時すでに遅し・・・ついに「おかあさん」と呼んでしまった

「おや、キャスターさん。今日は慎二君の代わりに子供を連れてきてるのかい？」

「はいそうなんですよ。もうこの子ったら私の事をお母さんお母さんと言って甘えてきて」

「おやおや、そうかい」

しかしあれだ、商店街の人と仲が良すぎると言つか何とというか・・・キャスターめやりおるわ

「お、おかあさん・・・はやくいこ？」

しかもなんていうか見慣れてきた人の前でこんな事を言っただけで恥ずかしいよな。新卒の羞恥プレイ？って思ってしまうぞ
それに対してキャスターはキャスターでもむしろがるし

ただまあ、何でか知らないけどキャスターが手を離そうとしないんだ。

自然に握っているって感じじゃなくて絶対に離そうとしないと言

ったような・・・そんな感じだ

「・・・・・・・・おかあさん？」

オレの呼びかけにハツとなり少しだけ掴んでいた手の力を緩める
だがそれでも離そうとはせず今度は逆に壊れそうなものを扱つか
のように本当に優しくつかむ

そしてキャスターはそのまま逃げるような足取りで商店街を後に
しながら公園へと向かった

「きゃすたー？」

公園に付いたオレはいつも通りキャスターの名前を呼ぶ。ただキ
ャスターは自分の膝の上にオレを乗せたまま　ふうっと一息つく

「ごめんなさいね。少し悪乗りしすぎたわね」

どうしたんだ？そう思わずにはいられない

確かにオレは色々されて確かに恥ずかしかつたのは恥ずかしかつ
たがこんな真剣に謝られてしまうのも少しだけ困る

「昔々の話なんだけどね」

まるでキャスターは独り言のように語り始める

昔々、ある所にそれは美しい少女がいました。その少女は純真無垢で色に例えるならまさに“白”そのものでした

少女は大人になりある男性を愛します。その名はイアソン・
後にその出会いが彼女の人生を大きく変えるとは知らずに

大人になった少女はイアソンのためなら何でもしました。白だった少女の色はピンクに染まり恋する乙女になったのです

ですがイアソンはそんな少女の心を裏切るような出来事を起こしてしまいます

それはイアソンが金羊の毛皮を獲って来た時、少女とその弟のアプシユルトスと共にアルゴ船に乗り逃亡した際とある船団に追われてしまいます

少女はその時愛する男性のみを護るため家族である弟のアプシユルトスを殺害、それを海に捨て追手が気をそちらに向けている際に逃亡に成功します

それから時は経ち、少女とイアソンは結婚をし子供を多く授かりそれはそれは幸せな日々を送っていましたが長くは続きません

イアソンと少女は王族であるが故権力という波にのまれていきます

少女の色はそれからというもの、だんだん黒く　黒くなっていくのです

それからは色々な暗躍に命令を下していきます　暗殺、毒殺、身代わりの殺人・・・少女は恐れられる王女となり人々は恐怖します

そして王女はイアソンに裏切られ誓いを破棄されイアソンは別の女性と結婚することになります

王女は怒り狂いイアソンの婚約相手を毒を盛り焼き殺します

王女は狂気に打ち震え笑いが止まりませんでしたでしたがそれでも母親として子供を愛する心は失いませんでした

ですがそんな黒の王女に悲劇が起こります

それは　王女の愛した子供が全員殺されてしまったのです

王女は毎日泣いて悲しみましたが此処でも更なる悲劇が王女を襲います

王女が自分で自分の子を殺した・・・そのような事が語られるようになります

ですがこれは真つ赤な嘘。王女は子供たちを殺してはいません。

子供たちを殺したのは別の人間なのですがその人間と言うのが以前、王女とイアソンが殺せと言った相手の家族だったので

因果応報とは此の事か　王女の発言は誰も聞き入れず自国から追われる身になり最後は悲しい最期だったようです

「まあ、なにが言いたいのかと言うと 生前出来なかった事をしたかったのよ」

キャスターの生前はメディア・・・文献だけでもホント凄い人生を歩んできたんだと思う

だけどそのキャスターがしたかった事ってこんな普通な事なのか？

「そうね、貴方から見るとそうでもないかもしれないけど私にとっては夢のような一日だったわ」

「おれも、ゆめのようないちにちだったんだけど・・・」

子供化するという前代未聞な・・・まあ、オレがココに入り時点でビックリなただけだな

「いつかはこういう事がしてみたくてね。桜から聞いたら今日は母の日って言うじゃない？

向こうではそう言う事が無かったから・・・ね？」

「もういいよ。おこってないかさ」

そう言ってオレはピョンっとキャスターのひざの上から飛び降りて手を差し出す

キャスターもそれに答えるような感じでオレの手をしっかりと握り返してくる

「それじゃあ、帰りましょうか慎二」

「ああ、かえろっ

おかあさん」

ただまあ、こんな日もあっていいんじゃないかと思う。毎日だっ
たらきついけどさ
時々ならいい思い出作りにもなるから

母の日（後書き）

今日は母の日何でオリジナル編を書いてみました

今回の主人公はキャス子ですね
若奥様のな感じが好きなんです

Tiger / stay night (前書き)

「ん」と、おはようございます・・・？えっと、日本語分からないのかな？ぐっどもくにんぐ」

「ああ、いや藤ねえ此処に居る人たちは全員 日本語が分かるから」

もつとはやくいつてよ〜と言いながら藤村は衛宮の肩をバンバン叩く

少し恥ずかしがりながら言っていた事に対してオレは 羞恥心があったんだと驚かざる得なかった

「む、いま間桐君 失礼なこと思っていたでしょ先生は何でもお見通しなんだからね」

えっへん、と胸を反らせて得意げに発言してくる藤村

あまりにも貧相なナイ乳を強調されても何も起こらないし哀れだぜ

「スウ トレイトオー！！」

「ハートブレイク!?!」

いきなりの藤村の先制パンチ つーか心臓にピンポイントで撃ちこんできやがった

・・・くそっ、何なんだコイツは？伊達さんか？伊達さんなのか？時が止まったぞ

「・・・素晴らしい右拳です」

「えへへ、ありがとうね。バゼットちゃん」

褒めるなバゼット喜ぶな藤村

「ですが下半身の体重移動がまだまだですね。それでは威力が完全に相手へ伝わりません

いいですか？このモーションで腰の回転をですね」

「そんなんばつか言ってるからダメツトって言われんだ」

「グツとお！」

「ぐふう！？……今度、は……リバー……だと……？」

「入れるんです」

どうでもいい、拳の使い方の方の講習なんぞすきにやってもいいからオレで試すな……まあ、オレも悪いんだけどもさ

「……藤ねえ、バゼット ストップだ。話したい事はそんな事じゃねえだろ」

「あ、そうだったそうだった」

藤村が思い出したように手をポンつと前で合わせて話を元に戻すってまだ満足に自己紹介もしてなかったのか

「えつとお……ランサーさんとバゼットちゃんの名前は聞いた

として……そちらの方々は……？」

藤村が恐る恐ると言った感じでオレ達の後ろに居るサーヴァントを訪ねる

まあ、ランサーとかセイバーとかキャスターとかの恰好なら割かし普通っぽいから恐くはないんだけどライダーとかアーチャーとかは……なあ

もろにコスプレ着た白髪褐色のいい歳こいたオジサンと抜群のブローションを隠そうとしないボディコン目隠しおねえさんだもんな
まあ、そんな奇怪な格好の奴らでも藤村の前なら何のその！話していくうちに仲良くなっていくだろ　と思いつつ着々と自己紹介を終わらせていく

「ふむふむ、アーチャーさんは遠坂さんの保護者でキャスターさんとライダーさんは間桐家に居候中つと」

で、なんでかアーチャーは藤村の頭の中では完全に遠坂の保護者らしい

まあ、遠坂がすくしだけイラツとした感情を見せたのは置いてこう

「んで、セイバーちゃんが……」

「はい、私はシロウの家に住まわせてもらう事になりました」

「へ〜そつかそつか」

最終確認でセイバーの事も聞いてセイバーもそれに笑顔で答えて

「士郎の・・・士郎のバカーーーーー!!」

一匹のトラが目を覚ましてしまいました

「しょーぶ！いざ尋常にしょーぶ！しょーぶ！」

で、藤ねえはさつきからこの調子だ

まあ何でこんなことになったのかは大体ご察しの通り 藤ねえがセイバーの事を認められないらしくて「わたしに勝たなきゃ一緒に住んじゃダメなんだからね！」

と一点張りで・・・こちらとしては藤ねえが怪我しないかどうか心配で・・・まあ、セイバーの事だから手加減ぐらいするとは思っけど

「あ、あの・・・」

「だーめ、士郎を護るのはわたしの役目なんだから！どこの誰とも分からない馬の骨に士郎はあげないんだから！」

どーしてもここに住みたいと言うのならわたしに勝ってからにしないで！」

こーなると藤ねえは引かないからなあ。まあ、普通の勝分でセイバーは負けないだろうし・・・と、そんな事を思っていると藤ねえが背中にある竹刀をセイバーに投げ渡す

「ちえーーーーーすとーーーーー！」

前に先手を打って来やがった！？ひでえ！

「む・・・」

だが、セイバーはそんな卑怯でどうしようもなくおとなげない藤ねえの攻撃を軽く体をひねって避けるだけではなく藤ねえの持っていた竹刀も奪い取り形勢はあっさり逆転した

「あ……れ……?」

藤ねえは何が何だか分からないような感じで自分の手元を見る。それにセイバーはふう　と一呼吸おいて藤ねえに降参してはどうか?と進言する

セイバー曰く「貴女ほどの実力ならわたしの実力もさっきのやりとりで感じ取ることが出来た筈です」との事

それに対して藤ねえは俯いたまま起き上がろうとしない。まあ、藤ねえとてそれなりに腕はならした身だ。だからセイバーの様な華奢な女の子相手に手玉に取られてシヨック

「油断したわね!そっちはフェイクよ!」

は、受けてなかったようで藤ねえは組み立て式の竹刀を取り出し一瞬で組み立ててセイバーに襲い掛かる。セイバーはそれに応じようと先程奪った竹刀を構えて藤ねえのひと振りを手首を叩いて阻止まあ、誰でも見て分かるように藤ねえの負けだ

「さあ、もう諦めてください」

セイバーがまたもや進言する。藤ねえ自身も気付いているはずなんだ

長年敵なしと謳われていた剣道家なのだ。それが不意打ちと卑怯な手を使っても勝てなかった事実　次元が違いすぎる事を経験が悟ってしまったのだ

イヤって言ったのは桜も一緒だからとかそんな事じゃなくて

「だ、だって！キヤスターさんやライダーさんみたいな美人なおねえさんと一緒に居たら士郎が耐えられないでしょ！」

と、まあそんな理由だ。バゼットは………？

そんな事を心に思ったが藤ねえの頭にはバゼット「美人」と言う図式は成り立たなかったらしい

バゼットが凄く悲しそうな顔をしてたのが印象的だ

まあ、それから藤ねえは家に何しに来たんだって話になって結局朝食を食べに来ただけで　なんで朝飯食うだけでこんなに疲れんだ

「……ふうご馳走さん」

「それじゃ士郎。粗相の無いようにねえ　間桐君と桜ちゃんも士郎が変な事をしでかさないかちゃんと見張っててね

遠坂さんもバイバイ」

食うだけ食ってあの虎は朝練があるからと勢いよく出て行った……
ってか、朝練ってこんな遅くていいのか？もう10時だぞ

「さあさあ藤村先生も居なくなつた事だしココは一つ共闘するって事で」

「ちょっと待って。私はまだ手を組むなんて言っただけでしょ」

遠坂が慎二の話に意見する。そんな遠坂の目は明らかに不信感マックスな感じで慎二を見つめるが慎二は肩をすくめるだけ

以前の慎二ならあんな目を向けられたら怒ってたんだがな・
と、思いながら遠坂の言葉を聞く

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ間桐君。貴方が自分のお爺さんを殺そうが何しようがわたしには関係ない事だから無視するけどね
そんな事をすれば桜が悲しむでしょ」

「桜が？なんでだ。お前なんもしらねえのかよ遠坂のくせにさ」

「っ」

「おい慎二っ！」

衛宮がいきなり怒りをあらわにする。　　「まったく、遠坂に言った言葉なのになんでこいつが自分自身の事みたいに受け止めてんだよ

「　　そうね、確かに何も知らないわ・・・けどね」

「“けど”・・・なんだ？まさかお前間桐家に口出しすんのか？協定はどうした？うん？」

遠坂がこういう決まりごとに少々堅いのは知っている。桜の事になると若干理性が飛ぶがそれでも基本は規律を重んじるタイプだからまあ、からかい易いタイプなんだろうけどな　冗談はここまでにしとくか

「・・・桜があ爺さんが死んで悲しむかどうかはわかんねえが少なくとも生きていても害しか及ぼさねえよ

だから手っ取り早く殺そうと思ったんだ」

「それでも失敗した・・・と、サーヴァントが2人も居るのに？」

痛いところを突くな遠坂は・・・

「・・・しゃあねえだろ。煮ても焼いても食えない奴っているもんなんだよ」

実際、あの爺さんを生かしてしまったのは痛手でオレのミスだ
言峰とかも早く始末したいがアイツの後ろにはギルガメッシュがいる　奇襲をかけようがまともに行こうがどちらにしても不利な状況には変わらない

だったらまだ始末できる可能性が高い爺さんを殺^やろうと思ったんだが・・・これまたイレギュラーだ　くそっ

「なあ坊主、お前がその爺さんを殺そうと思った理由は大体分かった　要はそのお譲ちゃんにとっては嫌な存在だってんだろ？消したいぐらいに

だがなあそこまで危険視するほどの奴なのか？今ここにどれだけのサーヴァントがいると思ってるんだ。後回しでも十分処理できるだろ」

ランサーがもつともらしい事を言うがそれは駄目だ。あの爺さんの始末を後回しにしてはいけないんだ

って、そう言ってる理解できる訳がないが・・・

「分かったよ。オレが爺さんを始末しようとした理由を話すよと、その前に質問だが言峰から聖杯の知識とか教えてもらったのか？」

「聖杯？聖杯戦争じゃなくて？」

衛宮がオレの質問に対していい所に食いついてくる。

「ああ、まあ先も話した通りあの爺さんの狙いは聖杯によって永遠の命を手に入れる筈だったんだけど・・・なんか違うらしいがそこら辺は無視しとけ

でな？お前らの中で聖杯に対する知識ってのはこの戦いに勝って生き延びれば何でも叶う万能な器・・・ココで言う聖杯が手に入るって仕組みぐらいだろ？」

周りの奴らが同時に頷く

何か知らんが気持ちいい

「んじゃどうやって聖杯は願いをかなえるかだが・・・言峰から聞いていると思うが今の聖杯は空っぽだ。願いをかなえるためには中身を満たしてやらなきゃいけないんだが　それがまたよく出来たシステムでな、中身はお前らだよ」

そうやってオレはサーヴァント一人ずつに目配せをする　ほか
のサーヴァント達は少し驚いたように目を大きくさせる

「ああ、正確にはお前らの魂っていたほうがいいのかな？」

そう言いながら俺は机にある湯呑へと手を伸ばし最後の一滴まで
飲みほしてからにする

「　聖杯がこのからのコップだとするだろ？んでだ、お前らを
殺すとそれは魂になって空の聖杯を満たすようにどんどん聖杯に注
がれていく」

そこからまた湯呑へお茶を注ぐ。まあ、簡易模型みたいなもんだ
これが聖杯だと認識してくれればいい　一種のシュミレーシ
ョンだわな

「つまりお前らサーヴァントは生贄ってわけだ。呼ばれて戦わさ
れて殺され生贄にされるってヤツ？」

「嫌な言い方ですね」

「事実だから仕方ねえんだセイバー。　んでだ、あの爺さんは
オレらが互いに潰し合いをして聖杯を横からかつぱらうって寸法な
んだが・・・」

如何せん今回のあの爺の動きは読めねえ　オレ達が家から逃げ
た際も一切追跡してこなかったのも腑に落ちねえ

「んまあ、いいや。でな、一番危惧してんのは聖杯が奪われると
か爺が自分の願いをかなえるとかじゃなくて聖杯を誕生させようと

している事なんだ」

「「「………?」「」」

「あのね、間桐君。貴方の言っている意味が分かんないんだけど」

遠坂がもっともらしい事を言う。確かにオレの言い方では聖杯自体が危ないものと言っているようなものだ

さつきまで爺さんが危ないと言っていたんだから不思議に思うのも無理はない

「まあ、聞けこつからオレがさつき衛宮に質問した意味が分かる」

「さつき……って言うと聖杯の事について言峰から聞いたかどうかの質問か?」

「ビンゴ　でだ、こつから耳の穴かっぽじってよく聞いとけよ。聖杯の本当の事を聞かせてやるからな」

「いいか？今の聖杯は簡単に言うと穢れているんだ」

「穢れている？」

衛宮が慎二の言葉に首をかしげる。衛宮の印象では聖杯その物が聖なるものなのになぜ穢れるのか。いや、そもそも穢れる物なのか。だとするならばその過程は

と、頭の中で色々な思いが浮かびあがっているようで

それは遠坂や桜、その他諸々も同じ思いの様だ。大体そのような事態に陥っているのであれば

「綺礼が黙ってないでしょ。あんなんでも一応神父で監督役なんだから」

遠坂の言葉に慎二はへっ　と鼻で笑う。その行為にイラッと来たのか遠坂のおでこに青筋が一本立つ

「遠坂、お前は一タイライラしてんな」

「誰のせいだと思ってるの？」

「さあ？それはしらねえけどさ。一応忠告しておくけどそんな気

にしすぎてたらハゲるぜ？」

「はげっ!？」

「ついでに便秘でお腹もポッコリと」

「くっくっ」

「く」

「わっらうなあ!」

ドカーンと遠坂の怒りが爆発したが何だか微笑ましいと言つか全然恐くない感じなのだろう。衛宮も後ろを向き隠れながら笑っている。だがそれが遠坂の魅力なのか非常に可愛らしいとみんな心の中で思ってしまったているのも事実だがいまは可愛らしい遠坂を鑑賞する時ではない

「ふう、それじゃあワンクッション入れた事だし本題に戻るか」

「く　　っ!」

遠坂が悔しそうに下唇を噛みながら慎二を睨みつける。だが慎二はそんな視線を軽く受け流す

慎二自身も遠坂の性格は分かっている攻めの時の遠坂は意地悪く手がつけれないが一旦受けの方に回るとからかい易いことこの上ないのだ

「遠坂のさっきの言葉だがな確かに言峰ならその事を理解しててもおかしくないだろうな。ってか知ってるだろうよ」

「じゃあ、なんで」

「そんなもん言峰綺礼がいかかわしい事を考えてるからだろ」

「い、いかがわしいって……」

衛宮が慎二の答えに苦笑いを浮かべる。遠坂はため息を吐いて、桜の方は頭の中で“いかがわしい”事でも考えてしまったのかほんのり顔が赤い

「んだよ。別に間違っちゃいねえだろ？いけない事はいかかわしい事でやっちゃいけない事はあんな事やこんなことで、最終的にはあつはんうっふんな事になるんだ」

「どんな事だよ！？」

「そして最後の相手は衛宮で衛宮が言峰に自分の固くて太い」

「ちよっ！？」

「……………強靱な武器を言峰に突きさすんだろうなあって。まあその強靱な武器がどんなふうにいるかお前らの気持ちははわかんねえよ？」

ただオレは衛宮が最終的に言峰へ短剣を突きさしてめでたしになるって事を知ってるだけだからさ

ああ、そうさ。オレはただ単にそうなる可能性を述べただけで例えば遠坂とか桜とかが脳内妄想絶賛展開中で溢れんばかりの思想が周りのみんなにばれてたとしてもしらねえよ」

「「あわわっ!?!」」

慎二の言葉にパタパタと両手を振りながら誤魔化そうとしている遠坂と桜がいて、衛宮が凄く落ち込んでいる

「それでだな。言峰の事なんだが、知っているだろうしソレがヤバい事につながる事も知っている

例えば今回の聖杯で願いをかなえるとして……そうだな、遠坂が大金持ちになりたいって願いを聖杯に託すとするだろ?

そうするとだ。実際遠坂は大金持ちになる事になるんだがその過程が良くない」

「過程?」

バゼットが首をかしげながら慎二に問う。慎二もその問いにコクンと頷いてさらに続ける

「そう、穢れていなかった時の聖杯ならそのお金は魔法の様にどこからともなく出してくれるんだが今の聖杯は違う

金のある場所から無理やり引っ張って来てそこへ呼び出すんだ。で、オレが危惧していた点はココ。もし臓硯が“永遠の命”なんて願いを叶えようとしたらどうなっていると思う?」

慎二のその問いに皆がハツとなる。慎二の話が本当だとすると

「……永遠の命って願いは他の奴の命を削って生きなが得るって事かよ」

ランサーの言葉に慎二は頷くと。喋り過ぎて疲れたのかふうと一息つく

その際ボソリと何か言ったがほとんどの者は聞こえていなかったようだ

「 ちょっと待ってよ慎二。なんでわたしが大金持ちになりた
いなんて願いを叶えなきゃならないの? 」

「 だって守銭奴じゃんWWW 」

くっそ遠坂の奴め。女の子の癖にひざ蹴りをかまして来やが
って

俺はそう悪態を吐きながら衛宮の工房……って言うのはアレなく
らい残念な場所だけど、要はそこに来ている

辺りを見回せばガラクタばかり。変な形をしたナイフや根元から
折れている扇風機。はたまた鍋やお玉などなど

統一性など何もなく本当に衛宮らしからぬ汚さだ

「…なあ、どう思う?」コレ

「……………」

そう言いながらオレはライダーにポイッと辺りに落ちている物体
を投げ渡す

ライダーはそれを掴むと品定めをするかのように見つめ握りしめ
その瞬間、まるでそこには何もなかったかのように塵になって消え
ていく

キャスターはと言うとしかめっ面を隠そうとせず盛大な溜息を吐く

「カラ、ですね。なにもない。空っぽの存在」

ライダーの言う事は尤もだ。あらゆる物には中身が存在する。ど
んな物でも人が作っているのであればそれには重みがある

気持ちの重みと言うのは意外と物に移りやすいんだ。だからライダーの言う“空っぽの存在”と言うのは実はこの世にありそうで一番ないモノなのかもしれない

「キヤスターは？」

「まず最初に思うのはね。よくまあ、今まで無事に生きてこれたわね。あのボウヤは」

キヤスターの言葉に　確かに、と思いながら頷く

衛宮のこの魔術はかなり希少価値が高いものだ。そんなの魔術教会に見つかってしまえば一生涯なんて無い永遠の研究対象として生涯を生き続けるだろう

「ああ、意外に簡単に永遠の命が手に入るな。アイツは」

「しかもお金も入ってくるから困る事なんて一生ないわね」

「唯一の困りごととは外に出る事はおろか動く自由も与えられない事でしょうけどね」

ふざけるような感じでそう話す。実際、衛宮が捕まればそうなる事だろう。ああ、これをネタに色々な交渉が出来そうだ

そう思いながらふと足を止め、少し広い所に出る

そこだけは結構綺麗にされていてよく衛宮がここで寝ていて桜に起こされると言う新婚夫婦劇場発生地帯と呼ばれる場所か（オレ命名）

「で？元家主としてはどう思うんだ？アーチャー」

オレがそう言いながら振り返るとそこには双剣を握りしめたアーチャーが実体化して現れている

その眼光はまさに鷹。射抜くような視線と言うのは生れて初めて受けた

臓硯とはちがう全身に重たく纏わりつく様な殺気ではなく完全にオレの急所だけを狙い撃ちにするような視線と殺気だ

シヨンベンちびりそうになったがキチンとケツの穴と膀胱を締め耐えた

「君は、何者だ？」

「間桐慎二“だった”者だ。しかしどうやったらそう変わるかな？服のセンスもどうだよ

ああ、けど“体は剣で出来ている”だっけ？アレはセンスを感じたな。めっちゃかっこいいな」

「っ」

オレの言葉に驚きを隠せなかったアーチャーがさらに眼光を強めるライダーとキャスターはそれを見てオレを護るように前に出てくれている

何というか、嬉しいんだがなんか女性に守られている感じは少し複雑だ

「キャスター、ライダー止める。アーチャーはオレを殺しに来たんじゃない。話し合いに来たんだ」

「ですが…」

「もとより、殺すつもりならすぐ後ろを歩くなんてアホな真似はする筈がないだろ？アーチャーの能力を活かせるような広い場所に出た瞬間に狙いうちをすれればいい」

剣を持っているのは護身用みたいなもんだろ？」

オレの言葉にふうと一息ついたアーチャーは構えを少し解くと同時に剣も収める

それを見たオレはライダーを片手で少しどかせながら前に出る。

今から行つのは話合いだ

使う武器は自分の言葉だけで十分。それでも足りなければ動作で表現してやればいい。なに大丈夫だ。力技じゃなく会話ならこちらにも分はあるさ

さあてと、始めるかな

「先ず単刀直入に聞きたい。君はまだ隠している事があるな？」

「ああ、あるさ。それが分かったからわざわざ俺の後に付いてき

たんだろ」

「ほう、私が付いていく事は計算済みだったのか」

「お前ほど切れ者の奴がまったく真意を話していないオレに警戒心を持つのは必至」

「だったら遠坂の事を一番に思うお前がとる行動は一つ。オレがさっき話したさらに奥の事を聞きに来るのは当然だ」

「なるほど。先程の会話の最後に何か言ったような感じがしたがアレは私を付いてこさせるために取った助長行為か」

「正解だ。セイバーは霊体化できないからこっそりつけてくるようなことはまずしない。ランサーはどうか知らないがアイツもこんな行動は嫌いなはずだ」

「その点、警戒心が強く忠誠心も強いお前なら来てくれると思うてな」

「この会話が凜や他の者に聞かれているとは思わないのか？」

「お前ほどの切れ者が自分の正体が明かされる可能性があるかもしれないにそんな行動をとるはずないだろ？」

「ではなぜ？私だけに聞かせようとしてくれるのかな」

「そりゃあ、お前があの中で一番冷静で合理的な考えを示してくれると思ってたからだよ」

「今から話す事を聞けば衛宮なんか飛んで出て行きそうだしさ。セイバーも便乗しそうだ」

セイバーはよくわかんねえからな。普段冷静な行動を取れる癖に妙に青臭いと言うか、正面突破が好みと言うか　そう言う分じゃ衛宮とセイバーの性格は似てるな」

「……一つ問おう。私が警戒心の強い者と知りながらなぜ自らの命を危険にさらすような真似をする？

下手をすれば殺されると思わなかったのか」

「大事な情報源かもしれないオレから情報を聞かず殺しに来る可能性の方が低いと思ったから

それと、お前がオレを殺すとなればオレがお前たちに対して敵対心を向けたり、遠坂を危険な目にあわせない限りは大丈夫だろ」

「何故そう思う」

「お前がエミヤで遠坂凜の事を愛してるからだ」

「……………」

「人つてのは変わらない。なかなかね、その点で言うとお前は変わったように見えるが根本的な部分は変わってないな

まあ、ソレが分かっているから衛宮士郎を殺したいんだろ？お前は　人が変わる者だと分かっていたら殺すはずがないし何よりお前がやるうとしてる事は八当たりでしかないぞ」

「ならばどうする？この場で私と闘うかね？」

「そうはいつてないだろ？衛宮を殺すのはチヨイ待ってて言ったんだ。アイツは使えるし何より変わるかもいしれない」

「なかなか変われないと言ったのは君だろう」

「絶対変わらないなんて言っていないからな」

ふう、とアーチャーは一息つく。オレが言ってるのは単なる屁理屈でしかないし根拠もない

なにより確証が無いのだからこの話にアーチャーが乗る保証はない

「…よっぽどこの私を出し抜けるのが嬉しいと見える」

保証はないがアーチャーほどの奴が自分の置かれている立場を理解できない筈もない

「…アーチャー、人同士の力関係なんてもんは状況によって変わってくるもんだろ」

オレがもしこの事を遠坂たちに話せばどうなるか そんなモノ簡単だ。例え遠坂が信用すまいとしようとも疑いが出てくるのは必ず信用してくれば御の字だが信用されなくともだ不自然な綻びがアーチャーと遠坂の間に生まれアーチャーにとってはいい方向には

向かわない事は誰が見ても分かる

「まあ、いいじゃねえか。本題に戻ろうぜ」

そうやってオレ自身から話を打ち切って本題に戻す。アーチャーとはこんな話をしたいんじゃないやねえ
もっと重要な話があるんだからな

「……………」

だが、アーチャーは腑に落ちないような目だ。まだ俺を疑っているらしい

確かに疑う要素は十分だけでも

「そんな目をすんな。ほら、可愛いお前の顔が爺臭いぞ」

「……………ふう」

別に、君を殺してしまってもかまわんのだろう？？」

「かまえよバカ」

ちよつとしたオチャメじゃないか。そんなに怒らなくてもいいだろ？

「まあ、君を殺すのは後回しにしておいてだな」

「結局殺すのな」

「君が敵だと認識した時は殺させてもらうさ」

おおこええ。ありゃマジな目だ。本気で殺そうとしてる目だなあ
オイ

「じゃあ、そうならないためにもお前とは絶対手を組まないとな」

「ああ、私を納得させてくれる話を聞かせてくれたまえ」

V a i c e / s t a y n i g h t (前書き)

衛宮家の団欒場所が今は異様な空気に包まれている
間桐慎二がその場を去りアーチャーはと言つと見張りをすると
言うので出て行ってランサーはぐーすか眠っている

唯一の奔放者はこつこついう空気になるのを知ってか知らずか早々に
戦線離脱をした模様だ

「 がーごー……んん、つん……………でれ」

「 ………………ガンド」

「 ヲう!?!」

その模様が気に入らなかつたのかアカイアクマがランサーに弾丸
を放った

決してツンデレと言う言葉が耳に入った訳ではない。たださつき
まであんな話を聞かされ頭の中がこんがらがっている自分に対し何
事もなかったように眠っているこの青いタイツマンにイラッと来た
だけなのだ

「ハア…なんで貴女のサーヴァントはこんなに緊張感が無いのか
しら」

「なぜ？と言われても分かりません。可能性があるとするならば生まれつきか生まれた後に頭のネジが飛んだかのどちらかと」

「…そう、なら前者ね」

と、過去の英雄に対して失礼極まりないことを口走っているのは遠坂凜とバゼットだ

そして生まれながらに頭のネジが飛んでいると言われた英雄は遠坂のガンドでゆっくりと起き上がった

短い時間ながらかなり熟睡していたのか目にはうつすら涙が浮かんでいる

「あの…大丈夫ですか？ランサーさん」

「ん？ああ、大丈夫だよお譲ちゃん。アンタは良いなあ。数少ないオアシスだあ」

「えっ、きゃっ！」

ランサーは寝ぼけているのかそれとも確信犯か、いきなり桜を抱き寄せ膝の上に座らせる

桜はと言つと突然の出来事に驚いて行動に移せていない模様だ

「ランサー！何をやっているのですか！」

「んな怒んなよバゼット。単なるスキンシップじゃないか」

「セクハラにしか見えません！離しなさい！」

バゼットが怒るがランサーはどこ吹く風と言ったような雰囲気です。桜を離そうとせず口笛まで吹きだした

桜はと言つとどうにかその腕から出ようとするが体勢と力関係によりまるで意味をなさない

そこへお茶とお茶菓子を持ってきた衛宮とセイバーが居間に戻り衛宮はその惨状を見てランサーの腕を掴み必死に桜を助けようとしセイバーは必死な目でお茶菓子を睨んでいる

一応、衛宮の了解なしには手を付けようとしなれているが姿勢がかなり前のめりだ

(……………なんなのこのカオス状態は)

遠坂凜はそれを目撃してさらに不機嫌になる。それは当然と言えば当然かもしれない

自分は小さいころから訓練して精神の鍛錬して聖杯戦争のためにしっかりと準備もして来てその為の宝石代とか馬鹿にならなくて…

「オイランサー！桜を離せよ！」

「ん？何だ坊主お前もお譲ちゃんを抱きたいのか？」

「え　先輩に抱いてもらえるなんて……………あ、でもまだ私そんな

関係では…いや、ですがこれは千載一遇のチャンスの予感が」

「桜！本気にしなくていいしランサーもテキトーな事言うなって！」

それでもどうにか勝ち抜くために最優のサーヴァントのセイバーを召喚するために色々勉強して必要なものを揃えたりそれにかかるお金とかいろいろあつて贅沢なんてできないのを我慢して我慢して、ソレが折角引き当てたのがあの皮肉抜群のアーチャーでそいつが全く言う事聞かなくて令呪を使う羽目になって

「マスター、まだ……ですか？」

「あら、シロウ君はもうセイバーに手を付けたのですか。ちゃんと手順は済ませたのですか？」

「おお、バゼットの言う通りだぜ。女性には優しく真摯に接するのが基本だからな」

「違うだろ！？明らかにお菓子を食いたくて仕方がないって感じだろ！？　ってか桜も本気にすんな！」

遠坂は思う、ああ何でこんなことになっているのだと。こんな喧騒になってしまった理由はなんなのだと…　ってかこんなコントを見るために聖杯戦争に参加したんじゃないのに…

（　　）　　そうだ、これは全部慎二が悪いんだ。そうしよう（　　）

たちまちの責任とこれからこの後に慎一の腹に一発ぶち込むことを決めた遠坂凜。それと同時にもう一つ腹を決めスクツと立ち上がり

「ああ！もうくそっ たれが！うっさいのよアンタらは！！！」

「「「……………」」めんなさい」「」

色々キレたアカイアクマがその場に降臨した

「さて、どこから話したらいいものか」

慎二は色々と悩みながら自らの頭の中の整理を行う。アンリ・マユの事をいきなり話してもいいが重要なのはそこまでに至る過程だ結果だけ述べてもアーチャーは納得しないだろう

「……よし、じゃあまずは聖杯戦争の起源から話すとするか」

「起源……？それが“穢れた聖杯”と関係あるのかね？」

「さあ？けど纏めるのも面倒だしもう全部話すことにするわ」

慎二の言葉にアーチャーだけでなく隣に居たライダーとキャスタもポカンと口を開ける

それでは容量が悪いしなにより相手に伝わるのか

「バカめお前ら。伝わるのか？ではなくお前らが理解しやがれ」

「……なんとと言う独裁的考えなのでしょうが」

「そうね、って言うか何でまとめてこなかったのよ今まで」

キャスター、ライダー共に呆れた感じで呟く。こんな話になる事は百も承知のはずなのだから要点だけまとめればいいモノなのだ。だとすれば前もって準備しておくのが普通だろう。

「まず第一次聖杯戦争の事から始めるぞ。よく聞けよ」

「…無視ですか。わかめ」

「失礼なワカメ」

「アーチャー！あいつ等がいじめる！」

「気味が悪いな…もとい君が悪いな」

「ヒドす(´・`・´)」

そんなこんななやり取りをお約束の様にすませた慎二は気を取り直してさっそく話した

まず第一次聖杯戦争勃発前、今から2000年ほど前にアインツベルンとマキリが日本に上陸を果たした

端的に話すならばそこで第一次聖杯戦争の準備を十年間続けその間に土地の提供をした遠坂の家も加わるようになった

第一次聖杯戦争では今とはかなりシステムが異なる、と言うよりシステム自体が無かったと言った方が正しかったのかもしれない。なにより当時のマスターたちの“参加者”という意識はかなり希薄だった模様でさらには令呪すらもなかった。

当然、サーヴァントが人間の言う事を聞くはずもなく儀式は失敗に終わった。

「ま、当然と言えば当然だよな。英雄であるお前らが何の弊害もなしにしかも勝手に呼び出されて言う事聞けなんてありえんわな」

「人の傲慢から打ち出された結果ね」

「……ああ、けどなキャスター。人は良くも悪くもそこから学ぶんだ」

第二次聖杯戦争はそれから60年経って起こった。慎

二の言う通り三家の跡取りは過去の失敗を成功へと導かせるため色々な事を学び実用化した。

その一つが“令呪と言うシステム”だ。これが大きな進歩でありその時代の人間が過去の英雄を従わせることが出来ると言う離れ業をやったのけ今のマスターとサーヴァントの関係を造り出した。

だが、またもや今回も失敗に終わる。この時の聖杯降臨地は柳洞寺ではなく遠坂邸だった。

「第二次聖杯戦争は、まあそんな大きな問題ではなかったんだけどその時は遠坂の家に聖杯が降臨したんだよな」

「聖杯の降臨地には規則性が無いと…？」

「違う違う、オレの言い方が悪かったな。ただしくは戦争のたびに姿を変えるのが聖杯なんだ」

それからさらに歳月をかけ第三次聖杯戦争が始まる。

この際に行われた時期も悪く世界各国で戦争が起こっていた

無論、聖杯の情報をキャッチした国もある。帝国陸軍やナチスなども加え小聖杯をめぐる戦いが起こっていた

なぜ情報が漏れたのかは定かではないが所詮、情報とは人の胸の内に秘めるだけしか出来ない言わば鍵が緩い宝箱みたいなもの

管理しているのが人なのだから脅しや誘惑、詐称や潜入など様々な方法で聖杯の情報を掴むことなど思うより難しくくない

そのような様々なめぐり合わせや時代が戦時下と言う事もあったがそれよりもアインツベルンが呼び出したサーヴァントが最悪を極めた。それがアンリ・マユ　アヴェンジャーだ

「けどな、アンリ・マユ自体は四日後に殺されてシステム通り聖杯へと取りこまれたんだが」

「それが拙かった、と？」

「ああ、みんな気付かなかったんだろう。それに今までの失敗はどうか後世に対して何とかやりなおせる程度のもだったのが今までの救いだっただが今回ばかりは違った

アンリ・マユってのは小さいながらも小世界の村落でその世界

の善性を証明するために世界全ての悪を背負わされた一人の青年だったんだ

そしてその小世界の人々も彼を“悪の象徴”である事を願った」

「ちよつと待ちなさいよ　それってまるで……………」

「奉られた“神”の様なものじゃないですか」

キヤスターとライダーの言葉に慎二は頷く。経緯はどうであれ理由はどうあれライダーの言葉に間違いはない

だが一つ違うのはアンリ・マユは本当の神ではなかった事。だからこそ召喚に応じる事が可能となったのだ

さらにはアーチャーが呟いた不味かった事とは聖杯に取り込まれた時に起こった“負の奇跡”だ

願望機としての正常な力が生前、アンリ・マユにかけられた人々の願いを受理してしまった

「アンリ・マユはある意味で魂のみの存在だ。生前からアレに意志などほとんどないだろうな

まあ、だからこそ聖杯により馴染んでしまったんだろっけど」

「人の業が成せる業ですね。自分は善だ。悪ではない、それは他に居ると思いたいからそのような所業に出してしまう」

「そうね、けどそれが結果的に自らの首を絞める事になるなんて

誰も思い話しなかったんでしょっけど」「

確かにそつだ。キャスターの言う通りまさか

“悪の象徴”が要ると言う願いから大聖杯を子宮に悪の力を授かり受肉し第三魔法の実現例としてこの世に生まれてこようとしているなど誰も思いはしないだろう

.....

「ふう……」

オレは一通り話し終えて溜息を吐く。いや疲れた。マジで

終わったたらどうしようかなあ。キャスターに膝枕：いやライダーともふもふしたいなあ

よし、両方しよう

「させる訳ないでしょ」

「まったくです」

ツンデレとクーデレですね。わかります

そんなアホな事を思っているとアーチャーが何かさつきから考えてる
…ハゲるぞ？

「君の話の聞くとだ…最初の方は要らなかったと思うのだがね」

「それ言うな。オレも言って後悔してんだ」

ホント、喉がカラツカラだし。いやでもね、なんか必要な事があるかもしれないでしょ

ホラよく言うじゃんか問題の答えが分からない時は最初から読みなおしなさいって。学校の先生に習ったでしょ？

「…だが、有意義な話だった。君が最初、聖杯に願いを叶えるとロクな事が起こらないと言っていたがなんとなく合点がいく

確かに悪意が加わった聖杯に願いを叶えてもらっても仕方がない

いな

願いを恣意的しつてきに捻じ曲げて解釈するのは悪の常套手段だからな」

そうそう、大体何でも叶える願望機つて事態胡散臭いけどね
そんな七つ球を揃えて龍を出す漫画じゃないんだからさ…あ、こ
れはゲームか

ああでも第一次聖杯戦争の時つて思い返してみるとグダグダで終
わってそれで死んだ奴つてかわいそうだな
大体さどんな願いを叶えたかつたんだろうな。願いを叶えるつた
ってアンリ・マユじゃな…いけど…あれ？

「
」

「シンジ？どうしたのですか。急に黙り込んで」

「いや、ちょっと待て。なんかおかしいぞ」

「君の頭がかね？」

うるせっアーチャー。お前の逆立ち白髪よりマシだボケ

「なにがおかしいのかしら？慎二」

「いや、なんか変な違和感がするだけなんだ」

そつだ。なにもおかしい所はないはずなんだ。けど何だ？この感じ

何か隠されている感じがするこのスッキリしない感じはいつた
い……

特別おかしいとこなんて無い筈なのに、アンリ・マユがいて聖杯が穢されていてまあ確かにそれ自体がイレギュラーな事には間違いないんだがそつじゃなくて

「…もつと根本的な事なんだ。そんなイレギュラーな事じゃなくて
もつと」

「なにか重要な事なんですか？」

ライダーが心配そうに顔を覗き込んでくるがオレは首を横に振り大丈夫だと告げる

確かに違和感を感じたが多分何も無い筈

だからオレはこの話はそこまでにしてアーチャーにどうするかと聞いてみる

「…？なにがかね」

拝啓、おばあちゃん。失礼ながらも英霊を殴りたいと思って申し訳ありません

ですが仕方ないのです。くそイラツと来たもので

「ああ、無論手は組ませてもらおうよ　と、言うより組むつもりだっただが」

「あれ？じゃあ何で俺はあんな説明したんだ」

アーチャーが言うにはもともとアーチャー自体の真名を知っているんだからそれはバラされたくはないんだと

んで、まあコツチは人質を取ってるようなもんだから幾ら信用が少ないとはいえそれをネタに脅してくればいいモノのそれをしないなんてバカだなんて目を見て言ってきた

ハゲる英霊め

まあ、オレの話し方や目を見てとても嘘とは思えなかったからさらに信用を勝ち取ったと思えば喉の渴き具合なんて屁の河童だ
ってかノーリスクだったのね。オレが話した意味ってなかったんだね

「ハゲろ英霊め」

「ワカメヘアの方がハゲやすいがな。統計的に」

「しってんよ！くそっ」

オレが慎二に憑依してからの心配事がコレ……ハゲたくない

「そうか！聖杯に頼めばいいんだ！そうすれば世界的にも安全じゃねえか！」

「全世界がハゲたらどうするのよ」

オウウ、その考えはなかったよキャスター

T r a u m / s t a y n i g h t (前書き)

暗い暗い闇の地下室。それはどこまでも続くかのような終わりのない空間

感じるのは纏わりつくような死骸の異臭と血の匂い
鼓膜を刺激し不穏な音が常に自分の身体の中に入り込んでいる

五感の全てを不快で刺激するような一室では二人の男女がその身を交わす

「いやあ！　いたい！　いたいよあ！」

「黙れエ！　お前はジツどおしていればいいんだよあ！　そうずりや　ヒック、殺しはしないんだからさあ」

ただそれが小さい女の子と大の大人でなければソレは唯の変わり者で済んでいたのだろうか

男は少女を力で押さえつけ抵抗できない事をいい事に問答無用で犯し続ける

なんだ、これは

そう思わずにはいられなかった。これは夢か？ならばなんて最悪な夢なのだろう。反吐が出る？目を背けたくなる？いや違う

……ああ、殺したい。この目の前の映像を

これが素直な感情だ。こんな糞みたいなものを見せられて我慢などなるものか。誰だこの男は？　いや、知りたくもないし知る必要もない……………だって

コンナニ、コロシタイノダカラ

ふと見降ろしてみると自分の手には釘剣が存在していた。不意に取りだしたモノなのか元々持っていたモノのかは分からないが別にかまわない

そう思い機械的に迅速に相手の頭を撃ちぬく作業をその場でやってのけ溜息を吐きながら釘剣を手元に戻す

やはり、これは

ライダーは自分の手応えがない事と目の前で行われている事が代わり映えない事に多少落胆する

分かつてはいるがやはり不快なものなのだ。幼きけれど自分の
が犯されているのは

「いつ……やだよお…なんでえ」

「へっ、へっ、あの爺からの命令であら。悪く、っん、思うなよ
オ？」

男の目はかなり目が血走っている。生れ付きなのかと言っぐらい
赤く染め上がり焦点は合っていない

頬も赤く手なども小刻みに震えながらその少女の体を強く抱き倒す

言葉もところどころ留まるような感じで呂律も回っていない感じだ

正気で無いのだろうか。少女を抑えるその男の腕に加減など感じられない

「はあ、はあ、へへ……大体、この家に来た時点でえ……！！お前の運命なんぞ決まってるらよオ！」

「い、いやあ、　　助けてよオ　　……………だれかあ」

消えるような少女の声に答える者など誰もいない誰も助けに来ない。来るのは絶望、ただそれだけ

少女は知らない。この絶望は長く続くと言う事を

少女は悟る。自分にはどうする事も出来ない

少女は後に理解する。この行為が未来の自分を苦しめ続けていくと言う事に

「助けてよオ……………おとおさん、おかあさん　　おねえちゃん」

だが、今は何も知らないこの少女が出来る事は只助けを呼ぶしか出来ない

それが彼女の心の支えになるのだ。決して無駄な事でも希望を持つ事が少女の唯一の対抗手段ではない
それがどんなに虚しく叶わない事でも

チュン、チュン

小鳥の囁ささやりと朝日と共にライダーはうつすら目を開ける。時間にして一分かソレ以内か、随分長く感じたようだ

自分の目の前には能天気な顔で隙丸出しのまま寝ている自分のマスター、間桐慎二がいる

クスリ、とライダーは口が綻ぶ。昨日、アーチャーとあれだけの論戦を繰り広げた人物と同一人物とは思えないくらいだ

あの時の慎二の目は自分の意思をはつきりと伝えるべく良い目つきをしていた。ライダーにとってあの時の慎二の目はひどく羨ましく感じた

ライダーには基本、自主性と言う物がない。無口だと思われがちだが実際は頭の中で色々な事を考えている事が多くただそれをうまく表現できずに終わっているからだ

…まあ、その理由の一つに自分自身に自信がないと言つとても大きな理由があるのだが

「シンジ、起きてください。朝ですよ」

「ん……んん、わかった」

だからライダーは自分の中で色々考え決断をし先程見た映像は慎二に話さないコトとする

話した所どころにかなる訳でもないしコレを話して慎二を困らせても仕方がない。ならば自分の胸の内に秘めておけばそれで良いなに、そんな難しい事でもない。話さなければそれで済むのだから

「はあ……よ、ライダー」

「ほら、おほいおほいおほい。おほい。」

T r a u m / s t a y n i g h t

朝の衛宮家は質素でも豪華でもなく至って普通だった。いつもは三人の食事だけで済んでいて時に藤村大河が駄々こねて少し豪華な朝ご飯にするくらいだった

「あ、おはようございます。にいさん」

「……………はよ」

そしてそれを知っているのはいつもの三人だけだがこの朝食はいきなり他人の誰かが見てもおかしすぎると分かる

どれくらいおかしいのかと言うとあのアカイアクマが凄く朝から爽やかと言つくらいおかしい

「あ、おっはよー！間桐君。ほらほらお寝坊さんだよ。速く席についてよねえ」

「そうです。はやく座り遅れた事を土下座して謝罪するべきです」

どごその虎と王が慎二に速く座れと促す。じゃないと食べられないだろうがコラア、なにチンたらしてんだこのワカメのような目線で訴えかけてくる二人を目の前にしたら慎二も行動を移さずにはいられない

「桜、ご飯」

「はい、にいさん。少し待っててくださいね」

とりあえずは空いている場所に座り桜が慎二のご飯を持ってきた所でみんな合唱をして頂くことにする

（朝から刺身とはすごく豪勢だな。しかも唐揚げにサラダ、味噌汁と天ぷら？衛宮んちにそんな金ってあつたっけ？）

そんな事を思いながら慎二は箸をすすめる。只の刺身ならそうは思わないだろうがそこにあるのは活き造り

しかも鯛と来たものだから驚きは隠せない

「残念でしたね。慎二君」

「ん？なにが？」

と、ここでバゼットがふぶん、と鼻を鳴らしながら自慢げに話しかけてきた

ただその時に箸をクルクル回していたのを士郎に注意されたのはまた別の話

「先程までこのお魚はピクピク動いていたのですよ。アレは素晴らしいらしい

まさに芸術の様でした。日本の食事文化にあんな調理方法があるとは　ですがそれを実行できる士郎君もまた素晴らしいです」

「あ、いやそんなこと」

「いいえ、メイガスの言う通りです。士郎の料理は実にすばらしい。もつと誇るべきです」

士郎が顔を赤くして恥ずかしがっている所とか、それを桜が嫉妬の目線で見ているとか、ランサーがそれを見てニヤニヤしている所とか

遠坂が「くつ、負けるもんですかっ！」と悔しがっていたりとか、アーチャーが自分の料理理論を振りかざし愚痴を言いながら食べたりとか、トラがおかないなしに食べたりとか

キャスターとライダーは珍しいのか少し慎重になりながら食べて

いるとか色々な状況ではあるが

(……まあ、少なくともこれから戦争始める奴らの面持ちではないよな)

なんて慎二が冷静な事を考えていると不意に殺気を感じる

それを察知し一番の唐揚げが乗ってある皿を即座に持ち上げその後から黒い影が一瞬にして横切る

「　　っ、セイバー何しやがる」

「ふ、よく避けましたね間桐慎二。ですがもう逃げられません。食卓とは戦場なのです」

(前言撤回。セイバーだけは狩人の目だ)

セイバーは自分の箸けんを持ち獲物おかすに狙いを定める。慎二はそれを護るべく臨戦態勢マシに移る

互いの目は本気でいまにも飛びだしそうな雰囲気だ

「お前にも自分のがあるだろう」

「ふ　　異な事を…もう頂きました」

だからと言って相手の物を取るのにはマナー違反だが今のセイバーにそれは通用しない

自分の物は自分の物、他人の物も自分の物と言うジャイアン魂を掲げているのだから

たかが唐揚げだけどねっ

「よく言ったセイバー……ならば、覚悟はできているな」

「覚悟？そのような物は必要ありません。居るのは奪う心　　す

「あの……おわかり有りますから」
「なんと!?!」

ただまあ、桜か衛宮にそれを頼べばそれで済む話だったりするから非常に無駄であることには変わりなかった

.....

そんな朝の日常な出来事を終えオレ達は学校へと向かう。まったく、せいばーんには困ったものだな（ぷんぷんっ）
少しは淑女のたしなみを持ったらどうなんだまったく…

「どっちもどっちよ。ほら、桜と慎二は部活があるんでしょ。話してないで行きなさい」

遠坂のツン期って長いよな。ってか遠坂も衛宮の家で住むようになったぞ。なんかアーチャーに説得されたみたいな感じだったけどなんでオレが怒られた？

アーチャーめ余計な事を言ったな。そんなんだから2チャンネルでは（ノ、）アチャー　なんてバカにされんだ覚えとけ

「ああ、もうっ　ホラ慎二襟が曲がってる」

「え？どこよ？」

ぐるりと一瞬周囲を見てしまう。まあ、そんなことしても自分の首元だから見える筈が何のになぜかこれってよくやるよね。本能かな？

まあ、そんなアホな事を考えてると遠坂が溜息を吐きながら衛宮に自分の鞆を渡しオレの懐に入り込んでくる

やるか？やるのか！？　怪我するぜ、やめときな

「誰がよ」

「……主にオレが」

はい、遠坂さんには勝てる気なんかしませんよ。絶対無理ですもん、八極拳なんて使われたらそりゃ　パンツ見るでしょ普通

んで、見ながらオレはボコられる訳よ。どこのマゾ男だよって思うよ

「いいからほら、ジツとしてなさい。直してあげるから」

「ん、んん。さんきゅ」

ああ、ヤバいな。なんか恥ずかしい……………はっ、これが柳洞の

言ってた目狐の誘惑か！ くそっ、引つかかるもんか

いい匂いするんだな遠坂って

「…ヘンタイ」

「仕方ないじゃん！ 健全な男子だもん！ どう考えてもいい女と密着したら反応するのが普通だろ！」

男の性には逆らえましえんよ。無理ですもんだっておとこのこだからb yワカメ

「……………」

「遠坂？」

あれま。遠坂さん固まっちゃってどうしちゃったんだ

そんな遠坂の様子がおかしい事に助けて欲しかったオレは衛宮と桜の方も見たけど何か二人も固まったって　なんで桜は少し唸っているんだ。こわいですよ

「　にいさんっ　行きますよー！」

「お、おいつ？」

それもつかの間いきなり桜がオレの腕を引つ張りだした。どこにそんな力が？と思うくらい強い力で引つ張られたもんだからオレとしてはどうする事も出来ずとりあえず

「あつ！　じゃあな衛宮！　先行ってるわ！」

「あ、おつ………」

衛宮に一応伝えておいて遠坂の介抱も一緒をお願いすることにした。ああ、いやまあどうする事も出来ないしね！　嬉しいけどね！

桜のおっぱいがオレの腕に　　ゴホンゴホン、　まあ

「おっぱいサイコー……！」

「なにを言ってるんですかにいさん!？」

T r a u m / s t a y
n i g h t
(後書)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1400n/>

Sinji/stay night

2011年10月31日00時37分発行